

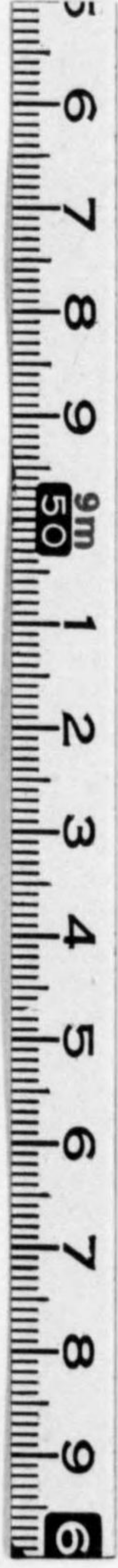
64-247



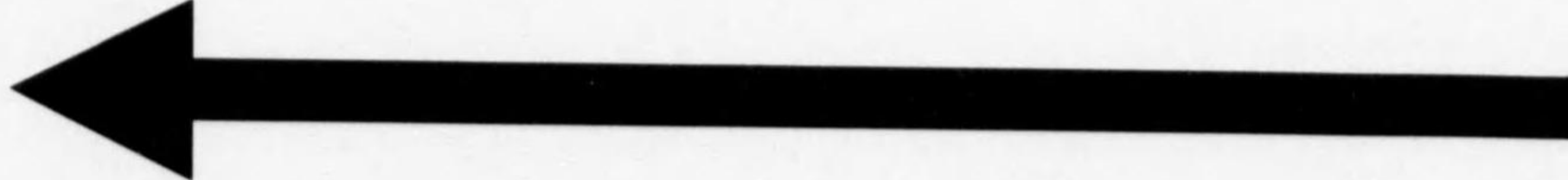
1200501278103

4

247



始



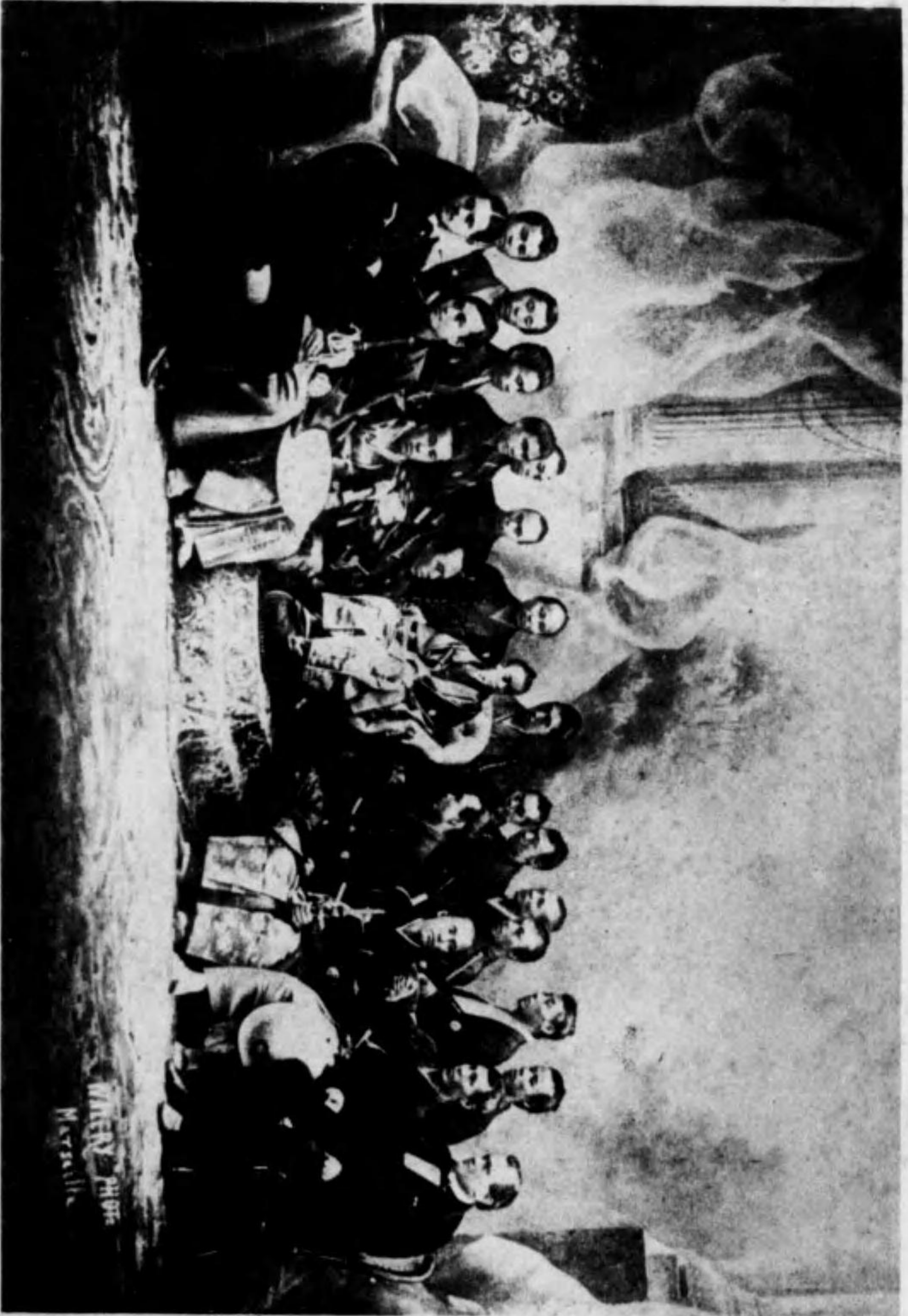
工6P17



澁澤栄一滞佛日記



包中史
籍歸唐



行一員委遣派會覽博國萬里巴 ユイセルノ國佛於（日五月四年七六八一）日期月三年三應慶

御儒者次席翻譯御用頭取

箕作貞一郎 (崎祥)

外國奉行支配副役

日比野清治

外國奉行支配役並出役

生島孫太郎

外國奉行支配通辯御用

山内六三郎 (堤雲)

外國奉行支配副役

杉浦愛藏

中興番

三輪端藏

同 大井六郎左衛門

同 加治權三郎

同 皆川源吾

同 服部潤次郎

砲兵差圖役勤方

木村宗藏

奥語醫師

高松凌雲

小人格砲兵差圖役勤方

山内文次郎

御勅定格陸軍附副役

澁澤篤太夫 (榮一)

佛國領事

レオンジュリー

外國奉行支配組頭向山公使附)

田邊太一

駐佛公使(若年寄格)

向山隼人正一履 (黄村)

小姓頭取

菊地平八郎

徳川民部大輔昭武 (十四歳)

小姓頭取

伊坂泉太郎

作事奉行格小姓頭取(保博)

山高石見守 (信繼)

歩兵頭並

保科俊太郎 (陸軍大佐)

英國公使館付通辯

アレキサンドルホンジーボルト

澁澤榮一滯佛日記

例言

一、本書ハ澁澤榮一滯佛日記ト題シ、徳川幕府陸軍奉行支配調役澁澤篤太夫ノ筆ニ成ル航西日記、巴里御在館日記并ニ御巡國日録ノ三書ヲ収メタリ。澁澤篤太夫トハ今ノ子爵澁澤榮一氏ニシテ、記事ハ慶應三年滯佛中ノ事ニ係レリ、

一、西曆千八百六十七年佛國巴里ニ於テ、萬國博覽會ノ開催セラル、ヤ、當時佛國ト國交アル諸國皆ナ高貴ノ人ヲ遣ハシテ、其會ニ臨マシム。時ニ徳川幕府佛國ト頗ル

交際ヲ厚フセシカバ、大將軍徳川慶喜ノ弟ニシテ、清水徳川氏ヲ相續セル徳川民部大輔昭武ヲ博覽會ニ遣ハシ、猶序ヲ以テ締約各國ヲ巡回セシメ、使事終ツテ後、數年間巴里ニ留學セシムル目的ヲ以テ渡佛セシム。目付山高石見守信離傳役タルノ外幕臣并ニ水戸藩士等隨行セリ。一行ノ乗船アルヘ一號慶應三年正月十一日(西歷千八百六十七年二月十五日)ヲ以テ横濱港ヲ解纜ス。

一、武藏國榛澤郡今大郡血洗島今八基村ノ出身ナル志士澁澤篤太夫學ヲ修メ、劔ヲ學ビ、天下ノ志アリ。文久癸亥歲同志ト共ニ横濱襲撃ヲ企テシモ、機未ダ熟セズトナシ、去リテ京都ニ上リ一橋家ニ仕へ、勘定組頭ヨリ御使番格ニ

榮轉シ、慶應二年一橋慶喜ノ入ツテ徳川宗家ヲ相續シ軍職ヲ襲グニ及ビ、隨ツテ幕府ニ仕へ、陸軍奉行支配調役ニ就キシガ、特ニ慶喜ノ命ヲ以テ民部大輔渡佛ノ一行ニ加ハレリ。本書收ムル所何レモ當時滯佛中ノ記錄ニシテ、觀察ノ範圍ハ歐洲ノ風俗習慣等ノ社會狀態ヨリ政治、財政、美術、工藝、軍事百般ノコトニ亘レリ。後二書ハ卷首ニ石見守ノ自署アルヲ見レバ、寧ロ公記ト認ムベク、記錄ノコト多ク澁澤氏ノ手ニ成レルヲ知ルベシ。

一、民部大輔一行差遣ノ事、別シテ巴里萬國博覽會ヲ中心トシテ幕府ト薩藩トノ衝突ノ如キハ維新史上重大ナル外交事件ナルガ、此ハ別ニ史書ノ存スルヲ以テ茲ニ

述ベス。本書ハ此等ノ事件ヲ研究スル上ニ貴重ナル史料タルハ疑フベカラズ。

一、本書ノ台本トシテハ、航西日記ハ青淵先生六十年史所載ニ據レリ、但シ傍訓ノ類ハ之ヲ省略ス。後ノ二書ハカツテ維新史料編纂事務局ニ於テ澁澤子爵家ノ原本ニ據リ謄寫セル副本ニ據レリ。而シテ今澁澤家所藏英國御巡行日録ノ草稿本ト對照スルニ頗ル出入アルモ、今副本ニ從フ。又渡佛使節一行ノ寫眞ト其ノ裏面ニ認めタル役名人名書ハ尾佐竹猛氏所藏ノモノニ據レリ。

昭和三年一月

日本史籍協會

澁澤榮一滯佛日記

目次

一航西日記	一頁
一巴里御在館日記	二〇五
一御巡國日録	三六一
英國御巡行日誌	四六五

航
西
日
記

目
次

二

航西日記



航西日記

慶應丁卯余與靄山杉浦子基從我公使使於泰西會法京巴里有博覽會五洲列國與法締盟者各差王族貴胄以莅其會或其君主有親自來觀者而我公使與焉蓋法之此會踵於英昔年之舉而更恢其規模洵曠世之偉觀足以震輝他邦也會畢公使回歷瑞白荷伊英諸邦靄山有故途歸余終始從事爾其所經歷各有所筆累々成冊矣東歸之後同移屋於不二山下耕讀之餘對牀把臂出往日之記談往日之事與夫西邦域邑之壯文物之盛以至炎海雪山瀛船鐵路風俗景物出於意想之外目眩而舌吐者共成一夢境而唯此區々冊子足以中於雪泥爪痕也乃有合輯纂正之約無幾余辱 徵書靄山亦先後出山王事鞅掌不能遂前約頃者大藏卿伊達公傳聞慙慙上梓嗚呼吾儕所記特身所歷已耳

目不遍語言不通要是漆桶苜蓿安足悉全象而世有未涉其境者或因爲臥游之資亦不爲無益也然則慙焉而藏之篋底寧如視焉而公之世上遂與嵩山謀公退之餘挑燈纂輯以附劄劄因思方今法與字戰兵敗王降當時稱雄鳴豫震輝他邦之蹟俯仰之間不可復觀何其衰之忽諸哉讀此書者或有感於此事則將有得於此書之外則吾儕所記亦將不止於區々臥游之資也

明治三年庚午冬十月

青淵澁澤榮一識

航西日記

卷之一

慶應三丁卯年正月十一日(西曆一千八百六十七年二月十五日)朝七時武藏國久良岐郡橫濱港より佛蘭西郵船(船號ルヘリア)へ乗組み送別の友人など本船まで来りしも多くねんごろにしばらくの別をつけ且此の港に來住せる諸州の人々歸省するものありて次第に乗組み同九時に發せりは一萬里外壯遊の首途なり折しも天晴風和ぎ海上穩靜にて伊豆七島も淡靄中に看過し遠江伊勢志摩など見えて夜に入りぬ

同十二日(西曆二月十六日)曉より北風にて波高く船動搖して過す午前九時紀伊の大島を右に見る午後一時頃土佐の地方を望む此の船の社長なる佛蘭人クレイといふ者篤實にて諸事懇切に取扱簡便にて事足り且日耳曼の人シイ

ポルトといへるは横濱に在りしが事充て、本國へ歸省すとて乗組けるが御國の語に通曉し専ら通辯をなし幸ひに便利を得たり

郵船中にて諸賄方の取扱極めて鄭重なり凡毎朝七時頃乗組の旅客盥漱の濟しころテーブル(餐盤なる)にて茶を呑しむ茶中必雪糖を和しパン菓子を出す又豕の鹽漬などを出すプールと云牛の乳の凝たるをパンへぬりて食せしむ味甚美なり同十時頃にいたり朝食を食せしむ器械すべて陶皿へ銀匙並銀鉾庖丁等を添へ菓子蜜柑葡萄梨子枇杷其外數種盤上に羅列し隨意に裁制し食せしめ又葡萄酒へ水を和して飲しめ魚鳥豚牛牝羊等の肉を煮熟し或は炙熟しパンは一食に二三片適宜に任す食後カツフヘエーといふ豆を煎じたる湯を出す砂糖牛乳を和して之を飲む頗る胸中を爽にす午後一時頃又茶を呑しめ菓類鹽肉漬物を出す大抵朝と同様に又フイヨンといふ獸肉鶏肉などの煮汁を飲しむパンはなし熱帶の地に至れば氷を水に和して呑しむ夕五時或は六時頃夕餐を出す朝食に比

すれば頗る鄭重なり凡肉汁よりして魚肉の炙烹せし各種の料理と山海の菓物及びカステラの類或は糖もて製せし冰漿グラスクリームを食せしむ夜八九時頃又茶を點し出す朝より夜までに食は二度茶は三度を常とし其食する極めて寛裕を旨とし尤烟草など吸ふを禁ず總て食事及び茶には鐘を鳴らして其期を報ず鳴鐘凡二度初度は旅客を頓整し再度は食盤に就かしむるを常とす若くは不食か疾病あれば醫をして診せしめ其症に隨て藥餌を加ふ此等の微事を載るは贅語なれども微密丁寧人生を養ふ厚き感ずるに堪たり因て其略を茲に記載せり

夕方英國郵船の先發して波間に駛行せる影みえて夜に入り雨風東に轉す昨日發船より此日正午まで三百里を航せり

同十三日(西二月十七日)雨風西に轉す午前十一時土井个崎(日向)を右手に見て鹿兒島灣(薩摩)を過ぐ名にしおふ海門嶽(俗薩摩不)も煙霧中に靉靄として時々其一斑を望み行々御國の影幽にして見えすなりゆく彼大船の纜きりはなちゆ

くといへる如く心雄々敷ありながらいと餘波おしきやうに思はる
同十四日(西曆二月十八日)風烈しく雨細し船の動搖甚しく折々風潮瀝ぎ來りて甲板を濕す或は窓より各室に入れて器械など覆ち餐盤に就く者稀なり終日室に入りて枕藉して皆沈黙せり楊子江の流末海面に注ぎ黄色渺々たり此の日二百八十里航せり

同十五日(西曆二月十九日)曇曉より楊子江に沂(此の江海口に注ぐ極て廣し河水溶々として昏濁綠黄色にて風濤洋中に異ならず)凡四十里許溯りて左右に分流し右は楊子江本流にて左を吳淞江といひて我淀河に倍する程なり布帆蒲席の支那船遠近に出沒せり

隋唐佳話に吳都松江鱸魚の膾を獻すと云所謂晉の張翰の秋風に蓴鱸を思ひし所ならむ

流れ分岐せる所向ふ岸は砲臺の蹟草樹生茂り故壘依然と存せるのみ清の道光廿二年壬寅年(我天保十三年西曆一千八百四十二年)鴉片の亂に大臣陣化成の戰死せしも此のあたりといふ坐に感慨の情に堪すます／＼沂れば兩岸楊柳の春しり顔

に處々村落の見ゆるもいと風情あり漸く帆檣の影林の如く人烟の稠きを認めなほすゝみて午前十一時頃碇泊せり少焉して支那人朱塗に魚眼を舳に畫きたる小艇を舫き來りて乗合の旅客に上陸をすゝむ其一隻を雇ふて上海港に上陸す此の地(支那領なり我橫濱より海路千三十五里通常程六日に至る)午後三時同所に設けたる英國の旅舎に上り英佛其他の人々并に本地の官人來りて安着を賀し英人郷導し江に傍ひ遊歩するに陪せり江岸は外國人の官舎連り官邸には其國の旗を高く掲げ各自便地を卜めたり其間に税館(運上)あり江河北闕といふ扁額を掛け門は江に面し浮波戸場ありて家根を設け鐵軌を敷き荷物陸揚の便利とす稅務(運上)は近年西洋人を雇ひて掌轄せしめしより汎濫の遺利なく舊來の弊を改め歲入の數も倍蓰し凡一歲五百萬弗にいたれりといふ(我凡五百萬兩餘に當る)物産の繁殖せる東洋天然の寶庫にして西洋人資て外府に充るなるべし江岸は都て瓦斯燈(地中に石炭を焚き燭を掛)を設け電線(鐵線を張り施し越列機萬兒の氣力を以て遠方に)を施し佳木を栽へ道路平坦にて稍歐風の一斑を香信を傳ふるものなかり

視る夫より一里許にして城内に到りぬ城の周圍は瓦を以て疊みたる塀にて廓門と思しき所に兵器(銃)を飾り護兵といふ文字衣の背に印したる兵卒イめり其邊より辻賣の商人道路に食物器翫物等を鬻ぐ市街は往來の道幅隘く各廊二階造なれども簷低く門狹し各種招牌を掲げ或は往來の上に横截して掛けしもあり牛豕鷄鶩諸飲餐の店見世先にて烹賣せる故各種の臭氣混淆し鼻を穿ち路は石を敷き並べたれども兩頬の捨水汚湛し乾く間なし諸商人駕舁丐者など聲々に呼て群集の中を行通ふさま厭ふべきに似たり古玩書肆畫家などに至り見れども尋常の品のみにて奇品なし墨肆曹素功并に查二妙堂に行て筆墨など購ひしが手拭を湯に浸し與へぬ此は顔をぬぐへとの事にて茶に代るもてなしなるべし外諸店に至れども烟草の火なく求れば太き線香に點じて出せり居民の富る者は多くは駕籠に乗り往來す貧しきものは衣服垢敝して臭氣なるもの半に過たり城隍廟に抵る城中第一の香火の所と見ゆ繪馬堂様の所あり廟前の泉池に臨み八橋を架

し池心一介の堂あり禮拜香花を供する體本邦に異ならず社内に覗き見せ物突富賣卜錫笛曲藝などありて其最寄料理割烹店等ありいづれも簷低く暖簾を掲げ各客を迎へ胡牀を借し飲食を鬻ぐ賓客此に群飲合餐す蓋此の日縁日ならむ城外の市街は寛濶にて往來道路も廣く朝々魚市等立て鯉鱸鹹鹽鯛の類廣東菜五升芋其他の野菜等をならべ何れも秤目に掛て賣る鯉鱸は三尺許なるも見ゆ其れより江に傍ひて下り一里餘新大橋と唱るあり橋桁を揚缺して舟行碍りなからしめ橋錢を取る(是は兼て宿にても切手を賣る事なり)其より先に英國客舎も在り其裏通に續き土民の市街軒を並べたり此の處には青樓演劇もありて弦妓様のものも見へ月琴などの音も聞へ雅致あり此の地高官の街衢往來を兵卒從僕多く引率して巡邏す其行裝の整はざる衣服の粗なる恰も兒戯にひとし此の地佛國の教師支那の風體となり講堂を開き教誘する者あり亦歐人の支那學を研究する爲め設し書院もありて都て歐人の東洋學を修行する者皆教法の人にて其國の教法の由來する所を推し究

め考證の資とし且其教を弘めんとせるより其宗旨の積金より修行の入費を出せるよし歐人の土人を使役する牛馬を驅逐するに異ならず督呵するに棍を以てす我曹市中を遊歩するに土人蟻集して往來を塞ぐ各雜言して喧しきを英佛の取締の兵來りて追拂へば潮の如く去り少く休めば忽ち集る其陋體厭ふべし東洋名高き古國にて幅員の廣き人民の多き土地の肥饒産物の殷富なる歐亞諸洲も固より及ばざる所といへり然るに喬木の謂のみにて世界開化の期に後れ獨其國のみを第一とし尊大自恣の風習あり道光爾來の瑕釁を啓き更に開國の規模も立てず唯兵威の敵し難きと異類の測られざるとを恐るゝのみにて尙舊政に因循し日に貧弱に陥るやと思はる豈惜まざらむや此の夜鱸魚の鱠などありて生餐せる廣東菜味殊に佳なり始て水枕を免かれ陸地の眠を覺ふ

同十六日(西洋二月廿二日)快晴微暖頗る春日の想をなす此の日交際に係る事故多く其務に従事す英佛東洋に備る軍艦の提督并に駐在の諸官人來りて名刺を

通じ禮問す本日は祝日なれば(日曜也)西洋及び支那人共幼稚兒女衣服など粧ひ遊歩踏歌すまた夜色蒼朗月清く海面鏡中の如く眺望甚佳なり月に乘じて猶散步す此の日各郷信を寄す

同十七日(西洋二月廿一日北緯三十二度十五分東經百十九度〇九分)晴午前上海を發す吳淞江を下り海口へ出づ天氣清廓江中波濤穩にして兩岸の眺望春妍を呈す

同十八日(西洋二月廿二日北緯二十八度三十分東經百十九度三十二分)晴昨日の如し船中釋換の意をなす江河の餘濁海水を界し茫渺たる黃浪と蒼波夕暉に映じ錦を布かごとし支那地方を西に見て甲板上に夕陽を送る此の日二百六十五里を航す

同十九日(西洋二月廿三日北緯二十八度四十分東經百十六度二十八分)晴なほ昨の如し皆甲板上に散歩し餐盤上にて圍碁將碁の戲をなし消光の助とす漁舟の地方に添て東風に泛み帆影の烟霞に暮もいとおかし

同廿日(西洋二月廿四日)晴けふも風穩にして朝十時頃香港に着ぬ(此地英領なり上海より八百里通常程四日此の間臺灣との海峡なれば波濤激して暴し北緯二十二度十七分にて季候稍暑し)此の地は廣東府地先海中に在る一

孤島にして港内群嶼繞環し風濤を支へ海底深くして多く船舶を碇泊せしむるに足れり平坦の地少く山腰を截て道路を設け海岸は支那人の家居多く山手は盡く歐人の居なり道光の戦後講和の爲め償金の外割て英國に附屬せし地なり往昔は荒僻の一漁島なりし由なるが英國の版圖に屬せしより山を開き海を填め磴道を造り石渠を通じ漸人烟稠密貿易繁盛の一富境とはなりしとぞ地圖に據りて考ふれば潮州あたり歟と思はる唐の韓愈の鱷魚の文ありしも昔時に替りて牢固の巨船に乘じ萬里波濤を枕席とせる其時代の境槩懸に異るより推せば世運日新に赴ける亦一瞬の間にあるを知る今英人の商業を東洋に擅にし利益を得る印度の所領によると雖ども其便利の道を得て流融暢通運輸自在ならしめ利柄を掌握し通塞を專斷し開合高低變化を計り東洋貨力の權を執る其由る所なきにあらず且士民の保護の爲め陸海兵備を嚴にし其國の榮名と其利益とを謀る規模の宏大なる所見に就て知るべし鎮臺は全權の大任にて威望ある者なり近來此の地

に大審院を置裁判の貴官を在留せしめ東洋に分在せる國民の訴訟を准理審判すといへり山手の人家は歐風にて暑熱の地なれば水泉茂樹の設け簾幙胡牀の備専ら夏月占涼の爲めに結構したり英華書院其他各書院あり造幣局新聞局講堂病院等盡く備り畧歐洲の體を備へて微なる者といふ英華文學上の書籍多く此の地にて刊行す英人華學を修行するもの皆勉強刻苦固より淺近にあらず其教法の由來する所を研究するため其學問の源委を考索し其治體風俗より歴代の沿革政典律令は勿論日用文章まで精究し其書を譯し其説を著し大事業を遂るもの其人乏しからず文明の素ある人心の精神ある學術の上に従事すること乃國の強盛にして人智の英靈周密なる所以を徴するに足れり此の地の最高巔を太平山といふ登る凡一里餘にして巔に旗棹あり國旗を掲げ島嶼の錯置風帆の往來望洋の觀遠邇一目に在りて眺覽奇絶なり山を下り花園を一見す閩地士民休暇遊息のため設けたれば泉石花卉を陳ね雅致匠意を盡し遊覽の際聊客愁を滌ぐべし○本地

より限日廣東へ赴く汽船あり凡八時間に到るよし又毎週刊行の香港新聞紙あり漢文にて一箇年分定價四弗なり又香港通用の貨幣あり○歐行の旅客此の所より籐牀籐席團扇或は熱帶下を過るに用ゆる帽子を買ふて避暑の用意す其他名産は白檀彫箱象牙細工瀟紙(紙一種の)書楠箱箆細工支那絹張傘摺扇等なり支那店には文墨品あれども上海に比すれば價貴し郵船此の港にて替る船の碇泊一晝夜又は二日程の規程なり○都て歐洲に赴くに横濱にて取替し銀錢を此の地にて英貨ポンドに取替へ航海途中入用とするをよしとす

同廿一日(西洋三月廿五日)陰朝來細雨此の地度數南に移るを以て暄映を催し本邦の暮春にひとし此の地に設け在る造幣局を一見し英國水師提督を尋問の爲め其軍艦に到る歸後佛國の岡士來りて謝す午後三時英國の囚獄を見る其壯宏にして罪人の取扱かたすべて輕重に應じ各器局に隨職業を營しめ且獄中に說法場を建置き時々罪人を集ひ說法を聽かしむ

此の說法といえるは善惡應報の道を説て勸懲せしめ罪人をして後悔懺解なさしめ總て惡を戒しめ善に赴かしむるを専ら説くなり其中には前非を悔ひ放心を取戻し遂に本心に立歸る者ありといふ其人員を減するを憂ひ死刑を恐るゝ則皇天の意に順ひ生を愛し民を重んずる道懇篤切實なる感ずるに堪へたり

同廿二日(西洋二月廿六日)烟雨朦朧たり交際上の事務畢りて郵船に託し各郷信を寄す旅舍樓上眺望新緑を催す横濱より乘來りし船は此の所までにて午前十時比小艇にて佛國の郵船(船號アンスベ)に乗替るアルヘー船よりは二層も大なる船にて尤清潔なり午時出帆す風順にして霎時に支那南陞地方を背にして航せり

同廿三日(西洋二月廿七日北緯十八度四分四十分東經百〇八度五十一分)晴けふも東北風にて眞帆張て船脚速なり安南の南陞及び附屬の小島を西南に見て次第に熱帶下に近く季候單衣に適ふ此の日二百七十八里を航す

同廿四日(西洋二月廿八日北緯十三度五十五分東經百〇七度二十三分)晴昨夜より暑甚しく航する南に移りしを覺ふ本邦五六月の候にひとし俄に麻を着し各甲板上の散歩快よく相集りて探題次酌などして遣興す此の日三百里を航す

同廿五日(西洋三月一日此の日經緯を測らす)晴暑威彌強土用中の如し乃是赤道近きなり午時瀾滄江の入口燈明臺の麓に至る夕四時比東捕寨河口へ入て上流に溯る此の間兩岸綠樹繁茂し根株水涯に浸し樹々尻尾長き猿の群り遊ぶを見る川幅本邦墨田川程なり往々狹曲にいたれば船尾旋らさず舳戻して過ぬ岸に垂るゝ木々も手折るべき程にて水底は極めて深しと見えて舟行碍りなし暮六時頃柴棍の港に着ぬ(此地安南南隅瀕江の地佛國領なり香港より九百十五里通常程四日緯度十度十七分在て季候暑熱土地肥低風俗支那に似)此の地駐劄佛國總管の使者來りて安着を賀す此の夜星斗燦然銀漢低て叢裡の虫聲秋を報す季候の變する瞬息の間亦航行の迅速なる旅客の感を増す

同廿六日(西洋三月三日)晴朝七時本地官船の迎によりて陪從して上陸す碇泊の軍

艦祝砲ありて騎兵半小隊馬車前後を護し鎮臺の官邸に抵る席上奏樂等畢て其本國の博覽會に摸擬せし奇物珍品を雜集せる所を一見し市街を遊覽し午前十時頃歸船し夜鎮臺の招待により官員會集して猶奏樂するを聴く○是より先佛國郵便を開く爲め經畫する所あらむとて教師を遣し此の地の形勢を測らしめたるを土人憤怒し其人を殺害せしより竟に戰爭となり佛兵大に土兵を攻撃し内地に深入す是に因て和議を講じ地を割て罪を謝す爾來佛國所領となりし由鎮府在て重官を駐め總轄せしめ三兵の將官及兵卒凡一萬を駐劄せしめ不虞に備へて盛んに開拓建業の目的をなすされども兵燹の後未だ十年にも充たざれば土地荒廢し人烟稀疎にて全く休養殷富にいたらず且土民反覆測り難く動もすれば嘯合作亂し來襲するあり故に佛兵常に戒心ありて兵額を減するなしと云各國船舶も僅に四五艘碇泊せるのみにて商店も少し専ら土地を修繕し既に製鐵所學校病院造船場等を設け東洋根據の要領となし大に他日の遠圖をなすされども一歳の収

税額僅に三百萬フランクに過ず年々入費多く得失償ひがたき故本國議事院の論も區々也と云○此の港東捕塞口より浜る凡半日程里數六十里なりといへども其水底深き所凡四十五尺許なれば運轉するに碍りなしと云ふ上陸場は平岸にて船は中流に卸碇し小艇にて上る土俗貧陋にて婦女子男工に代り垢面蓬髮にて舟を舫又荷物等運びて生活す熱帶の地ゆゑ沙塵飛揚し遊歩も懶く名勝の探るべき佳地もなし鎮府は江濱より八九丁隔り一箇の樹林清茂の地に在り劇場妓院もありて支那と同風なり追々歐人移住せるものありて人員も増せりと云案内の者を雇ふて椰林(樓閣に似て大)蕉(椰子)の間に行き一の曠敞の地にいたる象奴(象を飼ふ者)二象に跨り來りて伎藝せんと乞ふ命じて其伎を見る二象を鞭撻し跪坐せしめ或は突立せしめおのれ上下超乗などして自在を示しやがて木立ある所に至り一合杷の木を鼻に掛けて拉折せしめ我徒乗らんとはいへば又撻て跪かしめ其後趾より上りて其背上に跨るに亦自在なり此の邊兩岸すべて荆棘の如き樹木茂りて

處々虫の鳴き田畝にては農夫の熟稻を穫など時候の異なる感すべし田畝は米穀二度の作地にて所謂安南米是なり東洋諸國へ運搬售賣して利益をなす金銀貨幣は傳來して所持するもの多し○土産郵船に持來りて賣る蒲葵の團扇箆笠等なり又馬車を雇ふて商綸といふ古市に到る此の港より凡二里程もありぬべし往昔は繁華の地と見えて巨閣高廊の頽廢せしあり市中一箇の大社あり聖母殿と漢字にて書せし扁額を掲ぐ蓋し海神を祀るならむ石碑繪額など多く掛並べ兩三の支那人居て縁記様のものを賣る依て筆話もて猶事由を問しが了解せざりしや答辭なし○碇泊凡一夜半日にて發す英船は寄らざる所也

同廿七日(西洋三月三日)晴午時發し瀾滄江を下り午後四時頃川口なる燈明臺山の麓に至り是より水先案内の者を歸す次第に大洋に航せば船脚速なり

同廿八日(西洋三月四日北緯六度二十一分東經百〇三度五十六分)晴暑酷し風様昨にひとし白瓜を食し(本邦類)苦熱を凌ぐ此の日二百四十七里を航す

同廿九日(西洋三月五日北緯一度四十)晴暑風順なり朝二箇島を右手に見る午時漸く地方近く航し午後二時新嘉埠燈明臺を過る(燈明臺は海中の突起せる岩上へ造立て堅固にして他に超へ高く聳也)夕五時新嘉埠へ着きぬ此の日二百九十一里を航す

二月朔日(西洋三月六日)晴朝六時上陸す(柴棍より六百三十)麻刺加蘇門荅刺とを左右にして東洋第一の海關なり亞細亞大地より海中へ長蛇の如く突出し北緯一度十七分に在りて暑酷烈といへども樹林繁茂の地多く清蔭快涼を卜且時々驟雨來りて煩熱を滌ぐ土地赭沙にて港最寄稼穡の地も見えず雜卉野草路傍に蔓延し彩禽文羽其間に矯柔宛轉せり土人の風俗安南と同じく裸跣のもの多し市街も亦同様なり英領に屬す(年記未詳)埠頭の修營より石炭の置場電線の設け馬車の備も在りて總て人工を用し功績も見えて英國の志を東洋に逞する素あるを見るに足れり○灣口恰も園地の如く島嶼數箇環列し綠樹其上に葱籠として園丁意匠を勞し營築せるに似たり瀛船此の處に至れば灣を通じ廣き所に至り船を回轉し發船の便利して碇泊す浮波戸場に

船を着け橋を架し上陸す海岸は石炭倉のみにて居民なし水に臨みて亭舎數箇あり蓋歐人の盛夏遊息の爲め設けしなるべし○馬車を雇ひて市府に至る港より凡一里餘雜卉汗沼に沿ひて徑路あり府下は歐人士人とも雜居して諸物を販す價極て不廉なり歐羅巴と號せる客舎に一泊す此の地第一の旅亭也といふ市外數武に花園あり小山を形とり修造し百卉千草を植並べ遠近眺望の趣をなし園中泉池もありて炎暑煩襟を清くし客思鬱懷を慰す○土産籐蓆箴杖アンペラ其外文禽或は最小の猿など持來り争ひて旅客に商ふ亦歐洲各種の貨幣を持來り郵船碇泊の間浮波戸場に風呂敷をしき其上に開きて兩替す中には賈もあり又古貨幣の雅なるも見えたり裸體の小兒小艇に乗り船側に群り勸め錢を投げしめ海中に入て拾ひ來る銅幣にては水中認めがたしとて銀貨にあらざれば跳入せず(本邦の江島途中杯の如し)其水中に争ふ龜の子の如く又海上競渡の真似して其先を争ふ迅速なる矢の如し○此の地より瓜哇披隊比へ赴く旅客は上陸して郵船定日の期限を

俟合す○午後四時佛國の岡士夫婦にて來り送別す各郷信を認め郵便に屬す同五時發す

同二日(西洋三月七日北緯二度)晴曉來順風暑氣凌ぎよし右手に麻刺加地方を見る昨日より旅客増して船中混雜し甲板上遊歩も自在ならず此の日百九十九里を航す

同三日(西洋三月八日北緯五度三分)晴けふも軟風暑氣前日に層す安南地方をゆき過ぬ望中一點のものを見す

同四日(西洋三月九日北緯五度五分)晴昨日より聊か暑を減す航路熱帶風濤恬寧にして無事互に長日を惜み課を立て洋學を講ずるを興とす

同五日(西洋三月十日北緯七度)晴昨夜蒸氣器械少損せしより夜三時頃より航行をとゞめ洋中に碇泊し同五時頃整ひぬとて發す漸く印度洋正中に抵り四顧毫碧も眸中に入るものなし只波間に飛魚の游跳するを見る

同六日(西洋三月十一日北緯六度十分)晴今曉四時頃器械また損じぬとて洋中に投

碇せり漸く整ひ風順にして航する甚疾く兩度の碇泊の間を償ふ

同七日(西洋三月十二日)朝七時比錫蘭島の内ホアントッガールへ着きぬ(新嘉埠より千五百〇四里)

(通常七日)船中にて朝餐し午前十一時上陸すオリヤンタルといふ旅舎に投す少焉して此地の官人來りて安着を賀す此地印度の屬島にて洋中に挺立し港は北緯六度一分に在て土地熱帶に近く終歲氷霜なく四時木落を見ず赤壤沙泥にして肥沃なり土民貧瘠支那人とは骨相異り聊か順良勉力の風あり蓋し久しく歐人に役使せらる故なりといふ其體披髮保跣腰間僅に更紗木綿もて掩ふ色黃黒にて深目黒齒赤唇なり下民平生烟草を買ひ得ざるものは檳榔を嚙して吸咽に換る故に自ら齒黒みて鐵漿を銜むに似たり男女とも頭に丸き櫛を挿み毛髪を束ぬ始は葡萄牙領にて在しを荷蘭より攻取り爾後竟に英國の所領とはなりて港口城門上に兩獅金冠を捧げたる荷蘭の標記今尙存せり港口岩石あり潮波激揚し上陸甚難し土人狹小の艇へ一方に材もて桴とし釣合はせし一種の舟もて上陸せしめ波戸場木造の小屋

にて直に城門に續く門中砲卒守衛す夫より少し高き所に上りて市街あり海岸はすべて砲臺を建回し砲門を設け火藥庫もあり製造古様にて荷蘭領の比築きしものと思はる海岸西の方に燈明臺あり鐵造にて高さ六十フートといふ(我凡曲尺八丈餘)海門庶務ハクーフルヌマンエイシユンといへる役にて掌どる土地熱帯なれば亭榭すべて避暑の工夫せし結構なり産物多し就中果物佳品魚類も鮮にて食料頗る芳美なり櫻欄芭蕉の實黄橙檫櫟桂枝甘蔗等良好なりカレイとて胡椒を加へたる鶏の羹汁に桂枝の葉を入るものを亦名物とす○馬車を雇ひ三里ばかり山手に遊ぶ平岡曲折して椰林茂り其間には水田に秧を挿むを見る亦水芋蓮等青々と浮べり山に登る五六丁にて一箇の佛寺に抵る寺名ポーカハウアといふ山門あり門に入れば正面本堂は鎖して常に開かず僧に請ふて開かしむ堂内安置せる釋迦涅槃の像七ヤールトあり(我凡曲尺二丈一尺餘)磁製なり全體黄色額に白毫なし合掌側臥胸より下は衣もて掩ひ衣鱗狀をなし堂の側僧房廡宇みな天堂地獄の圖を畫けり

僧衣は袈裟のみにて跣足禿頭眉毛を剃去り香を奠じ花を供し合掌誦經の音略禪なり山の後即佛骨を收し所なりといへり三層に築き石壇を繞らし中に一樹を栽たり即菩提樹にて外に物なし又一所に至れば山頂にて眺望佳絶小亭を構へ三鞭酒など備へて嚮ぐ此山上に一螺青山の雲間に見ゆるあり即靈鷲山なりといふ歸り來り午餐に就く給仕人みな裸體黑身下部を布もて掩へるのみ甚だ厭ふべく夜に入り微涼に乘じ市中を遊歩す土人の家屋新嘉埠に略同じ貧陋猥雜の景況徴すべし○島産各色の寶石皆指環へ嵌入して賣る又泡玉珊瑚眞珠等あり贗製多ければ漫に信じがたし象牙骨の細工物椰子烏木蝟毛籐細工各種木の看本髓甲細工貝類文彩の小鳥の各種を旅亭の戸前に持來て争ひ勸む其細工物は皆歐人の所用とする爲に製したる也○貝多羅經の古きは漆塗金字にして尋常なるは皆鐵筆にて貝多羅葉に書せしものなり中央に孔あり紐もて綴たり其字體梵とも異なり一派の體にて蟹行に記せり○此の港は三方海にして僅に一方築出せし洲

崎のみにて大洋の吹返しを支ゆるに足らざれば碇泊間うねり強く船動揺して甚だしきは器物を破毀するに至る加爾倍多孟買麻都羅斯孟智世利等へ赴く旅客はみな此の港より限日の便船ありて發す季候稍暑し

同八日(西洋三月十三日)晴朝八時發す暑威昨日より彌増し眩暈する計なり午後一時洋中鮫魚の數頭波間に跳躍するを看る(本草に鮫は南海に産し魃に似て)夕三時驟雨來りて少焉にして海上一團の黝雲起り忽地空中暗黠として俄然低回し波濤に相接し潮浪を捲揚る陸地の蕩風の颺揚する如く其響ありてさながら龍腥を挟む勢ひあり俗に所謂龍捲なりとて衆人奇觀の想をなせり
同九日(西洋三月十四日北緯七度十分東經七十三度二十九分)晴昨雨にて暑氣稍減す此の日二百六十七里を航す

同十日(西洋三月十五日北緯八度十分東經六十九度十八分)晴朝五時海馬の波間に浮ぶを看る(海馬は魚字通に見えたり牙骨堅瑩文理細く糸の如し俗に馬の股に爛火を帶び波上を飛跳する畫圖とは大に異なり)此の日二百五十五里を航す
同十一日(西洋三月十六日北緯九度十分東經六十四度四十五分)晴始て午餐に西瓜を食す味淡にして甘味少

し此の日二百七十五里を航す

同十二日(西洋三月十七日北緯十度十分東經六十六度十分)晴此の日二百八十四里を航す

同十三日(西洋三月十八日北緯十一度十分東經五十五度二十七分)晴此の日二百八十二里を航す

同十四日(西洋三月十九日北緯十一度十分東經五十一度四十分)晴午前より亞刺比亞地方の島嶼を過る夕

帆前船を遙に認る此の日二百八十八里を航す

同十五日(西洋三月二十日北緯十二度十分東經四十五度五十二分)晴夕五時紅海に向ふ時々島嶼出沒す鯨

魚洋中に浮ぶ此の日二百九十里を航す

同十六日(西洋三月二十一日)陰朝六時亞丁に抵る(此地英領なり錫蘭より二千里)亞刺比亞南

陸の一埠にして西紅海の入口なり北緯十二度四十六分に在て土地赭磧にて山に樹草なく地に潤澤なし礫确瘠薄の地なり人民は即亞刺比亞人種にて印度に比すれば強壯にして品格又陋し英の官吏在留して管轄す港口に二箇の砲臺あり歐洲各部の岡士も在留せり此の地開拓の利産物の益なしといねども東上西下航海の便を開き萬里運輸の自在を得れば英人の力を

盡し財を費し不毛懸絶の瘠地にも其國旗を掲げ管領せるより東洋の商業を盛大にし支那印度の領地を羈縻する規模を見るに足れり上陸して海岸に在る客舎に入れば馬車乗馬とも店前に來り勸む即一車を傭ひ市中を看る海岸の細路屈曲にして山に傍ひ半里餘にして漸く磴道に登る城門山腰を截左右石壁聳へて要所に大砲を備へ歩卒守衛せり切通しの上十丈許に橋梁を架し要害の往來とす道幅僅に兩車を容るに足る稍下りて平坦の市街に至る人家石室などみな陋矮にして茅茨頽屋半に過き人烟甚蕭條たり歐人在留官員の舎屋は皆海岸の山手に在り市街を過ぎ水圍場に至る此地水泉に乏しく雨澤なき時の爲め圍境の飲料を貯へ分配す奇嶂怪巖の間幽澗深溪を造築し周圍塗るに白堊をもてし舗くに青石を以す其傍磴道盤旋し石梁を架し石欄を繞らし上は峯勢聳へ下は潭心深く茶亭花園も其間々に在りて登臨勝致の一箇の假山水たり澗底は管を通じて平地に達せしめ汲取場あり豕皮に汲み入れ駱駝又は驢に負しめて數里外に送り各所に

分つ人生瘠土生活の難き飲水も容易ならざるより人力勉強せざるを得ず肥瘠土地の異なる民の苦樂の相反せる想ひ見るべし肥沃樂地に生れ遊惰宴安に逸し終身人間如斯地あるをしらざる嗚呼幸といふべき歟將不幸といはん歟知る是所謂瘠土の民は勤儉にして剛勁事あれば戎に就や輕し即富國強兵の根基なり肥沃の民は遊惰にして柔弱事あれば戎に就くや難し即亡國逃遁の根抵なり豈しからざらんや土人羊を牧するを業とし負載多くは駱駝を用ゆ○土產駱鳥の羽(歐洲婦女子の帽子の飾に用ゆ)同卵豹皮木彫七蒲葵の團扇石蠶等なり旅客あなば携來りて之を鬻ぐ但錢を乞ひ價を貪る甚し上陸の時心を用ゆべし○此の地より蘇士までの海上を紅海と唱へ北は亞刺比亞南は亞弗利加なり海上より皆隱顯出沒せり兩地方とも山は何れも樹草なく赭色海面に映じ航行勢ひあれども風を生せず水は油の如く漲りて動かす熱蒸の氣強く自然海面赤光を帶ぶ紅海の名空しからず就中五六月頃は酷烈を極め病者等其候を犯し航すれば必損するといふ我儕の航せし我二月

又六月九月に在り其六月に掛りしは暑熱聞が如し困耗疲勞不寐連夜に及べり牛羊も終夜喘する止す歐人の此の海上を呼て鬼門關と唱へ怖るゝ人を欺かず夕三時に發す此の日郵便に因て郷書を寄す

同十七日(西洋三月廿二日北緯十五度五分東經三十九度五十一分)晴朝亞弗利加洲北邊の島嶼を西方に見る此の日二百六十六里を航す

同十八日(西洋三月廿三日北緯十八度五分東經三十七度四分)晴緯度漸く北に移りしより次第に暑氣を減す略流火徂暑の候にひとし此の日二百六十八里を航す

同十九日(西洋三月廿四日北緯二十二度五分東經三十四度五十五分)晴朝より西北風強く起り船動搖す同九時頃より彌烈く怒浪銀山の如く甲板上に打揚る夕五時漸風る伊太利亞船の東洋へ駛するに遭ふ此の日二百六十八里を航す

同廿日(西洋三月廿五日北緯二十六度三分東經三十二度四十七分)晴昨日より一層暑を減す夕四時佛國郵船の東洋に駛するを見る亞弗利加亞刺比亞の地方を左右に見る此の日二百五十里を航す

卷之二

慶應三丁卯年二月廿一日(西洋千八百六十七年三月廿六日)晴漸く海峡に入り午時蘇士に抵る(此の地埃及領なり亞丁より通常程六日)土地沙磧にて草木なく人家樹木を栽るに他所より土を運びて培養す水至て惡し土民黒色頭に白布を巻き佛國アルゼリー隊の如き衣服を着たり士官皆都兒格の赤帽子を冠れり此の地紅海の尾に在る一灣にして近來地中海の通路開けしより新らたに設けし港なれば人家もいまだ扶疎にして總て諸港の如くならねど西紅海之行詰りにて歐人喜望峰を回らずして東洋に達す便路なれば此の峽を経ざるを得ず故に貨物運輸旅客船繼の要港なれば往々土民繁殖すべき象あり○是より亞歷散大までの陸地西紅海と地中海との間を中斷し亞弗利加地域にて北は都兒格に接し港口遠淺にして船を一里半餘隔りて碇泊せり蓋沙漠の吐流故砂色水色を變じて見ゆ水尾屈曲して船路をなし沙泥船脚を捏し碇泊不便なるより

蒸氣器械もて瀬浚最中なり暫時ありて小汽船もて上陸せしむ此間二里許波戸場より左手海岸に臨める英國の客舎に投じ午餐し汽車發軔の刻限を俟つ(庭中に飯臺ありて風鈴の相圖にて食に就く價は正面の店にて拂ひ食札を買て用ゆるを便とす)此の客舎は英人の出廊にて本港第一なり庭上草木を雜栽し待合を慰する爲にす樓上より海洋を望めは諸山歴々として頗る佳觀なり但土地暑熱強き故占涼の設あり門外數弓にして汽車會所也其最寄土人の家は皆燕巢の如く土にて作り頽圯傾倒して古風を存するのみ此の地汽車を建築せしは英國通商會社の目論見にて東洋貿易簡便自在を得ん爲め本地政府に達し年限を定め其費用償戻しの上は地元に屬せしめんとの約束のよし今全く埃及の所有とはなれりとぞ○西紅海と地中海とは亞刺比亞と亞弗利加洲の地先交接する處にして僅に濤路を隔つ凡百五六十里の陸路あり故に西洋の軍艦商船等都て東洋に來舶するは喜望峯の迂路を取らざるを得ず其經費大にして運漕尤も不便なりとて千八百六十五年比より佛國會社にて蘇士より地中海までの堀割

を企てしかも廣大なる土木を起し此の節經營最中のよし汽車の左方遙にタントなど多く張並べ土畚を運ぶ人夫等の行かふを見る此の功の竣成は三四年の目途にして成功の後には東西洋直行の濤路を開き西人東洋の聲息を快通し商貨を運輸する其便利昔日に幾倍するを知らずといへり總て西人の事を興す獨一身一箇の爲にせず多くは全國全洲の鴻益を謀る其規模の遠大にして目途の宏壯なる猶感すべし○夕七時比調度食料麵包乾肉果物葡萄酒等を用意して汽車に乗て發す此の車道の傍處々タントを設て(トは四方鐵又は木柱家根とも布幕をもて雨露をしのぐ土人用て假の家屋とす蓋礮礮の地は民水草によりて移轉す故に家屋も運搬に便なる爲め上世より如斯作爲すと云)荷物積み又は人夫も住居せり發軔會所より數十步隔て沙漠なり草木生せず茫渺たる曠野風の吹廻しにより所々高低あり途中憩休所五三軒人家ありて汽車中の客に食料を鬻ぐ汽車道の側に一の往還あり土民駱駝に荷物を負しめ通行す凡沙漠を渉るに馬牛は飲料なくては遠きに行かだし唯、駱駝は渴に堪るを以て負載の用を爲すと云上古亂世の時盜患多ければ人民

數百人相集り駱駝數百に荷物を負して隣國に販賣せしといふ此客舎にて汽車中塵沙を掩ふため用ゆる目鏡又は薄紗裁を買て途中に備ふ夜十二時該祿に至る(此の地蘇士より陸路九十里汽車にて凡八時間に達す)陀日多國の都府にして土域は亞弗利加洲なれども管轄は總て都兒格なり亞王ありて(亞王とは王に亞ぐ位權のある者を云)國內の政事を司る其風俗政治とも都兒格と同じ土地東陲は沙漠にて草木水源なく此の地より南方漸く稼穡の地となる地中海に臨める地は廣坦膏腴の嘉壤也尼兒河といふあり洲内月山といふ所より發源し沿流地中海に入る河の兩岸は勿論支流分派して其沿岸都て塗泥の良田とす史に據て按ずるに毎歲一次潮水盛に至り漲溢する凡深三十尺廣二十里にいたり田土を培養する農夫の灌溉糞畜するにひとしく其潮水の至ざる所は荒砂に屬せるより其潮の干満をもて年の豐歉を兆すといふ如斯荒蕪砂磧の地といへども自然の養ひあり天豈人を棄むや此の國古昔極盛の地にして風俗文物歐洲諸邦に先だつて開け其名遠邇傳播して歷代相傳の古國たりしが教法の沿革あ

るより盛衰汗隆相換り建國後七百餘年に至り日に衰弱に赴き亦振はず其後數百年麻哈麥回教を亞喇伯に唱へ興すに當り遂に其が爲に國を奪はれ都城の大庫に藏めたる儲書七十萬冊ありしを回部の者其書を取て焚捨たりといふ其文物の盛なる想像すべし千八百年代佛國王拿破崙攻取りしが又都兒格の統轄となり其後久しく羅馬に屬し總督を置しが爾後都兒格に叛て大に土地を開き近頃は其附庸に屬し亞王の權ありといふ此の地に一巨寺ありマルブルにて(蠟石)建立し凡十餘丈許の伽藍なり上は柱梁椽題とも彫鏤し天井金箔五彩の焜耀目を眩す下も蠟石を鋪て石磴として登る者には杏を脱かしむ回廊層閣環列せり此の禮拜堂には門戸砲卒警衛し寺中より市街を臨めば一目瞭然世界有名のヒラミード(石を三角に積上る凡高六十尺許の大墳也)巨首あり市中第一の奇觀といふ此の行は夜中なれば遊覽を得ず

同廿二日(西洋三月二十七日)晴曉一時汽車にて又發す朝十時亞歷散大に着ぬ(蘇士より陸路百六十里地中海の大港なり人烟稠密土人多くは驢に乗り通便す)此の地は古國にて殊に首府なれば古器物考

證に備ふべきもの多く博覽會場に收てあり皆太古の物にて多くは土中より掘出したる棺槨の類と見ゆ(人の臥たる形にて彩色ありて堅木なる尸も腐朽せず世に所謂ミイラならん)死者の飾に用ひし金具の襟に掛るもの又は指環曲珠土製の人形(蓋備な)素焼の甕瓶の類虫形を彫し印類は鳥篆にて雷斧雷槌古劍など種々奇品あり此の港は地中海の要港にて貿易も繁昌し土地も富饒にて戯場妓樓など何れも歐人半せり土俗婦女は黒衣首より包み顔は眼の間に束木を立て掩ひ往來す貴族は常に家居深窓に在て人に面するを耻とす只一夫婦の外妾を蓄はふ多きは數十人に過ぐといへり

西洋は東洋諸邦と異なり帝王より庶人に至る迄一夫人のみにて妾媵なし卽是閨門より推して天下に及ぼす理ならむ然るに此の國妾媵多きを榮とする風習にて當時都兒格帝は四百八十人餘の妾ありといふ殊に男子却て妬情深く若し妾私に他の男に面するあれば直にこれを害すといふ此の地歐洲の最寄に在といへども其陋風を改めざるは因襲の久しき

開化に後れたりといふべし

佛國の岡士セネラール來りて安着を賀し其官衙に一泊を請ふ

同廿三日(西洋三月廿八日)佛國の岡士館より直に馬車にて郵船に至る時にセネラ

ール兵隊を出して警衛し小艇もて本船まで送り(サイドといふ印度海郵船より少狭し)朝五時發

す午後風起り驟雨あり

同廿四日(西洋三月廿九日)晴無事

同廿五日(西洋三月三十日)晴無事

同廿六日(西洋三月三十一日)晴風強く波暴し暮六時伊太利亞領地西治里島墨西拿港

に着きぬ港山を負ひ海に臨み人家海岸に連り結構高く聳て頗る修整せり砲臺は突出せる平嶼の地先にあり碇泊の船舶は數あらずといへども貿易盛にして土人の富饒なる體見はる始て歐羅巴洲瀕海に入る珊瑚精工の業を以て土人繁富なすと云船に來て數種を商ふ

同廿七日(西洋四月一日)晴曉二時墨西拿を發す逆風にて船の動搖甚し

同廿八日(西洋四月二日)晴風強く船動搖昨の如し朝九時撤丁歌爾西克二島の間を過ぐ此の二島は往昔伊太利亞に屬せしが百年已來佛國の屬となるといふサルジニーは其側群島星列して各跪狀あり海峡蜿蜒曲折して恰も園池を渉る山水天然の妙具れり島中一箇の白壁矮屋あり乃是元伊太利亞國の陸軍總督ガルバルジ退隱の居なりといふ

此のガルバルジ一六七年前彈丸黒子の地より崛起し教法の眞ならざるを論じ廢佛の説を主張し奮然兵を興し威を泰西に輝し伊太利亞全地頓整に席卷せんとする勢ありて其雄圖四鄰一時に震懾するに至れり功名いまだ墜ちざるに蕭然退休して桑榆の晩節を高くし悠々餘齡を樂しむ其英風猶欽尙するに堪へたり

コルシカは諸山峩々として雲表に聳へ名におふ佛國初代の那破烈翁の出生の地なり當時勃興する龍虎飛嘯の兵威向ふ所山を回し海を倒し盛名八荒に震ひ功業千載に烜たるを追想し山水の鍾秀靈英よく人傑を生るの信

なる感嘆せり風愈暴く巨船を掀げ英雄の餘氣猶いまだ消せざるを覺ふ

同廿九日(西洋四月三日)晴曉より風西北に轉じ朝九時半頃佛國馬塞里港に抵る(佛國の港也)先に電線を以て着船を本府に通達しければ我船の岸にいたるやいな

や砲墩にて祝砲を報じ程なく本港の總鎮臺バッテリーにて出迎ひ上陸して馬車に乗らしめ騎兵一小隊前後を護しガランドホテルドマルセーユといふに郷導し鎮臺並海陸軍總督市尹等各禮服にて代るく來訪して安着を賀し午後三時頃フロリヘラルトジュリイ先導し鎮臺及び陸軍總督を訊問し佛帝の別業を一覽し市街を見る暮六時歸宿す夜八時鎮臺の郷導にて劇場を見るに陪す

同晦日(西洋四月四日)晴朝海軍總督及岡士セテラールを訊問し夕鎮臺の招待によりて其官衙に到る鎮臺并附屬の士官多く相聚り饗せるに陪す夜十一時歸宿す

三月朔日(西洋四月五日)晴朝八時寫眞場に到り一行の合圖を寫さしむ其より花園

に至り鳥獸草木の珍奇なるを收羅し畜を看る

同二日(西洋四月六日)晴朝七時各馬車にて本地より三十四里西の海岸ツローンといふ所に至り軍艦並諸器械を貯ふ所を見る此の日朗霽四望田野麥秀で菜花開き其餘名のしれざる草木の花咲きて聊旅懷を慰せり鎮臺附屬の官吏出迎ひ兵卒半大隊許警衛し奏樂杯あり程なく汽船にて軍艦に請じ大砲其餘蒸氣機關等を見了れば發砲訓練をなし又我輩にも大砲試發せしめ夫より他船三艘に移る毎船祝砲あり午時上岸す鎮臺へ請じ午餐を供し畢りて製鐵所鎔鑪爐反射爐其外種々の器械を見る猶銃砲貯所又は人を海底へ沈没せしめ暗礁其外水底に在る物を具に見留る術を見る

此の術は緻密なる護謨を縫くるみにして四支六穴へ水の徹らぬ様にし首には頭形に兜やうなるものを冠り眼の邊りには玻璃を張り見るを自在にして天窓よりゴムの管を通じ水外へ出し空氣を通せしめて幾時にも氣息堪しむ此の日沈没せしは水底淺しといへども凡四五十ミニウ

ト程なり空氣通すれば幾時にても堪ゆるといふ

夕五時半頃鎮臺に抵り其より同所を發し夜に入て馬塞里の客舎に歸る

同三日(西洋四月七日)晴午前十一時郷導ありて三兵訓練を観るに陪せり(三兵は歩卒一レシメン

ト騎兵八小隊砲兵一座なり)此の訓練は先頃東捕寨にて戰ありし時有功の者へ功牌を與

ふる爲の行軍式なりといへり其褒賞の式は三兵を聯ね前行を進しめ旋回して四方に布列し其中央の稠人廣衆の觀望を屬せる地位に當りて其褒賞する人の功の大小により順序を逐ふて立しめ全軍の總督及軍監いづれも馬より下り高聲に賞詞を唱へ(何々の役にて此の度何々の功勞ありて功牌を與ふと云箇條也)總督手づから功牌を其人の胸間に掛け互に默禮して式畢る

此の式は其出陣の時戰功ありしを軍監より委しく認め確然と顯證あるを大將へ言立て其より帝王に奏聞し其允許を得て其ものへ達し且其國に功勞ある事を國內諸人に見聞せしめむ爲顯然と眼前に其功牌を與ふることにて尤度々功あれば其都度々々其數を懸る故に國人老幼男女に

至る迄是を見て有功の人なるを知りてあがめ貴ぶといへり誠に士を賞する所明かにして功を勵ますこと公なり故に士卒に至るまで軍に赴き身命を輕んじ立功を重とす國の爲に死をいとほざる所以是を見て其素あるを知る

同四日(西洋四月八日)晴學校に到るに陪せり舍密學試驗所にて種々の製藥方及顯微鏡の新發明なるを見る夫より修學所會食所生徒部屋等を看る何れも清潔にて規則修整なり此の時覺中の生徒凡五百人程寄宿せりとぞ

此の生徒寄宿中の費用修行衣食其他一切の雜費都て一歳凡九百フラン夕程にて足れりと蓋富有の者合力して別に助成の設あればなりといふ
同五日(西洋四月九日)晴明朝本地を發し巴里に赴くにより行李を整頓す此の夜鎮臺陸軍總督岡士セネラル市尹其他附屬士官十二人を招集して饗宴あり夜十一時退散せり

同六日(西洋四月十日)晴午前十一時半汽車にて夕七時黎昂に到着す歐洲館といふ

客舎に投宿す(此の汽車は毎日午前十時發の期限なり)此地佛國の一大都會にして巴里に亞く市街の布置家居も頗る宏壯花麗なり廣大なる繅絲場紡織場あり凡西洋婦女の服飾其他の絹紗綾縐子綾羅錦綉の類皆此地より出る職工常に七八千人器械屋宇の設も亦壯大なりといふ此の日夜に入て着せし故に遊覽を得ず

同七日(西洋四月十一日)晴朝七時發し汽車にて夕四時佛都巴里斯へ着ぬ此の時書記官カシヨン及御國より先着の士官其餘の人々出迎ひぬフロリヘラルト先導にて巴里都中央のカブシンス街なるガランドホテルに投宿せり
同八日(西洋四月十二日)晴七時此の都府の外國事務大臣へ此の方到着せし由を達する書翰を認め向來滯留中の規則等を定めらる

同九日(西洋四月十三日)晴午時在留中衣服等の註文して夫々の工職に託す

同十日(西洋四月十四日)晴魯西亞へ行し人々事充て本邦へかへると告別し各寫真寄書など屬す午後借宅を檢點せんとしてフロリヘラルトカシヨン等を連

て市中を巡覽し此の處に名ある花園鳥獸の異類を萃し囿を見る

同十二日(西洋四月十六日)曇曉六時より又借家を見んとて市中へ出ぬ此の日朝七時本邦の生徒倫敦府より來り旅館へ候す

同十三日(西洋四月十七日)晴午後一時博覽會の場所を見る

同十四日(西洋四月十八日)晴夕四時比より海魚を聚め養ふ所を一覽す

此の畜場は海魚杯の游泳するを横より視縦よりも視るに便なる爲玻璃器を以て製せし大なる函に潮水を湛へ部類を分ち海底の沙石藻草及貝介類の品彙を集め海底の眞狀を摸し魚鱗其中に游泳するを自在に熟視する甚奇なり

同十五日(西洋四月十九日)晴午後二時フロリヘラルト。レセツフなど來り博覽會委任の議事役ブレイシイホルトと同道にて本邦産物等差出す手續等談合ありし

同十六日(西洋四月二十日)晴午後三時佛帝第一世那破烈翁の墳墓を尋ぬ

此の墓はセイヌ川向博覽會場の最寄にてデザンバリードと云所也結構壯麗規模廣大にて他邦より來る者彼此を擇ばず縦觀せしむ墳墓の傍に數棟の家屋あり其家屋に寄寓するは都て戰爭の節重傷を受け廢人となりし類なり蓋官より右様の地を撰みて國に力し癡疾の者等を安治せしむるの法と見ゆ墳墓の前殿及四方の戸々に立て門番などする者は多くは右戰爭の節手を傷めし人々也又器械など裝填羅列する處を守るは多く足を傷めし人なり

同十七日(西洋四月二十一日)雨朝九時博覽會の事によりて會議せる公事あり

同十八日(西洋四月二十二日)霽午後二時ボワデフロンにて競馬を觀るに陪すカシヨンも從へり

此の競馬場は圓形にて周圍二里餘なり此の日は特に盛舉なれば騎人も諸國有名の者集り佛帝はじめ諸國の帝王も看官となり都下の士庶相競ふて奮出せり

同十九日(西洋四月二十三日)晴無事

同二十日(西洋四月二十四日)雨朝八時なほ借家を見る

同廿一日(西洋四月二十五日)曇夜九時より故の外國事務大臣ロアンデロイス夜茶の招待に陪す各國のミニストル其他親屬男女會集し種々の饗應あり

此のロアンデロイスといへるは墨是哥マキシミリヤンの事件につきて退職し此の時議院の官にて草木會社の頭取を勤めたり此の夜茶の筵は尤禮會の一なり親屬知音男女とも日をトし夜餐後に集會し茶酒を設け相互に歡笑談話して一宵を徹すなり此の會は其身分により交際の事務なども表向の掛合にて爭論に至るべきも歡笑中に彼我氷解する事ありと云又一局一部に冠たる職務に在るものは時々此の會を催し其局官を集め其才能を親試し其懇親を篤くし大に公私に資けありといふ佛國にてハンワレーと唱ふ

同廿二日(西洋四月二十六日)曇朝五時禮式掛ラヂユス外士官一人禮部大臣よりの書

翰を持參し來る四月廿八日(我三月廿四日)即ち日曜日なれば午後第二時にヂュイロリー宮におゐて國帝謁見の事を申來る午後二時にブレイ并にトナ等來る

同廿三日(西洋四月二十七日)晴朝博覽會掛ブレイ我士官の内にて唐銅鑒定のものを定たる事を言遣はず

同廿四日(西洋四月二十八日)雨午後二時佛帝謁見の式あり

午後一時何れも禮服佛國に在る御國の岡士ゼネラルフロリヘラルトも黒羅紗に金飾の服にて禮冠を着け佩劍にて來る同半時禮典掛二人ラミエスシヒエイ禮典の馬車を備へ何れも紫羅紗に金飾の禮冠佩劍にて來りカシヨンも通辯のために來る我公使には衣冠全權并傳役は狩衣歩兵頭並第一等書記は布衣第一等翻譯方砲兵指揮第二等書記等は素袍なり郷導者に面會し旅舍庭上より禮車に乘れり第一車は前乘四馬御者二人騎士二人宛車の前後に立つ全權傳役歩兵頭禮典掛り三人第二車は中

車六馬御者四人騎士二人宛車の前後に立つ公使并禮典掛一人并カシヨ
ン第三車は後乗二馬御者二人宛車の前後に立つ第一等書記歩兵指揮并
コンシユルゼネラルフロリヘラルドジュレー第四車は二の後乗前同
斷第一等翻譯方第二等書記並シーボルト並車三の後乗は公使の侍者三
人乗れり城中正門に到れば騎兵二人兩側に立銃兵門内兩側に並び殿に
軍樂部立並び當方通行の時樂起る玄關に入り下乗し階上には戎器を持
し百人の親兵立並び嚴整なり禮典掛總頭取禮服にて階下まで下り迎へ
先導せり一と間毎鎖し門官二人宛立侍して行當れば開き入れて直に鎖
す第五の戸扉に入れば即謁見の席にて三段たかき壇左佛帝右帝妃左方
外國事務執政大臣其他貴官列し右方高貴の女官列したり我公使は其座
前に就き式禮ありて其掛り名簿を披露し相見演説あり譯官公使の側に
進み佛語に直解して通す佛帝より答詞あり兩國親睦の交際あるより今
相面謁を得る滿悅のよしを述べられ附役カシヨン公使の右に在りて我邦

語に譯して通す夫より第一等書記所奉の公書を服紗より脱し全權へ達
す全權進みて是を公使に捧ぐ公使取て帝座にすむ時に帝座を立ち公
書を請取一禮ありて事務執政に渡されたり畢りて公使帝妃に默禮あり
帝妃も答禮せり全權は公使の側に進み一禮ありて一同退出し次の間に
いたり全權より贈品目錄を禮典掛總頭取へ渡せり夫より玄關まで禮式
掛頭取送り出たり

禮典畢りて歸館せり夜祝賀の共宴を催せり此の日公使の馬車行装を見ん
とて都下の老幼は勿論近郊よりも來りて群集し道を填てり

同廿五日(西洋四月二十九日)曇午後市中を遊歩す

同廿六日(西洋四月三十日)晴朝八時佛帝より贈品來る

同廿七日(西洋五月一日)晴無事

✓ 同廿八日(西洋五月二日)晴朝馬塞里鎮臺より人々の寫真來る午前十一時風船を觀
る

風船は輕氣球と云(佛國にては)近頃一層の發明のよし其仕方ゴムにて巨大なる圓形の囊を作り其中にガスを充分に満たしめ其ガスの輕氣をもて騰揚せしむるなりしかして其巨囊の周圍に長繩を廻らし其繩を纜聚せし處に一の小屋を繫付其中に人を乗らしむ大概風様に從て是を試む但別に舵楫の設なければなり其大なるは二十人乗位まであり尤ガスの輕氣あるゆへに騰上は意の如くなれども甚だ度を超れば害あり故に其分量極めて肝要なりといへり又下らむとする時は前の囊裏に充てしガスの氣を器械にて漸くに漏減して碍りなく地に抵る様にす是尋常空中を飛航する風船なり又別に一處に騰上して一處に低下する仕方あり是は唯、氣毬の下に太き長繩を繫ぎこれを騰上せしめて隨意の處にて繩を留め又其繩を引て低下する也但此の類は人の遊觀場に設け置く曲馬其他數々の手伎など、雜觀せしめ乘遊を望む者あれば價を取りて直に乘らしむ尤氣毬上下の時は必音樂を奏し導引の乗人は稍騰上せし處にて

紅白の旗を磨て看官に示すを常とす是は巴里の寫眞師ナタールの發明なりと云ふ好事のもの價を費して遊乗す(我本邦にも往年より仙臺の林子平しが未だ斯如開達發明に至らず)(の徒此風船の圖を著し翁工夫あり)

同廿九日(西洋五月三日)晴夜八時より佛帝の催せる劇場を看るに陪す

此の劇場を看るは歐州一般の祝典にして凡重禮大典等畢れば必其帝王の招待ありて各國帝王の使臣等を饗遇慰勞する常例なり故に禮服盛儀にて往くことにして其演劇の趣向仕組分明ならざれども多くは古代の忠節義勇國の爲に死を顧みざるの類感慨ある事蹟或は正當適直の諺譬にて世の口碑に係り人の可咲事を交へ詞は接續に言語ありて大方は歌謠なり其歌曲の抑揚疾舒音樂と相和し一幕位に舞蹈あり此の舞蹈も二八の娥眉名妓五六十人裾短き彩衣繡裳を着し粉妝媚を呈し冶態笑を含み皆細軟輕窈を極め手舞足舞蹈轉跳躍一様に規則ありて百花の風に繚亂する如し且喜怒哀樂の情を凝し一段落の首尾を整へ數段をなせり舞

臺の景象瓦斯燈五色の玻璃に反射せしめて光彩を取るを自在にし又舞妓の容輝後光或は雨色月光陰晴明暗をなす須臾の變化其自在なる眞に迫り觀するに堪たり

四月朔日(西洋五月四日)晴曉四時郵船に託して各書を家郷へ寄す夜十時ミニストル館に至り舞踏を看るに陪す

是は舞踏の席を開き親屬知音を招待するにて亦禮會の一なり蓋夜茶會の盛舉なるものにして施設も頗る華美なり凡其催しあるあらかじめ招待書を廻し其日に至れば席上花卉を飾り燈燭を點じ庭燎の設食料茶酒菓の備へ等華美を盡し其席に来れる賓客男女ともにみな禮服を盛んに飾り相集り互に觀悟し音樂を奏し其曲に應じて男女年頃の者偶を選び配を求め手を携へ肩を比して舞踏す其客の衆寡により幾所となく舞ふ其法則ありて少年より習ひ覺ること通例なるよし大方曉頃に至りて散す是則好を結び歡を盡し人間交際の誼を厚ふするのみならず男女年頃

の者相互に容貌を認め言語を通じ賢愚を察し自ら配偶を選求せしむる端にて所謂仲春男女を會すといへる意に符合し又禮義正しく彼の樂んで淫せざるの風を自然に存せるならん殊に博覽會の大典により國內事務局の催なれば國帝后妃はじめ貴族高官は勿論都下豪民集會し各國帝王貴族其他在留の諸官員盡く招待ありて其設の花麗を盡し趣向の高大なる實に目を驚せり其以下處々にて此の催あるは其身柄により同じからずといへども其趣は一なり英國太子其公使館に到着せし夜の舞踏などには佛帝後妃とも自ら共に舞踏せりといふ下民にいたりても其分に應じ或は茶肆に持出し興行するもあり是前條にいふ自ら男女配偶其倫を得る所以なり此の會を佛國にてハバルと云恰も本邦の北嵯峨大原岐岨藪原等盆踊の類に似て大に異なるものなり

同二日(西洋五月五日)晴午前本地有名のアルクドトリヨンフといふ巨閣に登る(アルクドトリヨンフとは漢譯凱弓と云意にて即凱旋の偉勳を旌表すること也といふ)

此の閣は千七百年の末初代那破烈翁埃伊諸國の戰爭に殊功を奏し凱旋後の偉勳を後世に傳ん爲め大に土木を興して建築せしもの也といふ閣の全體横長き方面にて都て密質なる石にて築立たり高さ凡四十メートル(我二程)正面廣さ凡二十メートル側面の幅之に半ばして閣の中心凡十五メートル程の處より圓形に切り抜き閣下前後左右通行を自在ならしむ而して其築立し石面四方とも都て神像又は古代有功の人物那破烈翁勝戰の圖などを鑄附け裏面には其建築の緣記様のものを記せり閣の下は一面に漆喰にて凡徑り七八メートルの圓形に敷並べ入口は鐵垣を圓圍して太き鐵鎖を掛たり閣下左方の裏面に小扉あり戸内一の暗室にて其中程に石階あり螺旋して閣上に登る但日を限りて人の登るを許す門開ありて一フランクを收む石階の數二百八十五段にして閣上に抵る閣は重層に建築し下の一層は歩行自在のみ全石面の方庭にひとしく眺望四顧隨意なり其回り縁も巨大なる石にて胸下までもあるべく爰にて

下瞰すれば正面は王宮門前に直向し凡十八丁程直きこと線の如く途上三叉にして中は廣く馬車荷車等の通路兩側は瓦斯一齊に立並べ又樹木蔭翳せり(瓦斯燈の下より兩側とも人家軒下に接し漆喰叩にして人家の往來とす又馬車路と人行の路の際處々に噴水器を仕掛け風日揚塵の時はゴム管もて所々へ水を灑ぎ雨日は馬車路際より小渠ありて處々大渠へ)背面カラントアルメーの泥濘を瀉下す巴里都下壯麗の市街は皆かくのごとし(背面カラントアルメーの通街も直線の如くみえて凡二十丁程其間セーヌ河の鐵橋を超へ巨大の銅像は初代那破烈翁なり又正面に宏壯なる廓はノオトルダムなり(是はストの本寺の如きものに)又左に高く聳るはバンテオンなり(巨利の一なり高樓として府下最第一の巨利也)又右遙に舟楫の行通ふはセーヌ河なり岸に二三の巨屋は公議院(コラチイフ)鑄錢局外務局也又其右に長圓なるは博覽場なりなほ右郊外に高きはモンパンリヤンといふ全府警衛の城堡なり其側樹木森鬱たるはホワテブコンなり其他郊外まで布基羅網手に取るが如し但其高聳なる目眩股栗を覺ふ觀了て下りぬ

同三日(西洋五月六日)晴夜九時よりチュイロリー宮殿にて舞踏を看るに陪す此の

舉は席上に瀧など設け庭園張燈の飾り等。國內事務局の催しに比しく盛會なり

チユイロリー宮殿は國帝の居城にて前は市街に接し左傍はセーヌ川に倚り周圍石築の長家造り入口の門々には砲卒立衛す城中石にて敷つめ往來自由を許す右の方鐵垣の仕切ありて中程に石門あり門上石にて彫鐫せし獅子の飾あり門の正面はブラストラコンコルドといふ廣き一衢のごとき地所都て漆喰敲にて數百の瓦斯燈あり又噴水器あり暗夜とても燈光掩映し人の眉毛を辨す其壯麗實に拊手して嘆するに堪たり門の左右騎兵立衛す門に入て鋪石の廣場玄關様の所ありて内に入れば左右に階子あり正面の屋根に國旗を立つ此の所廣さ十間許奥行六十間許なるべし是則帝宮なり皆二階又は三階造りにて折廻り同じ造りにて諸局あり門内往來の左又廣場あり三方とも王宮同様の構にてミゼイとて古器物を羅陳し置官局なり二階は油繪或は古代の珍器各國分捕の品等貯

あり初代那破烈翁在世の衣服諸道具類秘藏し佛國起し畫圖所持軍艦雜形等あり油畫の場所は古代の名畫など世に珍しきものあれば畫を好める男女とも許しを受摸寫するを得る王宮裡手廣なる庭あり樹木生茂り噴水泉池もありて周圍鐵垣にて繞らし入口には砲卒守衛し其中男女貴賤をいはず遊歩往來自由ならしめ帝宮より一と目に見ゆる所也平日國帝親しく指揮の調練は此の内にて施行ありといふ實に王侯の遊園といふべし

同四日(西洋五月七日)晴朝パノラムに到り伊澳戰爭の時佛國援兵を出し勝利ありし圖を看る

シャンセリセイ博物堂の側に在り周圍圓形にて亘り凡十間四方なるべく入口にて傘杖を預り木戸錢一人前一フランク宛なり中央より階子にて螺旋して登る上れば堂の中央最高き所に出る其所は山の巔に擬し其傍に大砲小銃破裂せし或は彈丸の割たる杯ありて其實況を知る稍遠く

行けば四方山間岬曲の様遠近道路縦横の位置樹木の疎密烟雲の出沒盡く備り澳の軍勢と佛の兵卒と亂戦に及び雙方の軍威方に熾なる體を畫き殊に人物大なる所は眞に迫れり就中佛帝左右并に騎兵大砲を率ひ澳軍に馳向ふ處彼方より發せる彈丸此の方侍醫の馬の胸に中り躍跳する體佛帝回顧せる様其迹より來る騎兵も彈丸に中り落馬せるもあり又此の方より發せる大砲彼方火藥庫に中り人馬共に烈け車輪空中に飛揚し其火色物凄きまでに見へ雙方の手負死人も夥し或は騎歩兵大砲の山間を馳驅し又は村落の際より互に突出して抄合小銃大砲の發せる歩卒入亂劔にて撃合傷者を持運び疲卒憩息する或は一處の味方苦戦なるを見て他方より馳て之を救ふ或は大將と見へて勇ましき裝にて兵卒を指揮せしが忽地撤兵に狙撃せられて落馬するなど諸の體盡く極る戦場の形狀目のあたり視る如くなり尤佛國の方勝利に見えたり但將官等は其時の寫眞によりて描きしなりと云先導者一切く講説あれども分り難

し全體の畫圖油繪にて圓形によりて勾配をはかり遠近距離などを見せしめしなるべし其摸寫精巧なれば人をして實境にあふ想を起さしめ頻りに扼腕唾手などするものあるもいとおかし抑油繪は歐洲にて古來より之を珍貴として名人の筆に至りては一面の額其價數千金に至るといふ唯奇を好み翫を銜すにはあらず今此の畫の其妙を極め當日の景況を今日にしらしむるを見れば亦世用缺くべからざる一具なるべし

同五日(西洋五月八日)晴朝本邦在留公使レオンロスの留守を訪ふ

同六日(西洋五月九日)晴夜九時より評議局の舞踏を看る

同七日(西洋五月十日)晴午後三時本草會社討論場へ人を遣はさる外國局官吏ルイ

イトジョフロハー名簿をさし出せり

同八日(西洋五月十一日)晴午前十一時英國太子館より招待せらる午後三時都下鳥

獸草木種々蓄ふ園圃を觀る

同九日(西洋五月十二日)雨魯西亞公使名簿をもて尋問す夜ブランセスマチルド(帝族)

リ)招待あり

同十日(西洋五月十三日)雨午後一時宇漏生使節尋問す夕五時より使節接待役コンシユル等同行にてチャートルシヤツトルイへゆくに陪す

此の劇場多く佛都前顯の景狀に同じ因て略す

同十一日(西洋五月十四日)雨午後瑞西ミ、ストル尋問すドワンテロイス方にて夜

茶の饗あり(此饗も前同断)

同十二日(西洋五月十五日)霽朝八時佛帝より使者立られレセツブチュイス宮殿におゐて開筵によりて招待あり午時シャルクランの館舎へ引移りぬ

此のシャルクランは市外幽雅の地にてボアデブロンギユへ續く地なりボアデブロンギユは都下遊憩の最大なる公園にてアルクデトリヨンプより一條の大路あり周圍二三里もあるべく樹木蔭森として路幾筋もありて中央廣き路は馬車を通じ樹林中左右の徑は遊歩又は騎馬の行路とす洒掃等至りて届き池邊は異禽珍魚など養ひ小艇ありて游棹擅にせし

む其池中を周回して舟錢凡二三フランクなり中島に佳木奇花など植え茶肆も奇麗に建聯ね風流の士など夕餐を命す此の池へ灑瀑布泉を懸夏月占涼の處とす此の他ボワドワハンセーヌバルクモンソウビットシヨウモンなど處々に遊憩の園ありて各其水土によりて意匠を異にし風景も各様にて目を娛しましめ心を怡ばしむ都て士民遊息の公園にして其趣き同じければ是を略す

此の公園を行過てヌーエーといふ地に出る所にジャルグントアックリマタシヨンといふ植物苑あり各國の佳木奇草を集めて培養す熱地のものは苑中玻璃室を作り蒸氣にて暖にして培養す處々水泉ありて浮萍の類も生じ紅魚白魚瑤瑁魚などを飼ふ又禽獸を畜ひ置所あり牛馬豕羊鹿猿兎犬など種々ありカンゲロウとて亞刺比亞産の獸あり其貌鼠の大なるごとくにして四肢前は不用にし後趾にて走る極て速なり牝は腹皮二重にして子あるときは常に外皮に入れて養ふ時々稚子首を腹皮より出して食を覓む甚

だ奇也其他獺狐狸貉の類最も多し禽は孔雀鶴錦鷄雉鳩鷄の異品なる其外小鳥も數種あり其風土に従ふて氣候を凝し性を換え質を變せしむる等の術を修せる爲設けし所にて經費は其修行の者結社中別に供給の法あれば費を厭はず如斯細事も能其試験を遂ぐといふ又此の地の外にジャルダンデブランドとてセーヌ河の南縁に大なる禽獸園あり大概前の植物園に同じ只獅子虎豹象豺狼熊熊獨等の類を畜ふ猛類は皆鐵圈にて畜ふ曰ボボタムとて南亞墨利加に産する比類なき醜態なる海獸あり其貌牛の大なるにて趾太く短し全體毛なく墓の肌にひとしくして厚く甚だ猛健なり口方大にして恰も祇園會に用ゆる獅子の頭に髣髴たり常に水中に放置看官パンを投與すれば水より出でこれを食ふ又蝮蟒の類多し同國の産なり暖を好めるよしにて箱に入れフランクットにて包めり其大なるは圍り一尺許りもあるべし時々箱の中にて首を掀舌を鳴らせり又鱷鮫の類ありいづれも生畜せり又巨鯨巨蛇の枯骨を全備す都て修學の具に供すと云庭中小高き

所に一樓あり樓上死者の骨及小兒の骸を酒に漬せし或は死者を其儘に乾し堅めたるミイラ如き者數多く羅列し何れも小札もて其由縁を標記す蓋異邦の人骨格の異なる或は異形に體を受けし又は病によりて變せし病根等を考證に備なるべしこれ又修學の者結社して如斯其細大を遺さず考索に心を盡せる感すべし

同十三日(西洋五月十六日)雨無事

同十四日(西洋五月十七日)曇午後英國公使館の舞蹈を見る(此舞蹈も前同斷略しぬ)

同十五日(西洋五月十八日)晴佛后妃の催舞蹈に招待ありし午時大砲器械貯所並巴

里有名の古寺其外交易公事吟味所罪人裁斷等を見るに陪せり

同十六日(西洋五月十九日)晴無事

同十七日(西洋五月二十日)晴休憩

同十八日(西洋五月二十一日)曇アベニユードランペロウールの傍に在る花園を見る

同十九日(西洋五月二十二日)曇暮七時外國事務執政方にて夜茶の饗あり(此の夜茶も前同斷)

同廿日(西洋五月二十三日)晴モリス方へ往く

同廿一日(西洋五月二十四日)晴無事

同廿二日(西洋五月二十五日)晴おなじ

同廿三日(西洋五月二十六日)晴おなじく

同廿四日(西洋五月二十七日)晴午後一時より巴里市街埋地道を視るに陪す

此の埋地道の興作は近年の事にていまだ町末は造築中なり市街往來の下に別に一の洞道を穿通し洞内立行して碍りなき程にて下に一條の川を疏し兩側歩行すべく市中人家の濁水及汚溺水戸尻迄も皆此の川に注ぐ各處に注ぐ穴ありて瀧の如くに落つる上に大さ拱把の鐵箆を通じて吞用水を水源より遠く引き細き鐵箆は瓦斯を釜元より取りて各家に分つ所々明り取りの穴あれども委しくは燈を點せざれば見えがたし余輩城の裏手にある市街より鐵蓋を披き石段を下りて入る川幅に架せし車あり其れに乗りて屈曲十五六丁にして川幅廣くなる是より舟に乗り凡

半里許にして城西一箇の市街に上る洞中陰々として臭氣鼻を穿つ漸く日を望むを得て大に快然たり此の埋地道人家の汚物を流せるより常に是が爲に掛け置く人夫ありて器械にて掃除して壅塞なからしむ

同廿五日(西洋五月二十八日)晴阿蘭公使并海軍コロニイ砲兵頭并ホーシヤン等尋問す佛國アミラールヲエー支那日本海の總督を命せられ近日本邦へ出帆せるにより尋問す

同廿六日(西洋五月二十九日)晴アミラール附屬の官人等來る

卷之三

慶應三丁卯年四月廿七日(西洋千八百六十七年五月三十日)晴此の日各都下に出遊歩し綠陰清

涼の地を卜し幽致の茶肆に入り並榻して茶菓を試む

同廿八日(西洋五月三十一日)曇ボワテブロンに往て銃を試む

同廿九日(西洋六月一日)晴夕四時魯西亞帝佛國へ到着せり

此の日魯帝の巴里へ到着せるを見むとて土人近郊の者まで群集しガランドホテル客舎の前往還までつゞく夕四時魯帝迎の馬車其餘騎馬兵歩卒とも美麗を盡し汽車會所へ出でたり佛帝にも壯麗なる馬車にて右會所半途まで出迎はれ同四時半頃同車にて帝宮に入らる暫時ありて魯帝にはポールパールといふ街の兼て設置れし佛帝の別宮へ移らる陪從の士官警衛の騎兵等も相應に召具して殊に立派の行装なり

同晦日(西洋六月二日)晴午後二時ボワデブロンの競馬を観るに陪す此の日魯帝佛帝帝孛漏生太子白耳義王其他貴族ともに一覽あり

此の競馬去三月十八日觀しと大方同くして其催し盛大なり西洋諸洲の競馬は奕戯に同じく相賭して勝負を争ふを常とす故に其場にて突富の札の如きを賣りて輸贏によりて得喪を爲すを事とする催主の如きもの多し此の日佛帝と魯帝と十萬フランクづゝの賭ものせしが魯帝の方勝たりしかば其十萬フランクを以て魯帝より直に巴里の貧院に寄附せし

とぞ

五月朔日(西洋六月三日)晴午後シベリオン博覽會の事を議するによりて來る

同二日(西洋六月四日)晴魯西亞帝より使者來る夜九時國帝の招待によりて劇を観るに陪す

同三日(西洋六月五日)晴午時ブランセスミユラ尋問す今夕四時半孛漏生王到着せり

魯帝到着の時と同じ此の日魯帝佛帝の宮へ訪れしに前日土人群聚蝟集するをいとふて王車行過の路筋を市街の人の知らざる様に通られけるとぞ

同四日(西洋六月六日)晴午時半より巴里城西南の郊ボワデブロンギユデブーロトームロンシャンといふ所に大訓練あり佛帝は勿論魯西亞帝孛漏生王魯國太子孛國太子其他貴族集會せり我公使をも兼て招待ありて我輩も陪從するを得たり

此の訓練の兵數歩兵凡二十大隊(組合聯隊)土坑兵樂手隊附屬砲兵隊二十座樂手附屬騎兵二十四エスカドロ歩騎砲の三兵合せて凡六萬人程なりといふいづれも壯麗なる装にて部分を正列し諸兵裝頓の上佛帝魯帝其他諸王子とも騎馬にて陣頭を一巡し夫より行軍の式あり尤大訓練にて轉動なしがたしとて只周旋行なせしのみなり號令は佛國第一等陸軍總督なり右行軍終りて後一隊毎に其指揮官にて引纏ひ各陣營へ歸る其號令指揮の整齊旋回機變の自在一人一體を動す如し

夫より佛帝魯帝同車にて歸宮の途中ボワデブロンギユの松林の間より魯帝を狙撃發砲せし者ありしが幸にして側の馬に中りて兩帝とも恙なしされども大に騒ぎて其者を忽地捕得たりとぞ其後の始末はラシエクル新聞紙撮譯に詳なれば此に附載す

千八百六十七年第六月六日佛都にて調兵の舉畢りて後那破烈倫帝と歴山帝と(即ち魯西亞帝の名なり)その外諸王太子いちどう乗居たる帝家の馬車ボワデ

フロンの松林の間を通行せし折柄一人の男歴山帝へ對し手銃を一發せり歴山帝巴里在留の間附添はしめ置たる我國帝の騎兵(モッシホフ)是を見て直さま馬車の乗口の傍に進みたりしが其男子衆見物人の最前に立居たるを見受たりしかばたゞちにおのが馬を盤らしてその男子に乗かけんとせしに其男子は已に自からおのが手に傷付しをも顧す其志を達せむと更にその手銃を二發せり其一彈は騎兵の馬の鼻穴に當り一彈は自から其指の一を落せり茲に於て諸衆人悉く大聲を發して叫喊せりさて其馬の血帝家の車中に注ぎ帝衣を汚かせり是を以て國帝は傷を受たる如く見えたれども天帝の眷佑に依て國帝及歴山帝少年の王子も皆傷を受たるものなかりし○拿破那倫帝の神色少も變ることなく車中に立て衆人に向ひ誰も傷を受たることなしとの言を告たりしかば人々感服せり歴山帝も同じく自答して我等同じく敵を見たりと述べられたり王子フラヂユルの衣服血に汚れたりければ拿破烈倫帝これに向ひて血に汚

れたるは傷を受られたるやと問はれしに否君にはいかゞありやと對へられたり國帝及歴山帝各王子の禮服もみな血に汚れたり○其時其場にありあふ人々皆憤怒しその男子をとらへ是を罪せんとせしかば餘儀なく士官の警衛を要するに至りしその男子は直に一の馬車に入れ二士同乗し巴里の番士一ペロトントこれを警護し市中取締役所まで送りたりしは恰も五時半なりしその男子の發せる彈丸一婦人に傷つけたりしといひ又その婦人の頭飾に中りたりしのみなりともいへり尤其婦人は馬車に乗せて同じく役所に送りたり其男子は波蘭人にてベリゾウスキといへるものにて年齢二十歳器械の職人金鐵類を製する工家モツシユルグアレといへる者に屬し工を操れるものなり同車警固の一士官途中其男にいふに爾の彈丸歴山帝に傷つくことなしといひたれば甚残念なる體にて憤怒の色顔面に顯れたり又其生國を糾せしに自若たる體にて直にその波蘭人たることを白狀しまた其郷貫年齢等も隠さずこれを陳述

したり其者はウオリニーの産にて二年前即十八歳にて其國を去りて此の地に來り器械の職工とはなりグアンの手に附き其後モツシユールゲールの手に屬し今年の第五月四日ゲールの方より暇を取たれども兼て波蘭人の爲に法國政府より與ふる扶助金一箇月三十五フランクと其他のものにて暮し居たり同車の士官その職業を廢したる所以を問たれども對へざりし其後歴山帝を狙撃すべきとの志を企てたるは何時頃なりやと尋たりしに帝の巴里に到着せしことを承りしより思ひ立たるよしをいへり其最初は火曜日の夜遊劇所に赴くとてその企をなさむとせしかども手に一兵を持たざれば空しくブールパールベレチェー往來の角に立て衆人の前に出て歴山帝を見たりしに帝も己の波蘭人たるを察し知りたる様子なりと自からいへりと且其往來にて衆人帝の爲に萬歳を唱ふるを聞たりしが己は一言をも發せずその折より狙撃すべき志ますます決せりと○其明水曜日ゾールパールセバストボルにある武器を露

げる家に行て二挺がらみのピストルを求めたりしに其商家にて八フランクづゝの筒數多を示したり其用に適すべきや否やを問しに其中の試験を経たるものあり九フランクにて賣るべしとの事にてその最佳なるべきを告たれば是を買得たり即その價を遣し筒を携へ己が家に歸り薬を装せんと試みしにその彈の餘りに小さかるべく心付たりしかば他の彈を鑄むとせしが又心付て其彈を大きくしたりしのみにて止たり○其翌朝即木曜日渠急ぎ衣服を着し朝七時に起出て其裝藥せる手銃を囊中に納め午飯を喫せしも甚儉素なりし裸麥のパンとソーシオン(摺肉に
銀紙を
かけた)及葡萄酒半瓶を傾けその飲あます所を己袴中に藏せる小瓶中に移して携へたり而して徐に競馬場の方に赴きたり○調兵場に歴山帝の到れる時是を發せんとせしかど其道を知らざるより終に帝車に出合ざりし調兵畢るの後帝車カスカードの道を歸るべきよしを聞しりたれば其岐をなせる路頭に立衆人の前に出でこれを待受たり恰も騎兵隊一

デメント引來れる時なりしかば帝車之が爲に暫時路を撰ぶがため猶豫したり頓て帝車の進まむとせし折渠帝家鹵簿に近づき拿破烈倫帝歴山帝兩王子の車過る時ピストルを振りて是に近づきたりと白狀せり○士官又爾が輩を能守護せし政府の客分たる歴山帝を何の爲に狙撃せんと企たるやと問ひしに渠涙を流して佛蘭西政府に對しすまざることをせし旨を述べたり○士官再び歴山帝を撃んとせしのみならず拿破烈倫帝をも撃べき企なりやと問ひしに波蘭人の發する彈丸は決して他人に中らず歴山帝に直に中るべき筈なり世人をして歴山帝の虐政を受けず自在ならしめむとの外決して他意なしと述べ久しく默然として居れり○諸裁判方の重役今午後問注所に赴きたるのみならずミニストルデルエル初め帝命を以て悉く集會せり歴山帝のエートテカン側役なるマムトスワロフも出席したれども自高ぶりて直に罪人を糾すことを嫌ひたりしかばルエルより其最後の糾しはマントスワロフ氏より始むべき

旨をもて是を促したりしにより同氏魯語波蘭語佛語等にて種々の問をなしその親屬及以前の職事等を問ひしに十六歳の時波蘭一揆の企に組し砲を肩にせしが二年前國を去りしよりは親屬とも音信を絶ちたりしよしを述たり○又父と書信の往復をなすやと問ひしに決して其事なく且他人より己れの隱謀露顯せんとの恐れあれば決して人に語らふことなかりしとの事は更に恐るゝ氣色なく幾回もくりかへして是を述たり渠傷を受けたるをもてその左の手を布綁しこれを水に浸しなどして丁寧に介抱なしたり渠いかにも沈着して頗る才智あるべく見ゆその故は陳伏に一々調印し且ビストールはいづれより買得たるなどの事までも委しく書面に認めたり○手銃は臺尻の方損し其中に彈丸一つ入居たり第二時(即夜ニ時なり)コンシエルセリーへ連行番を附置くといふ○又フランスといへる新聞中には歴山帝に屬從せる諸官悉く憤怒して速に歸國あるべしと勧めたりしかばこれ程のことにて兼て期したる月日を一時も低

ふすべきなしと答へたりと

是等の新聞は本邦へも速に舶來して諸人疾く見侍りたらむを今茲に其儘くだゞしくしるせしは贅言なれども其時の新聞の速にして委しきと且其寛優なる其國風をしらしめむ爲その儘記せしものなり又東洋の新聞は米國桑方斯哥印度新嘉埠の電線にて不日に達するを得せしむれば本邦又は支那印度の瑣末なる珍事までも都て如斯迅速に其詳なるを得る看る人其氣息の快通するを察すべし

此夜十時魯國公使館の舞躍を見るに陪す

同五日(西洋六月七日)曇魯帝の爲に町會所にて大舞踏をなし凡八千人許集るといふ(此の會佛帝魯帝李王佛后妃等みな招待ありて曉に徹す)

同六日(西洋六月八日)晴午後一時新旅館を視る同四時病院を視るに陪す

此の病院は市中に接し高敞の地に在り周圍鐵牆にて屋宇は層階造りなり入口番卒を置き各房病者の部類を分ちて上等下等の差別あり一房毎

に病者數十人牀を聯ね臥す臥牀皆番號あり臥具都て白布を用ひ専ら清潔を旨とす看護人は皆尼女の務とす配劑所食料所等十分の結構なり瀧泉を掛て灌頂せしむる所或は浴せしむる所あり床下蒸氣管を通じて冬月各房を温むる用とし又一の幽室あり六七箇の臥牀に死尸を載せ木蓋して面部の所は布もて掩ひ側に勝札あり是皆病者の病源の分明ならず衆醫疑案を存せしものにて其標札に死者の名年齢より病の症體を精しく記し死尸日を経て必ず其病の在る所より腐敗するをもて驗按發明の一端となすといへり院の後ろに洗濯場あり數人其事に従事す院内遊歩の花園あり病者の運動に宜しきもの地内を徜徉せしむ此の病院は巴里の市中に或る富家の寡婦功德の爲め若干の金を出して創築せし由にて其寫眞の大圖入口に掲げてあり○凡病を治するは藥療と攝養とに因るものにして療治はもとより其學術の研究練磨によるといへども其看護保養の適宜なる資けを得て順愈追快に及ぶものなるべければ此の病院

の趣意療養はさらなり其看護保養食物の可否加減の精密にして且風乾雨濕を計り其氣を抑揚發塞して其節に適はしめ身體運動なさしむるをもて療養相應じて愈快せる日を究めて驗を見るといふ然るに凡人其家に在りて醫を請じ親屬愛護して舐撫し病者の意を覘ひ好む所にまかせて薦め或は過食し又は乏飢し發塞をたがへ氣を閉ぢ精を泄し漸く心神を勞せしめ却て病を蓄積し遂に不治に至らしめ醫を咎るの類少からず皆まどへるの甚しきといふべし故に此の地にては病者はかならず病院に就て療養を請じ醫療の過ちにて天殞なく其天然の齡を遂るを得せしむといふ是人命を重んずるの道といふべし

同七日(西洋六月九日)晴日曜日休暇佛帝魯帝孝王と俱にウイールサエルへゆきて遊ぶに陪せり

同八日(西洋六月十日)晴夜九時半帝宮にて舞躍あり集會せる人は凡八百人許なり
同二時ばかりに散せり

同九日(西洋六月十一日)晴夜幸國公使館にて舞躍ありて招待せるに陪す此の日へルゴレース街の新館稍修繕せしとて附屬士官數員引移りぬ此の夜は假亭へ先だちて移りし人々の徒然を慰せん爲訪ひつどひて夜もすがら例の論討雜話に耽り短夜の更行くもしらでいつか空も明ちかくなりければいでやボワデブロン朝景色を見んとともに打出けるに曙のえんにおかしく木々の葉も露けく往來の人影もたへてゆく互に口すさびなどしつづ川の澁りにいたりけるに水鳥など群れ居て時ならぬ人登にも驚くけはひもなく閑なるさまは人の害せる心なきに馴れたる道の傍にえならぬ花など咲つゞけたれども手折る人さへもなきは興ある政の先づゆかしくぞおもはる夫よゝ瀧のある所にいたり人待つ爲に設けたる椅子ありしばらく憩息し日の出る頃に各歸りぬ

同十日(西洋六月十二日)晴無事但新聞を得たり左の如し

當月第十一日英國軍艦アルキユス内海へ向け出帆せりその船にてはミ

ストルホルトサトウアストン九番レシメント甲必丹トウント衛兵の號令官甲必丹アフリン並にレシメント隊の一部(四十人宛)及騎兵馬とも乗組せ公使の到着を待んとす○大阪チフロマチーキ役の尋問英佛米荷の公使とも十日の内には大阪に向け出帆すべし其附添人も多數且大阪にて是を饗遇せる爲に大なる用意あるべし英國軍艦はシリスクにてシルハルリーパークス及妻其兒の一人ミストルロユツク醫ウイリスウキンソン公使館衛その指揮官フラメイ乗組行べし外略す

同十一日(西洋六月十三日)雨午後二時巴里バツシイ郷ベルゴレイズ街五十三番といふへ轉宿せり取締の小使人を雇はる一同へ轉徙の祝等あり同時外國局シユロプロウへ移轉の事を達せらる

同十二日(西洋六月十四日)曇無事

同十三日(西洋六月十五日)曇プロリヘラルト來る

同十四日(西洋六月十六日)曇教育ミニストルへ教師の事を言遣はさる

同十五日(西洋六月十七日)曇朝ジツクドベルシヤキ來訪す

此の日本邦當卯四月十二日出横濱よりの新聞紙を得たり

其略に佛國アマラルローク其公使に従ひ大阪に赴きし節受る所の行遇に因りて考ふれば日本人外國人に對して懇親の意を表し且其開化日々進めるを見るべし(此の他略しぬ)

同十六日(西洋六月十八日)晴夕五時荷蘭留學せる本邦の人々到着せり

同十七日(西洋六月十九日)晴無事

同十八日(西洋六月廿日)晴午後二時よりフランセスミラ誘引にて博覽會を觀るに陪す荷蘭留學生等も從へり

博覽會場はセイネ河側に一箇の廣敞の地にて周圍凡一里餘もあるべく元調兵場なり其中心に形ち橢圓にして巨大の屋宇を結構し門口四方より通じ彩旗を立繞らし内部外部と分ち順次に道路を通じ徘徊遊覽に便ならしむ内部は乃屋宇の内にて東西諸洲此の會に列する國々其排列す

る物品の多寡に應じ區域の廣狹を量り各部分を配當せり佛蘭西は自國の事故最も規模を盛大にし天造の靈妙人工の精微産物の豊備學藝の高尙なる之を世界萬國に比較して愧づべからざるのみならず以て其得意を示すに足るべき目途なれば其場屋の半を占めたり英吉利は其六分の一を占め宇漏生白耳義南北日耳曼聯合州澳斯多利は何れも其十六分の一を占め魯西亞米利堅伊太里荷蘭瑞西は三十二分の一に過ぎず墨是可西班牙都兒格は其半にして葡萄牙希臘丁抹埃及巴社亞弗利加等は又其半に過ぎず我邦の區域も是等と同等にして之を支那暹羅兩國と三箇に分ちて配置せしが我物産の多く出でしにより遂に其半餘を有つに至れり場中排列する所のもの凡物華天寶より日用の雜品學藝に係る諸道具とも自然の化育によりて成るもの或は窮理の上より神を極め精を殫して造りし物上は鴻荒希代の古器珍品を聚めて殘す所なく下は現世發明の新器を陳て餘すことなし各國品物の異を觀ば自ら其國の風俗其人の

智愚も思ひやられ殊に東洋西洋風氣俗尙の懸隔せる凡器用服色の上に就ても略、其一端を概見すべし都兒格埃及亞刺比亞の如き亦其風俗を異にして荒僻陋固の景況其物品によりても推知せられたり瑞典諾威の如き地球西北の一隅に僻在して文物いまだ開化の盛なるに至らざるも亦察せらる場中の物品排列の盛大なる既に凡例にも言へる如く普く記し盡く載る能はざれば姑く闕如に附し所見の大略を筆する而已

人工の精しく學藝の新なる歐洲競ふて著鞭の先を争ふ故に此の會に出せる物品は何れも巧智を究め奢靡を盡し聲價を世界に博めむとす故に蒸氣機關の如き智機の靈工意匠の慘淡看破すべき所といへども我輩其學に達せざれば其理を推究する能はず雲烟過眼に看了すること遺憾といふべし只其見る所に據れば亞米利加より出せる耕作器械紡績器械は就中其尤たるものと稱すべし英國は之に亞ぐの説あり此の部内にて看客を臺に載せ蒸氣を以て押上げ屋上に登らしめ屋上に散歩の路ありて

外部の臺榭堂塔庭園諸場を一目に眺望せしむ

油畫は歐俗最珍重する所にて其學科も亦盛に至り各國より有名の肖像又は景色等を出し其種類頗る夥しく縷舉に暇あらずといへども其古代を摸寫せし多くは宗旨に關係する事跡又は殺傷の様體或は絶世の佳人有名の山水など當時譽を擅にせし大家現今名を博せる良工の筆跡なれば其優劣固より評し難く佛蘭西にて出せるセバストポールの戦争の大圖の如き其人物大さ眞の人と同じく其肖像も當時の將官を眞寫せしものにて敵味方交互入亂奮闘蹂躪する體彈丸破裂壓死の體大軍血戰の景狀等遺すなく描畫し死尸道に横り砲烟天に漲り其勢氣動容宛然實地に見る心地して半は壯快とし半は物凄く見ゆ此の油繪は價貴く方丈室に掲ぐべきは小額にても工みなるは千フランクに下らず其上等なるは亦推知すべきなり

金銀古貨幣は羅馬希臘都兒格最多く形ち異常なるもの多く又古雅にし

て文房の玩具に供したきもあり亦金銀を以て製作したる物象人像或は器用に備ふるもの等夥しく排列し其用ふる所果して何の用を爲すや解すべからずといへども昔時其國の昌盛にして物力も殷富なるを知るべく將其國王の下民を擅制し一己驕奢の欲に充つることも又意想するに足れり各國現に用ふる金銀貨幣の見本を聚めし處あり我邦の大小判一分銀二朱金一朱銀も列し歐洲其他各國圓貨の中に在て獨方正を示せり尺度量衡も各國現に用ふる所を聚めて列せり我邦量の如き又圓形中方正なるを以て特に目立たり蓋貨幣は萬國交通の本資なれば各國其制を異にするは四海一家の誼に於て缺典なれば之を稠人廣衆に其異同如此なるを示し人々をして之を同規一致に歸せしむること至便の念を生せしめ遂に世界中其論を公なりとして同意釐正するに至るを期する爲め特に其議事役も命せられ尙各國の論辯を俟と云ふ服飾器玩は巴里斯曾て精工の名を擅にする處なれば殊に其極奢窮靡の物品其仲間により競

て出し金銀珠貝寶石玳瑁珊瑚を用て製作せしものにて希世の珍と稱すべきもの數ふるに暇あらず服飾に至りては時様風流日新を逐ひ殊に歐洲の魁先を占る華奢の習俗を観るに足れり珊瑚の製作物は伊太里の名産にして其種類最多く出せり又同國より出し天造物中孔雀石の大きさ合抱餘にして長さ三尺五寸許なるあり亦奇觀なりし
學術器械は我輩其術藝に通せざるにより其發明の可否を認る能はずといへども醫師道具及測量器の如き最品類多く見へ就中人身解剖の眞形を摸せし紙細工など精工無比と覺ゆ又越列機篤兒を以て圖書を摸出せる器械あり新發明なるよし電線機の新製なるを多く出せしは瑞西を以て第一とせり絹布織物の巧にして且鮮彩なるは黎昂其名高きに負かず華紋織出しの精麗各色染付の艶絶なる人目を眩し他邦の織物は醜婦の美人の側に在るが如し又造花の工なる殆んど玄化の巧用を奪ひ薫なきをあやしむ凡此の場中歐洲人といへども一週日を歴るに非ざれば尋常

看了する能はず況や其學術窮理上に關係する諸物品其理源に溯り其所
以を考究する學識強記のものにあらざれば耐へざるべし我輩語言通ず
る能はず識見凡劣なる加ふるに實際公務ありて數日縱觀するを得ざる
により全く夢裡の仙遊其光景の一斑を模糊に記するのみ展場の外廡は
周圍は各廊を開き諸州の名産を鬻ぐ茶肆酒店は其國風の妝飾せし二八
の美姝を撰みて五七人宛鱸に當て客を迎へしむ亞國より出せし酒店は
殊に絶色ありとて遊客も多く湊り澳國の酒店は其女の服飾も一種の製
にて古代めきて見ゆ其外東西各國の趣を異にせし風をもて其國産を鬻
ぐ中に佛國人の外邦様に扮作し未開の風俗を摸し奇を好む客を引き奇
贏を得んと欲するものもあり看客多くは其國より出せる店にて休憩す
是意情の然るのみならず飲食も亦適宜の鹽梅あればなり
外部は徜徉自適なるにより毎日日斜の運動散步にまかせ頗る細密に遊
覽するを得たり此の部内も稍廣大にして一兩日にて看了する能はず遊

園は地球上にあらゆる植物動物を萃め博物學者の考證に備へ討論工夫
の種とし培養樹畜の理を發明せしむ宮殿亭榭堂塔家屋は萬國各風あり
て文質儉奢自ら國體風俗の趣向を異にするを示し特に智識を長せしむ
るのみならず亦萬里を咫尺の中に約して五族相交るの誼を知らしむる
といふべし

遊園の部

第一 暖室

此の暖室は玻璃にて屋宇を設け蒸氣を通じて之を温め熱帶土産の花
卉を其暖度に適して養ふ室なり

第二 帝后宮内の模造

第三 オルチエストラの圓形なる宮殿

第四 熱帶國々に産する文禽彩羽を聚めし場所

第五 水上に浮生する蘋藻の類を養ふ人造の池

- 第六 各國の植木を養ふ室屋
- 第七 熱帶國々の奇花異草を聚めし場所
- 第八 薔薇の類數多栽聯べたる場所
- 第九 第五と略同じ
- 第十 荷蘭古圖書を置ける堂の模形
- 第十一 ジャマント(寶石の名)細工所
 ジャマントは其質水晶に似て光彩の更に燦然たるものなり歐洲寶石中最貴重にして高價なるものとし多くは指環婦女の首飾などに嵌入すべき程のものなり大さ寸に充るものは曠代の至寶にして貴豪に誇る兆とし魯西亞帝英國女王等の所持せるは何れも寸餘にして之を圖式にも露し世に有名なり此の細工所において寸餘に至るは更に認めざりし

第十二 新案の馬車類

- 第十三 荷蘭の農舎の眞形
- 第十四 鐵軌に關る在來及新發明の器械
- 第十五 白耳義の畫堂
- 第十六 レヲポルト第一世半身の石像

○佛蘭西の部

- 第十七 皇宮
- 第十八 サンマリーの農舎
- 第十九 創傷人を治療する病院
- 第二十 兵糧を準備する場所
- 第二十一 寺院梵刹
- 第二十二 鐵造の燈明臺
- 第二十三 寫真場
- 第二十四 クリウソー(名人)の發明せし蒸氣器械

- 第廿五 消火器械
- 第廿六 軍務局より出せし兵具類
- 第廿七 萬國演劇

此の萬國演劇といへるは未開國の藝人を聚めて其國風の戲を演せしむ就中亞弗利加洲中國々の遊戯は缶を打ち鼓を鳴して歌舞をなし又は紐もて腹部を締め兩人左右より追々しめ上るにより恰も捏切ばかりに至り手を延して幾度となく中返りをなし又はシヤボテンの堅く熟し針の如き芒刺あるを馬食して満口血を灑ぎ或は焼き鐵の烙の眞赤なるを吮め口より涎液を流しなどする體見るも厭ふべく人間の爲す業とも思はれず眞に野蠻の風態禽獸と相去る遠からざるを観るに足れり

- 第廿八 圓形の層室
- 第廿九 歌弦ある酒樓

- 第三十 瀧泉を仕掛し場所
- 第三十一 風車
- 第三十二 瑞西の風に設けたる酒樓
- 第三十三 工匠家屋の雛形
- 第三十四 水車
- 第三十五 器械にて鳴す撞鐘
- 第三十六 木匠建築の雛形
- 日耳曼 西班牙 瑞西 魯西亞之部
- 第三十七 農具
- 第三十八 畫具を聚めたる室
- 第三十九 澳斯多利彫刻細工物
- 第四十 宇漏生の亭榭
- 第四十一 澳斯多利の麥酒店

- 第四十二 同國亭榭
- 第四十三 西班牙の亭榭
- 第四十四 葡萄牙の亭榭
- 第四十五 諾威の殿閣
- 第四十六 日耳曼の家屋
- 第四十七 瑞西の書堂
- 第四十八 魯西亞の厩
- 第四十九 同國の村舎
- 英吉利及東洋に在る屬部
- 第五十 皇子の宮殿
- 第五十一 蒸氣鐘の置場
- 第五十二 木造の燈明臺
- 第五十三 軍器

- 第五十四 越列機にて點火する燈明臺
 - 第五十五 各國集議所
 - 第五十六 宗門禮拜堂
 - 第五十七 墨是可の古器を聚めたる堂
 - 第五十八 亞米利加の亭榭
 - 東方諸部
 - 第五十九 亞弗利加チユニスの宮殿
 - 第六十 同國モロッコ帝の天幕
 - 第六十一 羅馬の寺院
 - 第六十二 蘇土地峽掘割の起し畫圖
 - 第六十三 支那の茶店及演戲
- 此の茶店及演戲とも佛人の目論見にて支那の形容を摸擬し同國婦人
周亞琴(十八歲)念亞彩(十六歲)外一人名未詳三個を置き酒を賣らせ其寫眞を

も霽がしむ演戲は其衣冠服色を摸して僅に其趣を備ふるのみ

第六十四 亞弗利加の厩

第六十五 埃及の納涼殿

第六十六 同國の尖塔

第六十七 同國の家屋

第六十八 都兒格の浴室

第六十九 埃及佛閣

第七十 他國より滯留の者宿所

第七十一 伊太里の陶器并花崗石

第七十二 日本の茶店

此の茶店は全體檜造にて六疊敷に土間を添へ便所もありて専ら清潔を旨とし土間にては茶を煎じ古味淋酒などを貯へ需に應じ之を供す庭中休憩の場所に牀机を設け傍ら活人形を並据て觀覽に備へ座敷に

はかね(名)みす(上)さと(上)といへる妙年の三女子閑雅に着坐して容觀を示す其衣服首飾の異なるのみならず東洋婦人の西洋に渡海せしは未曾有のことなれば西洋人の之を仔細に看んとせるもの椽先に立塞り目鏡もて熟視す其座敷は疊床なれば之に上ることを許さず故に其體に近づき逼るは得ざりしが間斷なく蟻附蝟集して後者は容易に見るを得ざるも少からずとぞ或良家の少婦母に伴はれ來て其衣服を借着し竟に之を買むと請しことありと云其物數寄なる驚くべし此の茶店の趣は後卷の新聞紙譯に委しければ爰に略しぬ

外部位置結構大略右の如く無税にて看するものあり又木戸錢を取るもあり其木戸錢凡半フランクより一フランク位までなり

博覽會場の木戸錢は一フランクなり多くは切手を買置見物す一週日又は二週日通し切手もあり價少く減するといふ外國公使及此の會に列する國々の貴族に附從する官員は皆無税なり開場より日毎の税の上り高

凡七萬フランク許宛收るといふ
 場外新に鐵軌を設け汽車市外に周匝し近傍村里の者往復の便を得せしめ河には數艘の汽船往來して看客の送迎に備へて斷る事なし場中排列する物品其價の幾千萬にして且貨幣にても得難き希代の珍寶等諸邦より運輸回漕して丘陵のごとくなれば防火の用心を嚴にし内部は火を禁じ地下は水を繞らし非常の備とす此の場中蒸氣機關噴泉等の爲め引注せる水の量凡十萬戸の都邑日用に足るべき程なりといへり
 此の會は物品の優劣工藝の精疎を比較考訂するのみならず學藝上の諸科も世界の公論と日新の智識とに由て古來よりの疑團を決し或は靈妙の新説を諮問する爲佛蘭西有名の學士藝人は勿論各國より來集せる其科の名家を聚めて裁判者鑒定人とし有象の種類より無象の原理に至り考證格物蘊奧を盡さざるなし其會集屢ありて植物動物及黃銅の鑒定の會集には我邦人も之に列せしものあり此の討論批評により博覽會褒賞

の甲乙も決定せるなり其裁判人員 佛蘭西は二百五十人 荷蘭は四人 白耳義は二十五人 字漏生日耳曼奧斯多利は三十人宛 瑞西同盟は十二人 西班牙は八人 葡萄牙希臘は四人宛 丁抹は三人 瑞典諾威は九人宛 魯西亞は十三人 伊太里は二十二人 羅馬は二人 都兒格は六人 亞細亞諸部は三人 亞弗利加諸部は二人 亞米利加は十六人 英吉利は八十五人なりといふ

此の會に同盟せる國々は アルゼリー 盧森堡 白耳義 荷蘭 字漏生 日耳曼諸邦 バ、リヤ 澳斯多利 瑞西 西班牙 葡萄牙 希臘 羅馬 丁抹 瑞典 諾威 伊太里 孟智世利 都兒格 埃及 支那 日本 暹羅 亞弗利加 チュニス 亞米利加 ブランシ 哇希 英吉利 英領各部 東西印度 佛領各部 安南 亞領カナダ等也

同十九日(西洋六月二十一日)晴無事
 同二十日(西洋六月二十二日)晴無事

同廿一日(西洋六月二十三日)曇朝八時佛人クレイ來る午後二時風船を又看る

同廿二日(西洋六月二十四日)曇無事

同廿三日(西洋六月二十五日)晴無事

同廿四日(西洋六月二十六日)晴午後一時フロリヘラルト嚮導にて巴里市街中の飲用水の溜を見るに陪す

此の用水溜は巴里北郊一里許にありて尤宏大なる造作なり水源は遠く巨河の委流より堰來りて水溜に湊合し器械を以て水勢を激し各個鐵製の巨甍に注ぎ地中を通じ市中各戸の飲用其他數種の噴水園池の用に供す○毎戸の飲用は都て細小なる眞銅の管にて管頭に捏子ありて之を旋らせば水自ら噴出す別に汲取運輸の勞なし噴水石泉の類も亦同じ蓋水溜の裏にて激噴せし水勢鐵甍を通じ更に幾個の細管に達す空氣の漏泄するなければ騰上の餘勢尙衰へず管頭に至り捏子の開くを俟て初て噴出の勢あり水溜の地位は頗る高敞にして上面は平地に等しく石或は漆

喰壘土にて地中に築造せり其形沼の如く但沼中許多の漆喰にて築立てる巨桶ありて水其中に入ると直に螺回して中心より注下す此の桶底の中央に孔ありて鐵甍に達するなり如斯もの幾許といふを知らず而して各個の鐵甍埋地道を縦横に條達し更に細小の鐵又は鉛管を接続して各所の用水に引く埋地洞に入て水甍及瓦甍を見れば細大長短縦横交叉して恰も人身の筋骨連環接続する如し其結構の壯大工作の精密なる驚感するに足る

同廿五日(西洋六月二十七日)晴朝六時瀛車にてコンヒイン井に有名の故城を看るに

陪し夜十時歸館

同廿六日(西洋六月二十八日)晴無事

卷之四

慶應三丁卯年五月廿七日(西洋千八百六十七年六月廿九日)晴無事

同廿九日(西洋六月三十日)午後ボワテブロンへ遊歩するに陪す此の日都兒格シユルタン巴里へ到着せり

同廿九日(西洋七月一日)晴午後一時よりバレイドランヂストリイにて博覽會褒賞あるに因て兼て國帝より招待ありて我公使も國帝并に各國帝王王子后妃等と同じく是を觀るカシヨン等も陪從せり

千八百六十七年第七月一日サレブリチエーのエンヂストリー宮において博覽會褒賞の配分あり宮中の大柱ある所にて劇場の棧敷の如く造作し二萬人餘の人を容れ易からしむ其中間に博覽會に出せる品物を十種と分ちたる中に就て重立たる者に標式を示せり○帝座は宮中の北邊にあり其左右にはこの禮式の爲に招請せる諸王子公主等の爲に設けたり帝座の前には諸執政官議政官其他貴官列立せりヂプロマチツクの諸官は帝座に對せる所に其棧敷を設けたり○第一時半頃博覽會に品物を出せる褒賞に預るべき人々は各その品の種類によりて區別せる地に座を

占め新定の特賞に預る人々は帝座に對して列せり○第一時四分三に國帝及陪從の官人次の如くチユイロリイ宮より出立し親衛槍隊の笛手同コロネル槍隊一エスカドロニーベトロン宛縱隊にて押たり王旗の槍隊其次ソナルテスアンペリアールブランセスマチルダの從官及ブランテナボレランブランセスユロチルダの從士六馬に駕せる第一の車には王妃に從へる宮女兩人宮殿の奉行王妃の側役同第二車には宮の侍女兩人國帝の第一等側役同側役同第三車には中宮の侍女一人親衛都指揮使マルシヤル太子の傅中宮附屬アシユダントゼテラール同第四車陸軍總督側役の頭狩人の頭禮式長官同五車フラセスロチタルダ同マルチルダ其右側にフランスナボレオンの馬役左側に槍隊のカピタイン前に六人の槍士是に從へり第六車は八馬に駕して國帝后妃太子及フランスナボレオン其側に馬役の頭帝家の第一等馬役百人組の頭砲兵の士官帝家の馬役左側には帝家のエートデカン中宮の第一等馬役太子のエートデカ

砲兵の士官太子の馬役帝家の百人組二隊親衛騎兵一エスカドロ
ンペロトン宛縦隊にて之に従へり右の同勢時計門よりチユイロ
リイの庭前コンコルドの廣小路サンゼリゼー通よりアンヂス
トリ宮に入れり
○ガルドナシヨナル及ガルドアンペリアルといへる兵隊
兩側に列して警衛嚴を極めたり○博覽會亞總裁ミニ
ストルデタ始諸掛り役是を接し招待されたる公子公女其
外は已に各其座に就て在り帝其座に就んとする時諸人皆
山呼して其壽を祝し千二百人の樂工帝德を頌せる樂を奏
せり帝二時半に座に就きたり右にある者はオットマン帝
シユルタンアブシユルアチユスカン殿下英國太子荷國太子
サクセンの太子法國太子魯國の公主意大利第二王子英
國第二王子ブランセスマチルダブランストテツキ后妃の
左には學國太子サクセン太子の妃意大利太子都兒格太子
メヘメットムーラツトエフ、アンヂー、ブランセスコロ
チルド意大利第二王子の妃チユクドリフタンベルリ、
ブランセスナボレオン、ブランセヘル

マントサクセン、都兒格の第二王子アブシユルアミット、
國帝后妃の後は都兒格シユルタンの子ユースフイセチ
ンエフ、アンヂ、ソナルテスアンペリアルシヤンミラ、
アンペリアル、ブランストクガワ、ソナルテスアンペ
リアルシヤンミラ、ブランセスマンミラ及び妃同
ブランセス、エーミラ、同ブランセスナボレオン、
ホナバルテ、ブランセスマシルミラ亦其後に帝家の
貴官宮殿のアヂュダントセネラール帝家のエー
トデガン帝家の士官及其夫人シユルタン附の士官
外國の公子公主に附たる士官なり○帝家の博覽會
副總裁ソネエキセランスモツシユルルエ次申狀を
讀上げたり曰今日の禮式に付帝側に侍し給ふ太子
の總裁し給ふべき職掌は陛下よりの委任を受け
其事務を取行ふための趣意を聊此に説明し又其爲
に諸人の勉強せしこと並に此の會の模様及成功を
上陳せんとす其事に付ては是まで種々の故障も少
からず先シヤムデマールの地に建物築立十五ヘク
タメートル(ヘクタメートルは百メートルにて凡我三十三丈なり
リ十五ヘクタメートルは即八百二十五間にあたる)

大厦を造築し展陳せる産物種々を區別するに衆多の物産及國民等の爲め各其所志を満足せしむべし然るに其間僅に數月間のみなり此の度の博覽會はこれを以前の物に比すれば廣大なる設なるは言語を用ひず纔に計數の字を擧れば了解あるなるべし○千八百五十五年の會には建物園囿を華美にして十五ヘクタメートルなりし同六十二年には十二ヘクタメートル半今茲六十七年には并て四十ヘクタメートル餘にしてその三分一は建物たり○千八百五十五年の會に品物を出せし人數は二萬二千人六十二年には二萬八千人今茲は六萬人に及ぶ且産物の量は二萬八千噸に(噸は二百七十一貫目強)下らず如斯衆多の品物を速妙にこれを陳羅するを得しは他なし此の會の爲に歐洲大地に蒸氣車鐵軌を新營し其交際を便利にせしによれり○器械を運動するが爲に設くる所の汽力は千馬力に及び如此大業を僅の日月の中に爲すに幸にして其功を奏せり就ては此の國の爲には衆人の譽を博しまた國帝の褒賞に預るべしとす○世人博覽

會に付ては萬國の品物を比較し學術を進歩の輔けとすること驚くべし○已前の會には圖書及工作農畊具等を區別せしかども此の度は却て是を一所に陳列せり此の益其術を見るに足れり博覽會の建物其事に適當せる様に製造し各國の産物一覽の下に瞭然と其種品を區別し且周圍の間地を以て器械を列する場とし而も重大の力ある器械各其力を逞うして互に妨碍することなく危害を生ずることなき様にこれを經營し且是を覽るが爲に小高き所を作り衆人逼りてこれを見るときも危きことなきは其功を建築家に歸せざるを得ず○此の國人及外國人の手細工物とを見るに其工人と器械と並馳して物を造り出すことを看る又天産物を見るに各國の政府又は各人の數寄にて取聚めたるものにて其富を見るに足る又園囿に遊ぶ時は各國の俗習これを掌下に見るべし中庭にはセーヌ河水を引て噴水の觀を設けヒランクールの博覽會を見れば此の國にある耕作の具を見るべし陛下今茲に成功を擧るともこれを謙辭を用ゆ

ることを能し給ふまじ乍然帝家掛り役々其外輔佐のものありとも其輩のみの力にてはかくまでには至るまじ故に臣等勤る所は但その第二等に位するのみ其上等は他人にあり今爰に其謝辭を陳せんとす外國の委任を受たる人々各其國に秀拔なる人々にていまだ各其國の爲に力を盡し其國の工作其眞を失はずして此の會に列せしは是皆その人々の力に依れりしかしてかゝる可驚盛舉に及るは又六萬人の工人預りて其功を共にせり然れども右様其力を競ふ内に就て又其最者を選ばざるを得ず右は此の會掛りの者は多務なるにより是をジュリアントルナシヨナール(萬國の際に居て廣く公監を務むる者を云)に委任せり是は各國の物産貿易等に明らかなる人の會社なり其人等は各其國を思ふ心なきにあらずといへども事皆正理に基き私の依怙を以て其務をなさす其心をもて各國の其先を競ふ意を押へ其煩を計らす功を奏するに至りしこと今日是を陛下前に謹白す其褒賞を頒てる數即ち左の次第を以てせり

カランプリー(六形の金のメダイル) 六十四

金メタイル 八百八十三

銀メタイル 三千五百五十三

紫銅 六千五百六十五

褒詞 五千八百〇一

かゝる多數の褒賞ありといへども尙其賞すべきを遺すもの多かるべし此の度新に建たる公監應にても又前同様に其力を用ひたり此の應にては其品物を吟味するのみならず其家中の制度まで吟味せしことなれば事更に鄭重なりとす此の應にて頒與せしものは

ブリー 十二

褒詞 二十

シターション 四

陛下その中の秀拔なるものに語詞あることを許せしにより掛り一同其

謝詞を述べ又萬國の博覽會成功につきて各國の景況を爰に略説す此の度の博覽會は現今の人にて頌賛せられ且後世までも稱美せらるべきは世界萬國の物産具備せざるなき故を以てなり歐洲各國のみならず亞米利加亞弗利加極東の國々まで其列に入り亞米利加合衆國は六十二年の會には内亂ありて物産を出すを得ず

六十七年の會には實際上切要の國なれば今其爲に十分地を卜めたり亞米利加の大地及南亞米利加の國々も各其掛りの人々によりて銘々の國光を輝せり

オットマン帝國都兒格及亞弗利加の西北にある回々教國はその品物を送りしのみならずシヤムデマールの真中に於て家屋の製と往古の姿とを示すべき家室等を造立し大に我輩の眼目を開けり如斯きは皆其君主自ら勉精して此の博覽會の輔佐をなせし力に頼れり極東の國是まで我輩の萬國博覽に關係する事なかりしも今度は其地に差遣はせし公使商

人教師學士等の力にて皆其列に加はれるに至れり

巴社支那及日本國及其附屬の國々とも皆我輩の化によれり

斯衆國民の好意を以て此の一場中各其功を競ふことは數年來開化の進歩をます年表と見做すべし今度新たに第十種の一類を立齊家使工の道を吟味せしは心學の進歩と見るべし大人童子の學問其他製家の法等に至りて人心に益あること少からず是以前の博覽會になき所にして此の度新たに建る所なり右に就て褒賞を得るものは同じ工を共にするもの其商社及政府等の世話行届けるを賞せるものなり故に今茲の博覽會に於ては新たに發明せるものゝ勵みなり力を戮する時は大業をもなすべき理を示し貿易の自在をあらはし各國人民の經濟の道を示し量尺貨幣等一致せば各國の都合となるべき筋を了解せしめ且又各國の間に相忌相惡の念を消し相敬し相愛するの意を生せしめ爰に來觀するもの此の國革命の際大亂ありしことをば打忘れて即今太平の樂化盛に風俗美な

るを驚くなるべし各國君主皇族みな此の會に來りてその樂を共にせるより後來は干戈の虞なく世界太平に歸すべきの一徴を示せり
都てかくの如きもの皆陛下宇内の史中一葉を添ふべく將千八百年代の盛典なるべし

右の申狀を讀て後國帝左の言葉を述べたり

諸君此の舉は十二年前より已來竟に再び國を富まし人生の和人心を開きし人々の爲に褒賞を頒つことに及べり古希臘の時競馬の舉を以て極盛の事の如く昔時詩人の是を聲詩に播て後世に傳ふるもの多かりしに今度の舉は全世界の人々各その智巧を競ふこと開化の極致にはよしや至るあたはざるも抑其階梯となるに由なしとはいふべからず當時詩人は是を觀ば夫れ是を何とかいはん大地球上各部より凡百技藝智巧機具をあらはす爲め競て此の國に聚會し各君主にも亦各その助力を爲さんが爲め爰に來臨あり故に此の舉は形而下のことゝ見るものあるべしとい

へども其實は形而上の理に關りて人心の一致和平を輔け四海一家共に太平の樂を饗くべき一端をなすものといふべし萬國の民人各こゝに聚會せるより互に相尊崇することをしり互に相怨怒することを忘れ己の國の富盛は即他國の富盛を助くる所謂百事の道理を辨へ全地球上凡有の物華天寶盡くこゝに聚觀することなれば今茲千八百六十七年の博覽會は實にこれをユニウエルセル(全世界に行れ)といふて不可なかるべし

新發明の物の側に極古代の品も羅列し華奢一流の物品あれば又實際第一の器械あり人間凡百の智巧自から明白なるべし
工作の利用において今度ほど心を用ひたることなし即工人の教養厚生及并力同工の趣意ありては殊に意を注げる事なり
是を以て凡有の開化皆その首を齊ふして進む勢あり學藝日に新たなれば萬物盡く是が役となりて人智從て自在を得べし人心日に開け鄙吝の

念漸々消て人情益厚くなり得べし諸君歐洲各國其他の君主皆我爲に此の國に來問ありしこと我が榮を爲すに足るを祝せられんことを望む且此の國の盛大文明百事を諸人に示せしも亦諸君の爲に誇るに足るなるべし

如此して猶古の國の盛大を不見此の國の開化を鄙しむものあらば是却て各己か國を愛する念なきものといふべし此の國は近頃までは國內も穩ならず或は外境までも侵擾することありしが今は既に太平富饒にして却て他國の開化を誘め同じく文明の域にいたらしめむと其ため國人の驚くべきほどに心を用ゆることは他の國人もこれを許す所なり己が本國の爲にその面目を存することに心を用ゆるとも是皆己を利し人を害するの道にあらずといふことは聊事理を解するものは知る所なるべし故に此の國に暫時にても在留せる外國人は此の國人の他國人の爲に愛恕の念深く尊敬の意厚きことは了解し得べし朕今掛り役鑒定の人々

に對し各その所職を盡し勉力ありしことを爰に謝すべし且年いまだ幼冲なるを以てせずして幸に此の盛舉に預れる我少年の爲并せてこゝに謝詞を述ぶ千八百六十七年の博覽會は萬民開化の階梯たること朕尤期する所にして皇天幸に其運を輔け寶祚を永久に保持し國人を安寧にし人心慈愛の源を開き道心正理の捷を報するに至ること朕敢て是に任せ

國帝この詞を伸ぶるの間は衆人稱美するが爲め往々その詞中斷せしかば人々亦これを聞んとて立上るものあり掛の副頭領ソンエキセランスモツシユールホルカード次の順席に依りて褒賞を受る人々を呼出せり(中略)ガラントブリーを得るもの其第一にありレシオントノール中の最たるものシバリエーのもの其次に立たり各種に分てる人々各その頭領に導かれて帝座邊に進みガラントブリー及尋常及最上の等にあるもの各その賞牌を得るために帝前に上り行きけり

其賞牌は副頭領ソンエキセランスマレシアールウユルランより兼て帝に呈したる者なり

其他の賞牌は各部の頭領より是を頒つべき旨帝より命せられて後は新建の公監所にて與ふるものなりき○佛國人の家室建築の事につき國帝に獻すべき賞牌は恰も皇子の手を経て是を領掌あられし其事了りて後國帝后妃及シユルタン各國公子一同其國の部分を探覽せる時博覽會總裁モツシユルブレーミニストルデクによりて其名を披露せり其間樂工の頌歌と衆人の祝詞相響應してどよみ夥しかりし

此の禮三時四十分を以て了りシユルタン去て後國帝も退去あり其去に臨みて一應掛りの者へよろしく沙汰あるべき様ミニストルデクに命せられたり

右の如く各國帝王列班嚴肅にして天下の品物珍奇善美を盡し役々鑒定批評公然と優劣を決判し順次を以て褒賞を行ふ異同甲乙ある右の如し其内

我邦の褒賞部分各々差ありといへども是を略せり

六月朔日(西洋七月二日)晴朝八時シベリヨソン來り商人とも茶店の事によりて談話せり

同二日(西洋七月三日)晴午後また博覽會を觀るに陪す博覽會褒賞本邦ヘグランプリの功牌を鑒定役書記官シヤングルドアシベリヨソソ同道にて來りさし出せり

同三日(西洋七月四日)小雨無事

同四日(西洋七月五日)曇無事

同五日(西洋七月六日)晴夕五時町會所にて都兒格帝のため舞踏を催せしが墨是可帝殺害に遭ひしと聞て佛帝遠慮あれば舞踏やみぬ都乙人ライソソントル交易學政事學をもて自薦書を出せり佛人の僧某の姉妹にて日本の事を著述せる書を差出せり

同六日(西洋七月七日)晴無事

同七日(西洋七月八日)晴荷蘭學生等歸國せるにより來り見ゆ佛帝の側役バロンク
ルテ旅行すとて來見ゆ

同八日(西洋七月九日)晴博覽會コンシユルセネラールプレイモンブランの事によ
りて往復の書簡の寫を添て其書簡を出せり

同九日(西洋七月十日)晴無事

同十日(西洋七月十一日)晴午前十一時より川舟にてセイヌ川を逆り巴里郊外に遊
ぶに陪す舟のゆく十三里程下りて岸につき一村落到に抵りしばらく憩て汽
車にて暮七時頃歸る

同十一日(西洋七月十二日)小雨佛國ミヌストルより博覽會の謝書を呈せり荷蘭公
使館附書記官より書冊を呈せり

同十二日(西洋七月十三日)曇無事

同十三日(西洋七月十四日)曇朝七時土人醫師シロウドウの別業を看るに陪す

同十四日(西洋七月十五日)晴無事

同十五日(西洋七月十六日)曇便船に因りて各本邦へ寄書す

同十六日(西洋七月十七日)曇銃砲を試るに陪す

同十七日(西洋七月十八日)曇午後一時フロリヘラルト來る此の日博覽會につきた
る新聞を得たり

第七月十七日

博覽會中亞細亞弗利加諸國の部を巡行せば竟に誇詡の私意を生せざ
る能はずかゝる遠距の國々まで此の會に列することはこの國の聲譽な
るべし全亞細亞中において最全備し最華盛なる産物は無論これを日本
に歸す其産物を取聚めて又是を法國に送りし其品物は小箱鏡のつきた
る銀象牙細工の小家具青銅器磁器玻璃器日本にありては殊に稀少にし
て貴人の外は所持し得ざる卵殻と唱ふる磁器銅又は木材に鞘を製し極
鍛練せる刃を藏するもの天然水晶にて細工せる玉日本婦人の美麗を想
像すべき様に製せる像其他すべて歐羅巴洲好事家を眩惑すべき諸玩物

家具とすべき蒔繪漆器是木造の器に恰も彫刻せる如く高低を分ちて畫けるものにて眞に價ある物なり其漆は漆の木といへる樹液にて三歳程の樹に刀を以て刻劃し其液エラスチツリゴム木の如く流れ出せるを取りて作り出せるものにして顔料(具畫)を雜へ各種の色を出し是を銅板上に練りて金銀なども取交へ畫くなり○日本人の最愛するもの長壽のもの見えたり即鶴龜松の樹なり又意匠をもて畫き出せる虚形の動物を愛せり譬ば龜の尾に濃毛を生しめ龍頭馬形にして鹿足有怪獸などはなり其國中に名ある富士と帆懸船と魚の水中に潑測せる様など其最好みて描く所なり○又烟管の奇製あるも爰に述べざるを得ず其管は極て怪むべき形を彫鏤せる木または牙にて製せるものにて是を飾り此の物は日本に在りては男子の佩具中最缺くべからざるものたり蓋絹製の紐を以て是を衣服の扣鈕に附てこれを佩ぶ其管は蘆管にして其雁首は小青銅を用ふ僅に火を保つに足る故に是を吸ふには指頭を以て烟絲豆大

に捏してこれを管頭に盛るゆゑに唯一吹にして熄す是を以て日本の烟客は往々日に百管を吸ふものあり烟草は黄色にして都兒格の産のものに似たり是を刻むこと細糸の如く其香人をして悦しむべし其上品は薩摩及長崎に産せり

同十八日(西洋七月十九日)雨公使より教師の事を國帝に頼み遣されしより國帝陸

軍ミニストルへ命じ陸軍士官の内を撰み教師として傳せんとて其次第を言ひ越されたり

同十九日(西洋七月二十日)曇本邦曲藝松井源水等來り此の都にて伎藝をなせり催

主英國カビティンより招待によりて夜之を看るに陪せり

同廿日(西洋七月二十一日)晴無事

同廿一日(西洋七月二十二日)晴朝十時より又博覽會を看るに陪し本邦商人の出せし

茶店へ休憩す此の日ヒガロ新聞を得たり

第七月二十二日

日本の手品遣ひの一組今度テヤトルヂユフランスアムペリヤルに出張せるに其評判は現今米利堅にある一組の最有名なるより従て其名を得たるものなるべし然れども源水の族の獨樂の藝に於ては驚くべき力なしとはいふべからず又魔法を以て蝶を使用する有名なるアサキチも稱すべしとす又龜吉小瀧タラキチも又頗る感すべし今謂らく渠輩の場に上るは大君の軍を御すると同じく兵を練る士官は餘りに多辯なるを好まず我輩議事官に在るにあらざればなり又用意遅緩にして人に不快を抱かしむることなくば一箇のよき見物なるべし又獨樂を廻す坐低き所にありて衆人僅にこれを見るを得又は見る能ざる程なれば是を一害とす○法國人は物に堪ゆることなく又外國人を敬することなき性質なれば其伎を譽むるものなきにあらざれども亦これ辱しめて閉口せしむるに過れり男子婦人小兒輩の一組一列に羅坐して前面にある其國の人に向ひ禮をなせり其時アサキチの口上は衆人に對せるにや又神明を

祝せるにや我輩固より其語を解せず且縦ひ是を學ぶとも深く其曲折を盡す能はざるべし○手品の仕方はいかにも奇麗なりしが其爲す所衆人の目に觸るゝ様なり是更に狭き座敷に於て是を旋すに適すべし○アサキチ盃中に水を盛り是を倒し其下に敷ける白紙の中より書たる紙を引出せし業は工なりといへども是を見るもの少かりし○紙の紐二重箱の伎は未熟といふべし衆人側にある撒きちらし紙に屬目せる間に傘中に於て虎の形に變じ其態を學びしは小兒を怖すには事足るべし○獨樂の伎は人の意量の外に出づ空中に擲ちこれを竹竿の頭に受取り直上の繩扇の紙の縁及刃の上に渡らしむる事且村舎の景色即橋梁道途社寺等に獨樂の歴訪する様をなすなど頗る新奇にして驚くべしといへども口上もなく音楽もなく且駿速にこれをなすべし爾時其村舎に招待ありて獨樂中途に駐りたりしは日本人のソルフエリー(意大利東國と戰争ありし地名)といふも可なり○輕業の方は極て人を恐れしむ一人足を以て舞臺に倒懸し手を以

て一の兩長竿を附たる三角形の物を持ちたり他の日本人手或は足を以て其竿に容易に身を置き又其竿をすべりて止り木に止りたり其間凡二十分時程は半愛半怕の態をなしてこれを見せたり法人もし此の如き伎をなさば人皆あんにてこれを見ざるべしされども日本人なれば十分に是を恐れざるなり我背後に在て見物せし小兒其母に問ふて渠もし落るとあらばといひしかば只毀損すべしと答へたり是日本人を磁器漆器と同視せるなるべし

曲馬又は紙圈を蹴脱し(紙圈を蹴脱するは曲馬中の一伎なり)又は種々の戯劇などありて衆人の心浮立たる後にかゝる靜なる藝をなすは其折宜しからず是を半場になす方人意に適すべし

同廿二日(西洋七月二十三日)曇午後一時公使帝宮へゆく折節葡萄呀王妃に面會せり(何れも禮服を着す)此の日カリナニ新聞を得たり

第七月二十三日日本の向化

日本人の心術行事に就て東洋にありて一議論起れり先年初て日本と貿易を開し頃外國人の日本風俗を論ずるもの、説には日本人は平生心術所行といふものなく只淫樂に耽るを事とするのみなりとせり其譯は彼國茶肆の模様を以て考證せり

先年シルルーセルホールトアルコック日本の内部を旅行せし時茶肆の制宜しからざるを見て其流弊を恐れ茶肆の外は好旅舎のなかりしもこれに泊するを嫌ひ別に旅宿を設けらるゝことを請たりといへり又支那上海にある會て寧波の教士として現に東印度電信社の佐たる米人ドクトルマクゴワン前の説を主張して亞細亞學會の坐に於て日本人の懶惰淫逸にして汚俗なるを以て其性情も日に下り其人口も年に減すべきよしを述たり然るに近來其說蔓延して竟に上海に刊行せる支那文の新聞紙に載たるを以て漢字を解する日本人支那古文字にて其駁詞を書せり

俠勇の氣を具へたる日本兒其挾む所の長刀にかへて筆を以て議論することを始ふことは最好む所なりといへども其筆を用るとも其殺伐の氣味あることを含めるは又驚くべしとす其ドクトルマクゴウアンに反せる説に云日本の形勢を悉さず妄りに如斯説をなす若其人日本にあらば日本の少年勇壯の輩皆兵器を携へて是を撃んと計るべしといへり然るに雙方とも仔細に其理を説に及ばざりしは遺憾なりマクゴウアンの説は國內の人口歐洲人の考る所の其實は浮たり其實は僅千六百萬に過ず古は頗る多かりしが今は稍減少せんとす其故は其俗の淫縱なるによるといへることを述たるのみなり是に反して日本人の自ら述る所にては千六百萬はさて置五千萬に幾く其他殖する所計るべからずとドクトルマルゴウアンの説も全く僞にあるまじと雖ども日本の男子は身體強壯にして能其事を勤め其婦女は病なく血氣美なりとの事は凡其地に選するもの皆説く所なりドクトルマクゴウアンの説は全く是に反せり近來

日本人西洋の發明を假用ゆることに於て力を盡し其知能事實に見るゝを見るに既に千八百五十九年港を開けるより以來日本政府及大名等に買來せし歐洲風の船八十艘蒸氣船其數多あり且其蒸氣船上には士官水夫とも全く日本人のみにして能く之を使用せり或諸侯のみにも軍務貿易の爲め十七艘の蒸氣船を買入たり政府にては今現に買入たるのみにては未だ足らずとし更に歐洲及米利堅へモニトル及裝鐵船の數多を誂たり今まで買入たる船の價墨是可トルラル七百五十萬餘即大凡百二十萬ポントステルリング計を費したり是に因てこれを觀れば日本は近く衰弱すべき人種には非ず曾て航海を好める時は支那及無來由の海岸加之遠く印度海太平洋を越す米利堅の西岸までも達せし古俗に復し再び盛んなるべきを徵せり又日本人長崎に於て其蒸氣船を修復すべき爲め大費を厭はず工作場を築造せり

同廿三日(西洋七月二十四日)雨無事

同廿四日(西洋七月二十五日)曇無事

同廿五日(西洋七月二十六日)雨試砲あり

同廿六日(西洋七月二十七日)霽無事

同廿七日(西洋七月二十八日)晴英人附添て本邦藝人等來る

同廿八日(西洋七月二十九日)晴國帝の選舉にて公使留學中の傳役たるコロネルウヒ

レット初て來る

同廿九日(西洋七月三十日)晴本邦足藝演錠定吉米利堅國より當都へ來り伎藝を催

せり座元ヘンクスといふものより招待によりてこれを看に陪す

七月朔日(西洋七月三十一日)晴無事

同二日(西洋八月一日)晴今日より傳者コロネル來り相語る夕四時同人并フロリヘラルトクレー、ジュレーカシオンウエルベ等へ夜饌を具す此の日ヒガロ新聞を得たり

第七月三十一日

昨夜シルクナボレオンに於て伎を呈せし新來の日本曲藝者の一組は疑もなく政府御用を勤る者なりアメリカンにある曲伎者は曾て寵を蒙り今は既に黜けられたるもの新來のものに抗抵せんとするが如し
新來の一組は先に來れる者よりは更に巧に且身體の自由なること殊に優れり此の曲藝師の日本政府の御用を勤るその證は當時巴里に在留する公使見物の席にて吝惜の色なく二千五百フランクの金を賜りしにて明らかなりといふべし

リユリボウといへる國帝其執政を選むに長き棒を建て人をしてこれに攀らしめたりとの古き説ありもし其人をして昨夜此のシルクにあらしめば直に此の經世學者(曲伎者)を擧て是を執政の長となすべし併リユリボウ國にてかくまで是を登庸することも只其伎藝の巧みなると平準を能くすると物に怖るゝことなき徳を稱するのみにていまだ足すとす其職を盡すに泰然たる様も最稱すべきなるべし我輩即歐洲の曲伎者は其

伎藝を務るため金銀などにて装ふ事多し然るに日本人は只汽車轍路の番人の如き衣服を着したれども有名のレオタルトが國政を議する時よりも更に淵穆沈重の姿あり○其伎を呈する前に脊髓の地に傾くことバ
ルベフリウのボベスリ國をして心酔せしむるに足る○其なす處シルク
アメリカンにあるに同じといへどもその所爲更に多し我輩をして議院
にあるが如き想をなさしむることすくなし蓋我輩解し得ずといへども
噴々の語看者に厭惡を生せしむることなく全く其伎をなすものを勵ま
しむるまでに用ふるものなり此の戲場に在りては兒童輩尤その上乘た
り就中オーライトといへる小兒最も勝れたり其容貌頗る美麗愛すべく
其身を獨樂のごとくに廻し素足にて撓める竹にからみたり足を以て盥
を廻らすことこはれ階子又獨樂の旅行オーライトの肩の上にとまる業
など最新奇の伎なり且一つの仕ぞこなひもなく衆人いたく是を稱せり
故に其公使より賜ふ所も衆人感稱する處の意に比すればいまだ十分と

はいひがたし此の度の博覽會によりて諸國帝王も來會し平和の會議樂
工の合奏製樂者の會論ある上は世界五洲より曲伎者の會聚することな
き理なし此の度の曲戲によりては只娛樂のみならず體術を以て交際の
道に喩へ平準の方は國民經濟の上に用ひ獨樂を使ふ爲めに長刀を抜く
機合辯口の流るゝが如き議政官の様なるなど是開化の進歩を翼る姿あ
りといふべし

同三日(西洋八月二日)晴朝カシオン來て其著述の書を戲す

同四日(西洋八月三日)曇朝八時瑞西ミニストルレイ來る此の日新聞を得たり

千八百六十七年第八月二日雜報

日本戲場

殆んど一月前二君子ありて我家に來り其名刺と一幅の紙とを出せり我
その幅を開看せしに藍色にして中に一男子の兩足を天に朝せしめたる
姿を書きその一足の上には驚くべき高竹を豎て其竿頭に黄色の豹に類

せるものある形なり我其來賓に其圖の意を問しに兩君子の一モツシユルウエランといふ人法語を以て只英語解するモツシユールマガールを引合せたり其人は則巴里に來りて日本の曲伎を奏する人の世話人たるよしを自から述其曲伎者は必其功を成すべき見込みを以て一宵千フランクの價を以てシルクテナポレオンの座を借切たり尤その曲伎者八日の内に到着すべし但今日は一日の謬誤を正さんことを望むために來れりといへり我因て其正すべき條を問ひしに此の雜報中に新約基の新報に據て日本の曲伎者の隨一なるもの趾を怪我せし由を載られたり其事は大に實を失へり尤其伎を爲す小童高處より落たることあれども今は其痛む所既に愈て其伎を奏するに妨なしといへり爾時其持越したる黄藍一色の引札をも見たりしにいかにも珍らしく覺たれば即時其詞に隨て雜報を改正せり○諸新報家日本曲伎者の來るべきを述べ又諸方の壁上に引札を張たる折柄日本の第二の曲伎者其名を盗んでシルクシユブ

ランスアンベリアルに出たり然るに竟にマキ、ルウエランの世話にて黄色の人を載たる船海神の助けを以て此の地に來着するに及べり○火曜日にシルクテナポレオンもシルクシユブランスアンベリアルと同じく燈を點じ看者をして兩曲伎者優劣を定むることを得るに至れり○月曜日の朝此のマキールウエラン兩君より新名刺及青色の紙上に人形を繪きたる引札を受取りたり此の兩君より其夕の招待を受たり其家に至り入口より廊下を過て明るき場所に至りて自在に椅子を擇むことを得たり是に於て日本人の一组舞臺へ出て手をつき頭を垂て衆人に向ひ一禮をなせり其人々は皆此の頂上を剃り其髪を巧に疊み上げ頂上に墨を以て畫けるが如くに横へたり髪色青黒顔色黄にして眼中は安祥且聰明なる相を顯はせり鳶色にて繡ある羽織を以て身の上部を掩ひ衣服は濶き袖あるものを着せり一禮畢て衆人立上りたる時頭取とおぼしきもの短き口上を述べたれども一語も解することを得ざりき爾時兩小童に指示して其

身を輪轉せしめ他の日本人拍子木を打たりこれは其戲の勤めをなさむる者なり樂工はいつも舞馬を娛しむる爲の調子にて是を勤めたり此の伎の内三戯尤も驚くに堪たり第一は父の名を濱碇サダキチといへる子息は三キチといへるもの此の内の選なり此のサダキチの肩の上に十五フート凡一丈五尺の長さある直竹竿を豎るに半ミニュト間にして其長竿平準を得たるを待て三キチ直に其上に登る其頂上に至る時は竹竿曲繞して既に看者をして殆落んとするものと疑はしむる程なるに其下にある父其肩を上下して其平準を保ち竹竿再び其平を得るに至る其童子得意の聲を發しながら或は足のみにて其身を保ち又手のみにても保てり又風身の如くに身を廻轉せり第二は定吉臥褥上に仰臥し其兩足を天に向け其足上に大階子を安置し三キチ又其上に攀ち十分の高さに至り彼扇をあふき居る時下にあるもの階子の片方の螺旋をはづして是を去るに彼猶その一端の頂上にありて舊に依りて扇を使ひ居たり第三は其

父は毎に仰臥して足上に一の大桶を置き小童其上に登る其仕方人智外に出ていかにも安祥鎮重なるがゆゑに傾轉の患なく猶又許多の小桶をも重ね得るなり最後に小童桶にて製せるピラント上に在るとき其父その片足を引て動搖せしむるとき恰も傾崩すべき想なれども小童自若として佛の如き體にて扇を使ひ居れり其舉止いかにも寧靜閑雅にして餘地あり他の人々は盡く舞臺の上において彼小童の聲を發する毎に是に應ふサダキチは扇を使ひ世話人は拍子木を打見ること人目を駭かし此の一區の曲伎場にありて數千里外に遊ぶ想を起さしめ金飾ある衣服を着し玉椅に坐し給ふ大君も爰に臨み給へる也と探望する情を發するに足る隅田川松五郎すこし長過る名なれども是又日本中の驚くべき一人物たり此の者は天井より竹竿をつるし宛も舞臺の中間にあり隅田川その竿の端にあり一人其端を把り其竿に上りて其身を平準に保ち急に手を放して其竿を滑下す其速なることは驚くべき程にして若地に墜る

ことあらば其頭顱は打毀すべき位なるに忽ち巧みに其下端に至りて止まり數々其身を上下せり

以上の曲技皆看者に思胎を懐かしめし跡に繼て獨樂まはしの松井菊次郎一笑口を開くべき伎を呈せり此の者妙に一小獨樂の繩をまき附け其身を轉するはづみに獨樂を空中に擲ちまた手に戻し腕より肩につたはしめ脇腹より足に及びまた再びもとの道に戻ることに皆其身を轉振して其獨樂の游行することを得せしむるものなり又渠その獨樂を竿端に廻らしめ又刀及上を傳はしめなどす其終りに獨樂激してとゞまらず日本人皆樂屋に入るといへども猶自ら舞臺上にまはり居たり

右様都ての伎を見る内拍子木の合圖何を爲すためなりや知得ざれば其事を問ふ爲め舞臺の後口にいたりウエラン君に尋ねたりしに知らざるよしにてマキール君を呼び英語をもて是を問ひしに答ふるにサタキチに問ふべしと云つゝ日本人の座敷に聚居せる處にいたり空中に指示し

種々の手眞似にて我新聞紙を記せるものなることを示したりしにサダキチ我傍に來りて手を振りてフランスとの一語をいひ出せり又圓月の如き顔色なる小童禮をなし及兩婦人は咲を含みて立て禮し其他の人々も皆種々の仕方にて一禮を伸たり

シルクナボレランにある曲技者は重立たるものなるよし其ものは格別に身を傾けて禮を爲さずそれに次く者は多く身を傾け其下に至りては盡く身を俯したり封建の制度ある日本の國俗はシルクの物にありとも其身分の位階を守ると見えたり

中入りの節日本人食を喫する折なれば幸ひにこれをも觀たりしに飯臺の上に小菓子及乾饅頭を盛たる大皿あり日本の女子男子打交りて是を食するに頗遽にせず時々水を飲み又乾饅頭を食ふさま其伎備を旋すがごとく優游餘地あり其眼光黒くして安祥伶俐の相あれども我輩よりは是を美なりとは云がたし是其身體短小且其手と同じく用をなす足の形頗

る宜しからず唇翻りて面の逼乎なること人種に固有なる倭僧刻薄の相をあらはす故なりやがて日本人とも菓子喫するが爲に又我輩を顧みざるによりて我輩却て其傍に安座して詳に是を見るを得たり其短小の身材廣濶の衣袖褐色の頭顱眞に我輩をして巴里にありて數千里外に身を置くの想をなせしむ冬時はシベリヤのごとく寒く又夏時はセチガルの如く暑き一稀有の國土のことにおいて今爰に一夢想をなす

爾時マキール君の爲に提撕せられて曰く彼世話人の敲く拍子木は人に注意せしむる爲の用をなすものにて衆看者の爲に敲くとのよしにて其響は此の次に出せるものは先のものより更に勝れたれば殊に注目せよとの意を表する也といへる折柄恰も其響を聞しかば我隅田川松五郎と松井菊次郎に幾千歳の繁昌を祝する詞を述てもとの棧敷に戻りき

トンチールピヨン

日本の家屋

現今日本の家屋は博覽會中珍物の隨一たり此の家はバルク(圖)の内にて支那地所に隣りたり初め日本よりは組立ずに持越し此の地にて結構せり總て日本の家屋皆かくの如しといふにはあらざれども小商人の住家及茶肆の雛形を示せるものなり其茶肆といへるものは往來の傍において過客の爲め煮たる魚肉に米飯を雜へたるもの及日本にて尤貴ぶ所の米より製作せる酒等を饗するものなり種々に彩色せる紙の提灯を檐に透らし小池などの傍に蜿蜒せり其周圍は松の薄板を竹に取付て頗る高き屏障となせり格別堅牢ならざる故に盜賊を防ぐに用をなさず只人の見透くことを防ぐのみなるべし入口の門を入れて尤人目を驚かさすべきものは四本柱につるされたる釣鐘なり且繩をもて一の木棍長さ一メートル半周徑十五乃至二十センチメートルもあるべきものを水準につるしこれを鐘に撞あて、響を發せしむるものなり日本の家屋は總て木を以て造れるにより火災數々起れるものから如此の釣鐘は何れの場所にも

是を設け置火災起れる時はこれをしらすものなるよし也家屋も圍塀と同じく盡く木を以て製造せり松の薄板を竹に取付け上は藁をもて葺たり家は兩區に分ち中に廊を設け入口の方は飯臺を設けて茶酒を客に供する爲にす奥の方には三少婦人のおすみおかねおさといへるものあり或は獨樂のごときものを弄び又は其國體に従ひて小管を以て烟を吹き辛して日消せる様なり其管は烟草一指撮に過ぎず纔に一吹して盡るにより數度これをつぎかへて吹なり此の家にて最見ものとするは庭の端に一廡を設け其國俗種々の人形を列せるなり右は日本の貧賤なるものより貴富の者まで各種の俗を示せるものなり其人形を見又は家の後ろに羅ねたる日用雜品の賣物とを見れば一時間にして些の苦勞もなく遠く日本に旅するものといふとも可なり

同五日(西洋八月四日)曇朝八時半瑞西ミニストルロレイ來る

卷之五

慶應三丁卯年七月六日(西洋千八百六十七年八月五日)晴無事

同七日(西洋八月六日)曇無事

同八日(西洋八月七日)曇朝十時博覽會掛ドナ來ル

同九日(西洋八月八日)晴無事

同十日(西洋八月九日)晴荷蘭學生本邦人并に荷蘭人ボウトエレ到着ス

同十一日(西洋八月十日)晴此の日巡國從行并に留守の人を定めらる

同十二日(西洋八月十一日)晴無事

同十三日(西洋八月十二日)晴無事

同十四日(西洋八月十三日)晴條約濟の各國公使館へ引合の事あり

同十五日(西洋八月十四日)晴午時各國公使館へ尋問の使者出る此の夜佛帝初代那

破烈翁誕辰の前宵につき市街燈光盛にて人群をなす

此の日は先帝誕辰の當日にて佛國中の大祭日なり四民各其職業を廢し美服盛飾にて遊息し或は知音を往來し終日群聚して歡を盡す夜に入ば王城の前面よりアルクデトリヨンフまで兩線の市街は瓦斯燈又は小提燈など多く點じ路傍に沿ふ瓦斯燈は更に其數を増し五色の玻璃を以て火色を彩り恰も白晝の如し又毎歳の恒例にて其餘各所に細工火の舉あり就中アルクデトリヨンフの觀火を最第一とす夜九時頃より始め第二時過に至る青紅紫白金色銀色の火光絶間なく空中を裝填し尤壯觀なり市街には滿都の人士長幼となく往來縱觀して殆ど立錐の地なきに至る各戸の階上には其知音を集ひ盛宴を開き樓に倚て看ものも亦多し夕方より馬車通行を遏む益行人多くして過ちあらんことを恐てなり大概曉に徹して止む此の夜フロリヘラルト其宅に招待せるに陪す

同十六日(西洋八月十五日)晴午前十一時荷蘭新公使ソイレンデンーヘル來る

同十七日(西洋八月十六日)小雨無事

同十八日(西洋八月十七日)晴午後二時コロネルを尋問せらるフロリヘラルトクレイ來る

シイボルト其國許より至る○英國ミニストル來り來廿二日英國へ巡覽の事を言ひ遣はされしが女王其別業へ參られ外國事務大臣にも陪從せしに因てしばらく猶豫あらんことを請ふ尤それが爲に各國へも巡回せられざらむは王にも本意なければ各國巡歴濟させられ内端略禮にて招待いたし度由を申越されたり

同十九日(西洋八月十八日)晴無事

同二十日(西洋八月十九日)晴夕シイボルト英國へ發するによりて來り告別す

同廿一日(西洋八月二十日)晴無事

同廿二日(西洋八月廿一日)晴此の日荷蘭公使へ問合の事あり

同廿三日(西洋八月廿二日)晴無事

同廿四日(西洋八月廿三日)晴無事

同廿五日(西洋八月廿四日)晴此の日英國に留學せる生徒來候せり
同廿六日(西洋八月廿五日)晴生徒英國へかへりぬ
同廿八日(西洋八月廿七日)晴夜雷雨此の日語學教師來りフロリヘラルトも來候す
同廿九日(西洋八月廿八日)晴朝より各語學を始むシーボルト英國より歸り來候す
八月朔日(西洋八月廿九日)晴此の日本國より書信至る
同二日(西洋八月三十日)晴遽急の事あるによりて靄山外三人歸國を命せられ本草
學生某も事充て共にかへらしむ○佛都博覽會の舉も稍事充て各國の帝王
も追々本國に歸りしかば我公使は兼て期したる如く各國を巡廻せんとして
巴里斯に在留せる瑞(スウェーデン)字(フィンランド)荷(オランダ)白(ベルギー)意(イタリア)葡(ポルトガル)公使へも打
合の使者を出各國便宜に従ひ路次の都合を謀り先瑞西國より回歴せんとおもひ立れたり
同三日(西洋九月一日)晴フロリヘラルト來り巡國の發程期を伺ふ近日に巡歴出
朝の期を定めらる此の日人々博覽會を又覽るに陪す午後三時歸る夫より

靄山はアベンニューデモンタンクへ行て卯三(瑞穂)等に會しカリレーに至り
同僚等にも告別す

同五日(西洋九月二日)晴明日は巡國出朝とて各旅裝繁忙なるに御國の使者此の地
へ至るよし蘇士より電線の知せあり

八月六日(西洋九月三日)晴各陪從の人々旅裝も整ぬれば朝六時瀛車にて佛都を發
し午前十一時半トロワといふ所にて午飢し

此のトロワは佛國九十有餘郡中の一なるシャンパンギユといふ郡内
の一村落なりシャンパンギユ郡は葡萄名産の地にて醇酒釀造の家居も
多く就中シャンパン酒を第一とす蓋し其郡名を其儘酒名に用ゆるなら
ん此の日午餐に一嚼を試みしに果して他の産に優ること數等にして其
名空しからず

夕八時瑞西國パールといふ所に抵り三王といへる客舎に宿りぬ

此の旅舎有名のランヌといふ大河に臨みて河水欄下を侵し夜景殊に清

く暑熱を滌き聊旅疲を慰めたり
暫時ありて此の地の鎮臺來訪せり

同七日(西洋九月四日)晴朝八時鎮臺の郷導にて說法所並織物細工所等を見るに陪
す

此の織物細工所は格別廣大ならざれども都て婦人の首飾又は頭上覆面
等に用ゆる極めて緻密なる絹紗など製する所なり又別に麻を紡績して
織物を製す恰も本邦五仙平の如くして更に精巧なり

午後一時半國都ベルンへ抵りベルネルホフと云ふ旅舎へ宿ぬ大統領の令
に因て士官來候せり

同八日(西洋九月五日)雨此の地四方巒多して常に雲霧掩毎朝日出三竿の後漸く散
消すと云此の日は大統領面謁の事兼て打合ありて午時十一時迎の車駕四
輛客舎に來る一行禮服にて陪從し本地の議政堂へ趣て謁見の式あり大統
領副大統領其他の貴官打揃ふて面謁し互に兩國懇親の祝祠を述べ式畢て

後大統領の居宅を訊問す夕五時大統領より樂師八十人許客舎へ歸りて樂
を奏せり

此の樂調陸軍行進の節用ゆるものにして舞踏歌曲などに用ゆるものと
異り最も勇壯にして頗る古雅なるを覺ふ都下の士民異邦の人を見奏樂
を聞とて客舎前に群集せり

同九日(西洋九月六日)晴朝五時半軍事總督の郷導にてツーンといふベルンより十
里餘隔たる所にて點火調兵を觀るに陪せり調練の人數歩兵四レジメント
(一七百人餘)大砲二坐(八門)騎兵二中隊(中隊三)撤兵二中隊(中隊六)整頓行軍の
駈引より攻撃襲討の舉動あり其指揮周旋綿密にして尤自在なり

此の調兵都て農兵にて僅一箇月程の調練にして整へりと云ふ國內の調
兵の法は農に取りて農時を妨げず其約を緩にして其能を盡さしむるを
政體の要とす故に小國といへども舉國二十萬の臨時護國兵あり其法簡
易輕便にて少しく肅整を缺くと雖ども其勇敢なる却て他の月督日課の

兵に優るといふ

調兵畢りて好景樓といへる客舎へ郷導ありて饗應あり(此の時調兵に出し役々士官十三人許出侍食す)午後舟にて湖回し此の地有名の豪富バロン某の居宅を見る(此の居宅ツレン湖の涯に瀕して建築)樓上湖水を臨み(湖の周圍凡十里餘)水碧砂白四圍山巒蒼々として黛眉烈しヨングフロウといふ山(ヨングフロウとは未通女の義にして此の山峻峰高く聳へて人のいまだ登り得ざる意をいふとぞ)白雲高く撃け積雪不斷ありて銀の如く天際に突立し其直徑一里餘もあるべく我國の富士よりも少し優りて高からむと思はる諸山裾邊に連り恰も綠兒の白頭翁を慕ふに似たり瑞西中の最佳勝なりといふ宅の主人杖によりて老病を扶け迎送をなして敬禮を盡せり頗る非凡の體相ありて最殊勝に見ゆ歸路亦立寄りて茶など囁し猶繰疊に至り大砲町打地雷火の試業等を見る夕五時汽車にて歸る

同十日(西洋九月七日)晴午後一時ベルンの武器廠に至り大砲小銃其外數多の兵器の新發明精巧なるものを見る軍務宰相始終郷導し荷蘭コンシユルセテラ

ールも亦來り陪せり夫より飼熊を看る

此の地古來よりの風習にて熊を畏る戸々其形を作りて邪氣を避る符とす都府の西北に大なる園を作り二つの大熊を養畜す往來の人餌を與ふるにパン菓子の外を禁す千八百六十一年三月三日夜英國の甲必丹一人過て其園中に陥り此の熊と闘ひしが終に熊の爲に烈れたりといふ此の地ベルンといふも獨逸語にて熊のことなりとぞ

夕五時歸て旅舎の向ふなる山の晩景を見んとて人々陪して行々險を攀る凡十五町許にてし巔に達す時に落暉なほ諸峯に駐りベルン市街も眼下に簇り人馬の行通ふ様など風情あり少焉して月出烟霏搖曳し眺望最佳なり同七時半下り歸る

同十一日(西洋九月八日)晴此の日士官の郷導にて此の國有名の時計を製造する日内瓦といへる所に抵り其技を見人々多く陪し午前十時汽車にて湖の澱なるペイといえる市街に抵り汽船に乗り午後三時出帆す

此の湖ラアックテシユネイフと云長十里餘幅二三里水波渺茫として蒼海に異らす周圍は群山繞環して處々村落も見へ瀑布泉など數條に懸り恰も園丁の意匠に出たるが如し湖上瑞西第一の高山モンブラン(白山といふ意)を望む白雪堆く夕陽に映じ尤壯觀なり

凡八九里にして夕七時頃シユネイフへ抵りメイトロポールといふ客舎に宿る

此の地は湖の西南に傍ひて頗る繁盛の地なり湖の末流街衢を中截し廣大の鐵橋を駕し往來自在ならしむ其側に小島ありて樹々蔚然として納涼に宜しく總て家居富饒人品も卑しからず處々に時辰機製造所あり時計は歐洲第一にして瑞西人自稱して小巴里と云ふとぞ

本日は大統領も所用ありて此の地に來り且伊太里國の故ゼネラルガルバルジー嘗て羅馬帝を廢し宗門閉關の故習を除き全歐洲をして共和政治たらしむるの議を主張し此の時同志糾合中先此の國に來り同盟を催促す

とて此の日到着せしかば闔街最混雜せり

同十二日(西洋九月九日)晴午前十時より時辰機製造所を見るに陪し夫より金工所等を見る此の地の富豪バロンロウチーユルといふ者來りて招待せんと乞ふ夕五時陪從す(家宅は本地より二里許隔り郊外にて庭園も廣く奇珍古雅の器物多く蓄へり)

同十三日(西洋九月十日)雨今日はベルンへ歸るとて朝六時瀛車にて發し午前十一時半ヌーシヤテルといふ小市街に抵る此の地は電線工夫の根本にて近來猶新發明の字面摺出しの工夫出來せしよし故のミニストル郷導にて是を見るいかにも精巧奇妙言語の及ばざる所なり夫より鳥獸の眞形數多集置所的打銃砲稽古場天文臺觀月樓などを見て夕六時瀛車に乗夜九時ベルンへ歸る此の夜靄山御國の使者附屬等を導き公使に公用ありて此の地に到着すとてそれの公書を出しくさぐさの物其他各家書などもて届來る且議すべき公事多ければ深夜まで打寄相語へり

同十四日(西洋九月十一日)霧朝白耳義國より使者來り九月廿五日より同廿八日ま

で本國祭日より其節來訪ありたきよし招待書を出せり

同十五日(西洋九月十二日)晴明日は當地を發し荷蘭國巡回の積なれば大統領へも達し此の地に在留の其公使へも其由を書遣し夫々從行の人に引分れ半は從行し半は佛都に歸ることを取究ぬ午後一時靄山外三人は急遽の公事に由り歸朝するとて巴里斯へ向き出發す夕六時大統領より夜餐の招請ありて一同陪從す

同十六日(西洋九月十三日)晴午後一時半荷蘭へ出發す(佛都巴里へ歸るべき人々とは半時前出發す)夕五時再ハアルへ抵りトロワロワの客舎にて夜餐し夜九時又汽車に乗り徹曉す

同十七日(西洋九月十四日)晴朝六時半バアテン國タルムスタートといふ所にて小憩し午前九時マイヤンスに抵りランヌ河の涯より汽船に乗る小巒曠野の間に村落市街近來に見ゆ夕五時ホンヌに抵り金星といふ客舎に宿る

同十八日(西洋九月十五日)晴朝六時汽車にて發し午後一時ランヌ河を濟る河幅廣く水深くして剩時々洪水の患あれば橋梁の架すべき術なく巨船を泛め輓

軌を通し汽車來れば轍道に載せはしらしめ平地にひとしくさらに滯碍なからしむ午後一時荷蘭國界セイヘナールへ抵る荷蘭より迎としてリュータナントコロネルフワンカツベルレン及御國の留學生等出むかひ夫よりウエツトレフトへ抵り同二時半ロットルダムへ至り馬車に移りて直に市街を巡覽ありて同三時半發す

此のロットルダムはマアスといふ河に添たる一都府にて頗る繁花の地なり蒸氣帆前船とも多く碇泊し總て荷蘭内地へ來舶する人の上陸せる所なり砲臺警衛の軍艦も多く備はれり

同四時國都ハアへに抵りぬ汽車場まで國王より迎の馬車三輛を粧ひ側役パロンスヌーケルトテシヤウベルといふ者出迎ひてホテル好景樓といふへ請じぬ(此の日到着するを見んとて土)少焉ありてコロネルとも來りて安着を祝せり巴里へ電線をもて到着を通じ留學生等も來祝す

同十九日(西洋九月十六日)曇朝議事堂にて閩國の大禮典の集會あるにより見物あ

るべしとて兼て國王よめ招待ありて午十二時迎の馬車來る各禮服にて出らる禮式掛も出迎ひて堂中棧敷様の所に請す午後一時國王及貴官の大臣等各馬車にて來り途中は歩兵隊にて警衛し王車の前後は騎兵凡四小隊(小隊三十)にて圍み王車は八馬每馬御者二人宛衣服馬車の粧ひ殊に美麗を盡せり王車に従ひ聯行せるものは二馬に駕せし車三輛六馬に駕せし車三輛王車共に七輛なり國王議事堂に着し中央の小高き所に座を設け貴官及諸民の惣代なるもの其前と左右に羅列し即國王着座して懷中より一小冊を出して高聲に是を讀む其趣旨は先其年の無事百姓の安寧を祝しそれより政治可否得失凡審理財賦吏胥の曲直其他萬般の事を下問せらるゝにて毎年恆例なりといふ式畢りて國王歸去せり當方も續て歸去す其途中市外田園などを遊覽し夕四時歸宿す

同廿日(西洋九月十七日)曇晚晴午時銃砲製造所歩兵屯所等を見るに陪す夕五時國王謁見の式あるにより迎の車輛二輛來(一輛は國王の乗車にて四馬を駕し裝飾最壯麗なり御者四人共二人は駕せる馬に乗

せて御先驅の騎兵二騎(各同様の禮服にて美麗なり)少焉ありて護從のコロネル來りて郷導し從行都て六人夕五時半王宮に入り國王へ謁見し兩國懇親の祝詞を述べられ國王も厚く來意を答謝あり禮畢て太子の別宮に抵り夫よりフランスフレデリックといふ國王の弟の邸を訊問せらる歸舍の後此の地中惣代ヨソノヘールブルステイといふもの來り安着を賀す英國より在留せる理事官來り候す巴里留守館のものより書簡を以て安着を賀す

同廿一日(西洋九月十八日)晴西北の港ニユーヨジヅプといふ所にて軍艦製造所等を見るに陪すコロネル郷導し朝七時より汽車にて午時同所に達す水師提督并附屬士官數人禮服にて出迎ひ許多の兵卒を出し警衛せしめ尤懇懃鄭重なり途上兵隊は捧銃の禮をなし樂手は奏樂して祝せり先客舎に請じ暫く憩息ありて港口に碇宿せる艦中へ請す時に總軍艦祝砲せり水夫は皆橋桁に登らしめ御國旗を掲げ艦へ移る每必祝砲ありフランスアンリイといふ總鐵船は市街に接近なりとて祝砲なし軍艦製造いづれも宏大堅牢にし

て最新奇製多し看了りて病院を見る夜十時歸宿す

同廿二日(西洋九月十九日)晴午後二時フランスフレデリック及アレキサンデル客舎に來り賀す魯國在留ミニストル「ロットルダムシドクトルキルシス等來候す

同廿三日(西洋九月廿日)晴朝八時アムストルダム府を見るに陪す

アムストルダムは荷蘭の別都にてハアへより市街も廣く且繁華なり河海舟楫の便宜しく川筋多く市街を切斷し處々に大橋を架し中には橋桁を左右に旋回し又は上下する仕掛あるもの多し蓋通船帆橋の碍りなからしむるなり地勢略本邦大阪に似たり商估銀行なども大なるありて貿易繁盛なり

同十時先來丁といふ所にて蒸氣もて水を汲上る器械ポンプを見る(是は同る巨大の池沼を開鑿する爲め用ゆるといへり)夫よりアムストルダムチへ抵りヂヤマン(金剛石)製造所造船所及博覽會等を見る此の所の鎮臺及水師提督等郷導せり

○此總鎮臺は本地至重の任にて高年にして才略拔群の者ならでは任に

堪へず往昔は威權國王にひとしかりしといふ

同廿四日(西洋九月廿一日)曇午前十時レイデンといふ所へ出遊せるに陪す是は巡回中傭入の書記通辯官シーボルト亡父の別業在るによりシーボルト其所へ招待せしなり此の亡父は年來御國長崎に在留せしものにて在留中聚めたる本邦の古人の書畫器物珍奇の品など都て御國様に陳羅し且庭前假山池ありて樹卉の植並べも歐風ならず殊に目に染て人々坐に感慨を起せり園翁網を擧て魚を得料理などし懇に饗しあえり

同廿五日(西洋九月廿二日)午後一時荷蘭國太子の弟アルキサンドルを尋問す白耳義のシャルジタフェール來候す

同廿六日(西洋九月廿三日)曇此の日國王より再懇親の招待あり但留別の謁見なり夕五時迎の馬車來る迎送應接甚懇懃鄭重なり蓋此の國は各國と異なり御國と年久しく和親を通じ交易をなし遂に信義を失はず且千八百年の初佛

國那破烈翁に侵撃せられ國殆んど淪滅し東洋所々屬國にも本國の威權行はれず港々にも其國旗を建るを得ざる程なりしが僅に本邦長崎港のみ依然國旗を掲るを得たりしかば永く是を徳とし常に御國の信義を忘却せずといふ其交誼久しきを経て衰へざる感すべし夜八時歸館側役ヌカール及コロネル其外留學生等へ夜餐を具す同夜白耳義ミニストル來候す

同廿七日(西洋九月廿四日) 晴朝八時巴里へ書を寄す同十時國都を發す此の日國王汽車を出して一行の者を乘らしめ其國境まで送る側役ヌカールは汽車場まで附添コロネルはロツトルダムまで留學生等は荷白國境ヨウセンダールまで送れり暫時の旅況も告別に至れば流石に感情起れり午前十一時半ロツトルダムへ抵り汽船に移りムルデーキまでゆき上岸し再び汽車にてヨーセントールへ着く此の處へ白耳義國王の汽車もて郷導の官員數人來り迎ふ夕六時白耳義國都ブリツクセルへ着く汽車會所まで禮式掛及甲必丹ニケーズ馬車を備へ迎へぬ同六時旅館へ就く所の人々途に群り冠を

脱し禮せり汽車場へは兵士及取締の者多く出して警衛頗る嚴肅なり

同廿八日(西洋九月廿五日) 曇朝カピテインニケイズ來り國王謁見の事申入午後一時迎の馬車三輛いづれも壯嚴の粧ひにて來り迎ふ第一車は郷導の甲必丹ニケイズ并陪從の人々第二車は公使并傳從其外禮式掛シーボルト等第三車も陪從の人々なり同二時半謁見畢り(謁見の式大樂衛蘭と同じ尤王妃も同席な羅列し稱裝甚壯嚴なり) 歸宿後直に外國事務執政來問す夜七時甲必丹郷導にて國王催の劇場を見るに陪す(此の劇場は巴里の體裁に同じければ略しぬ) 同十一時歸宿す

同廿九日(西洋九月廿六日) 晴朝十時半陸軍總督郷導ありて陸軍學校を見るに陪す

火術場(細工火烽火昇降煙等修業する場なり) 舍密術場(藥品又は染工に用ゆる場なり) 等を一覽し

夫より兵隊屯所(歩兵整頓壯健の舉動よりして旋回行進の手前甚整肅なり別に木枝を以て接戦に及ぶの舉動杯甚自在なり又細き鐵筋を以て相撃の技をなす覆面小銃等を以て本邦演撃の具にひとしけれども其製甚だ疎なり相撃業は軟弱にて迂濶也) 等を觀亦園囿なども遊覽し夕五時歸宿す此の日此の地の大祭日にて夜八時頃より北郊にて觀火の舉ありて招待せらるるに陪す行程一里半許にて郊野に至

れば國王の棧敷を設けて在り此の所へ請じぬ

此の祭祀は往昔當國の初代王荷蘭より分割して此の國を創立せし祝日の由毎歲此の所にて烟火を擧て興とす其仕方雙方へ竿を立麻綱を張り一人の曲藝師美麗に裝束し其綱の上を歩す竿の長凡十五間許綱の亘り凡三十間もあるべし曲藝師手に長き竿を持ち綱の上を緩歩し行詰り後面に跡へ逆歩する兩三度にして次第に疾走翔るごとく或は中央綱のたるみにて綱に手を掛け足を投じ身を翻し綱上に逆立し又は一足を綱に掛け身を逆下し看官をして寒心栗股せしむ其休息中は種々の細工火を揚げ空中に點じ末尾には彼曲藝師の持し竿頭より火を發し其人の影は見えず火鎮して又綱上を徐歩す此の時下の觀火場より數千の細工火一時に連發し青紅紫白の火光空中に翻騰し尤奇觀を極たり

此の夜群參の看官人凡二萬人餘細工火の失費一萬五千フランク程なりと云ふ

同晦日(西洋九月廿七日)晴朝九時甲必丹の郷導にてアンベルスの礮臺を觀るに陪す午前十時一の臺場に至る此の臺の築立方外面は土石にて屈曲長蛇の如く堤の下は深き溝にて水平面に充ち内側の入口兩所に鐵橋を架して通す砲臺の形扇を開きしごとく外面斜横にして其堤内側は石と瓦にて築立て土窟を多く造り其中に彈藥砲器械を貯へ兵卒屯所を設け其扇の要と思しき所に一の宏壯なる礮墩を設け數十門の大砲を備へ其外面と要と相接る所は深溝にて僅に七八間の土坑を設て外面と要との往來をなし土坑の兩側には又十門宛の大砲を備たり交戦の時外面の砲墩礮にて相接し萬一失利なれば要領に引纏て防禦せる爲なりと云其制度宏壯緻密なる一歴にて識得すべからず午後一時アンベルスへ抵り市街周圍の砲臺を見る尤も未成中なるものありて築立方等も仔細に見へて極て巧なり此の國は周圍陸地にて海港なければ陸戰の設精密を極めたり且此地は國中第一の要地にして緩急の時は國民を移し舉國是を衛る故に地砲墩にて圍繞せしめ其間

々に前顯扇形の礮臺を八箇所に設け互に犄角の勢をなし防禦に備へ兵糧を常に充實し國を合せて之を守る歐洲舉て攻來るとも容易に敗るべからずといふ此の地到着の節ゼネラル出迎ひ礮臺巡覽の節は勤番の士官等郷導して總て式禮等嚴肅なり

九月朔日(西洋九月廿八日) 晴朝十時昨日殘したる礮臺等を見る一覽後アンベルスにある礮車製造所諸器械及彈丸製所等を見る

同二日(西洋九月廿九日) 曇夜七時半兼て設置し劇を見るに陪せり

舞臺の周圍は警衛の兵士を出して固め舞曲始れば坐頭のもの出て來臨の恭を謝し其接待周旋都て國王見物の時と同様なりといふ其舞曲美麗を極め所作様々の仕業あり

同三日(西洋九月三十日) 晴朝八時カピテイン郷導にてリエージといふ地にて銃砲製造の器械を見るに陪せり午時汽車にてシラアンといふ地に至り製鐵所を見る反射鎔鑛の二爐鐵材精製の法鋼鐵の吹分方石炭取掘方(石炭は都て地中より掘取る)

其深さ凡四百メートルありといふ 諸礮車及蒸氣車鐵軌其外諸器械の製造等を見る此の地の總裁其居宅に請じ響應鄭重なり夜十時歸宿す

此の製鐵所は最盛大宏壯にして周圍凡三萬坪程あり職人七千五百人より一萬人許凡一年の製作金高通例三千萬フランク許りなりといふこれより先き英人ニツクといふ者此の地に來り製作を始めしより次第に其業弘まりて今に至りては歐洲中有名の地となれりといふ

同四日(西洋十月一日) 晴朝九時カピテイン郷導にて汽車に乗りマリートラワニエトといふ所にて鏡及硝器等を製するを見るに陪す同十一時同所に至る車四輛を備へ製造所の役々十人許出迎ひ製造所の頭取は其男子を騎兵にして迎はせ邸宅の前に至る頃に三十人許の樂師をつらね奏樂を興し到着を祝し居宅前には其親縁なる婦女子を美々しく粧ふて出迎はしめ堂に請じ午餐を饗す(此の節親縁の者數人前導し給仕等いたし別席にて樂人は樂を奏し響應善美を盡せり) 是より製造所へ郷導し種種の器械珍奇を備へて其業の精巧を見せしめ歸路の節は道路兩側に諸職

人立並祝詞を呈す其人員凡三百人餘なるべし其前には樂を張りて道路を清くし尙又其家に請じ表の方には二百人餘の婦女の職方何れも粧を凝らし打揃ひて祝詞を述べ頭取始めて役々七人汽車にて送り來る

同五日(西洋十月二日)曇郷導ありて午後一時繪圖面學地理學校を見るに陪す本國の精細地圖及歐洲全圖其外砲墩築城等の諸繪圖類を看るに其細密精巧を極め新奇工夫の至る所言語の及ぶ所にあらず夕字國シャルジダフヘールより巡回の期限を問ひ合せあり

同六日(西洋十月三日)晴朝十時半カピテーイン及此の地の全權并近郊山林を支配する官員來り郷導して兼て設るチュウルンといふ所にて畝獵を觀るに陪せり畝獵場は國王の囿にて四方十町餘もあるべく幽靜なる地にして樹林茂密禽獸蕃畜四圍土塀に築立て其内に溪流を引て禽獸の來安き様になしたり勢子とも二十人餘四方より一時に逐立て禽獸の其小溝を廻り走るを要射するに鹿兔の類多く此の日の獲物は鹿五足兔六ツなり常に其囿に

畜置ける鹿は七十五兔は數知らずといふ勢子共の逐立方奔走敏捷なる射者の馳駆詭遇尤神速なり此の日午餐其山林に草茵し一大の食盤を設け上下相集り同餐す野興宏濶頗る清味を覺ふ夕六時歸る此の夜カピテーイン其外郷導者へ同案の夜餐を具し馳駆の獵師へ佛貨三百フランクを賜ふ

同七日(西洋十月四日)曇國王より再び謁見の事を申越さる此の地の乘馬を試んとて調兵場へ至らる

同八日(西洋十月七日)晴國王より郷導ありて都府外の調練場にて陸軍三兵の火入調兵を觀るに陪す午前十時半迎の馬車四馬に駕し御者六人内四人は駕に添二人は其馬に跨がり外に導者一騎の御者唱道せり王宮の前達を左りに折れ並樹の大衢へ出なを旋り十町餘行て郊外の調練場に至る調兵順序をなして陳列し士官樂手歩兵夫々禮式等ありて先の陳列せし兵隊各其長にて指揮し護送して場所に至る兵隊は場中各所に屯集し夫より將士指揮して攻撃襲討接戦の舉動あり

此の日の人数は歩兵三大隊大砲一座騎兵三隊樂手隊共に同勢二千五百人餘と云各隊連發の時は砲聲整霽雷霆の如く煙燭天日を蔽ひ甚壯烈なり畢りて兵隊整頓の上セテラールロナイル棧敷に候し公使馬上にて各隊の陣列を巡視せらるセテラールロナイル附從のカヒテインシイボルト其外人々隨從せり總て兵隊捧銃奏賀の禮あり

公使巡回し了り棧敷に就き午後二時歸宿す

同九日(西洋十月六日)曇夕六時兼約の如く王宮に請し國王同案の夜餐の饗ありとてカヒテインニケース迎の馬車を備ふ第一車は公使并傳從カヒテインシイボルト第二車第三車は傳副の人々なり王宮副門にて下乗あり階梯を経て相伴の貴官陸軍總督其外役々出迎ひ扣席にて暫時休憩せしめ公使は王の燕席に請し附從の人々は次席に扣へ程なく國王公使と共に次の間に至り互に紹介して其貴官と傳副の士官とを引合せ等しく打連て食盤の間へ移る國王は中央公使は右坐に就き傳副の面々并貴官等接伴せり夜餐中は

次席にて奏樂あり割烹調理善美を盡し器皿杯盤燈燭珠玉を鏤めあたり輝き華美を極めたり夜八時半宴徹し樂闌り又王の燕居に請しカツフヘー及種々の名酒を飲ましむ同十時頃歸宿す

同十日(西洋十月七日)雨夕三時李漏生在留のシャルジダフヘール來り其國王太子當節國都に在らざるに付巡回延引あらん事を談せり

同十一日(西洋十月八日)雨朝七時半マコトリウツクレグーといへる荷蘭國の豪家の招待せるに陪せり陶器硝器等製造の場所其他種々名苑奇亭等を見る午夕とも饗應し尤鄭重なり夜九時歸宿す

同十二日(西洋十月九日)曇朝九時白耳義國を發す國王の汽車にてカヒテインニケイス同乗し汽車會所まで送り來る夕五時佛都巴里へ歸館

同十三日(西洋十月十日)曇夕七時白耳義都府に残りし人々跡引纏め歸る

同十四日(西洋十月十一日)曇無事

同十五日(西洋十月十二日)雨午後一時人々博覽會を又看るに陪す

同十六日(西洋十月十三日)曇夜七時シルクデアンペラトリスといふ曲馬のある場所にいたり一同見物す

同十七日(西洋十月十四日)曇朝十時試砲を看るに陪す

同十八日(西洋十月十五日)霽無事

同十九日(西洋十月十六日)晴夕四時白耳義國在留中附從のカビタインニケイス來候す

同廿日(西洋十月十七日)曇暮七時半伊太利國へ發す從行并送行の人々は瀛車場まで先發す此の夜は車中にて徹し朝六時アンペリウルといふ所にて小憩せり

同廿一日(西洋十月十八日)雨昨夜より峽間を經過し新寒の添ふを覺ふ朝來細雨鐵軌の兩傍山壑聳へ危石怪松突兀として路畔に蟠る汽車は其洞中を衝通し溪湍は鐵橋を架して通ず行路嶮峻なれば鐵道も亦至て堅牢なり

此の邊都て巖石多く處々割截洞列して棧道を作り汽車を通ず其傍石炭

など出す所あり霜露早く墜ち木葉紅黃を翻し山骨青苔を見はし瀑勢白綫を懸く車中迅速の眺望といへども聊趣あり

午後一時サンミセールへ抵り是より山巔嶮峻にていまだ鐵軌汽車の設なき故ジリジャンスといふ旅行馬車にて山頂を踰るなれば日暮ては覺束なければ此の處に宿らんとて家を覓るにオテルテポストといふ一の狹隘なる客舎のみ漸く一行の膝を容たり

サンミセールより伊太利國スーザまでモンズニ一の諸山連り長蛇の如く兩國の間を中斷して峽路險艱馬車の行程凡十時間宿すべき所なくスーザよりチュランの汽車は夕五時より發する定なれば此の處に宿せしなり

第二時半汽車場にて馬車を雇ひしが一車のみにて一行を容るゝに足らざれば半は其車のかへり來るを待ち頓て客舎に至るに主人打驚きたる體にて出迎ひやゝ樓上に請じぬ各始めて坐に就くいかにも陋隘不潔を究めた

り夫より又馬車を雇ふて村落の風を見る夕三時頃歸る(此の地は四圍山巒聳
へ嶺上には不斷雪あり
所すくなく)徹戸も亦旅況の寂寥を添たり

同廿二日(西十月十九日)晴朝六時ジリジャンヌと云馬車二輛を雇ふて發す

此のジリジャンヌといふは巴里邊にて用ゆるオムニ、ブといふ車に同
じく其制長大にして尋常の馬車に異なり一車に八人又は十人を載せ二
階にして階上に荷物を容る平坦の地は二馬を駕し峻路には六馬八馬十
二馬を駕し處々に會所ありて馬を取換へ又は水飼などして疲勞を助く
頗る簡便なり先年歐洲汽車發明の前は總て旅行に此の馬車を用ひたり
し故今も僻郷は故態を存すといふ

吳路を曲折し或は溪に傍ひて朝八時一村落に抵る村中瀛車及鐵道を製す
る器械あり是は佛國商人の戮力し此の峽路を開き巖石の半腹を洞穿し瀛
車を伊太里國まで達せしむことを謀る也とぞ又馬車通行の路傍には別に
小さき鐵軌を作りてあり是は米利堅人の發起にて從來の吳路に沿ひて小

瀛車を通せしめむとて爲せるなりとぞ山行愈深くして道路益險なり其危
嵩絶壁石磴縈委するに至りては車を棄て徒行攀登して絶嶺に達すれば雲
雷を足下に躡み星斗を頂上に捫す中腹には處々宿雪斑々として頗る攀躋
の渴を醫するに足る嶺頭に人家二三軒あり馬を代らしめ又は鐵軌工人の
憩宿する所なりといふ

サンミセールよりスーザまで馬車の馬を替る六次其始は二匹四匹又は
六匹中は八匹峻路にいたりては十二匹を駕す其艱險しるべし

其嶺を下らむとする傍に石柱あり佛蘭西伊太里の境界なり其より下りて
漸く平夷なり雲霧消て初て伊太里の諸山を望む夕四時半スーザ瀛車會所
に抵れば伊太里國のコロチールイシヤケエードボラヤニといふ者迎接せ
り直に瀛車にうつり夜七時チュランへ着きホテル「デヨロツバ」といふ客舎
に請し郷導使もともく來り同所へ滯留せしめむとの王命を述べ此の夜
巴里へ電線を達す

同廿三日(西洋十月廿三日)曇朝十時コロチル來り郷導し國王の別宮及古代の戎器を貯ふ所説法所等巡覽ありて午後一時歸る

別宮の玄關及石階とも總てマルブルといふ白き石にて(礎石の類)築き立最瑩潤光澤あり宮殿椽角等悉く金を鏤め巨大の油繪の額を掲げ戎器藏は諸國より聚め得たる刀劔甲冑小銃の類多し其中に御國の騎馬武者の像ありしが其甲冑の着けかた馬具結束の仕方等多く其實を得ず

此の地は當國の故都にて市街も廣く諸宮殿杯もいと美麗なり

夕六時七分郷導ともに氣車にて同所を發せり

同廿四日(西洋十月廿一日)曇朝八時伊太利都フロランスへ抵りカランドホテルデベエイといふ客舎へ着く(但氣車場まで禮式掛り)のもの等迎ひ候せり)

同廿五日(西洋十月廿二日)雨朝九時コロチル及禮式掛來り此の地國王の別宮へ郷導ありて種々奇物珍器油繪石細工等を見るに陪せり午後英國在留公使來候す

同廿六日(西洋十月廿三日)曇夜雨朝八時附從のコロチル及禮式掛郷導にて議政堂并石細工所(モザイクといふ此の地石細工名産なり)を見るに陪せり議政堂の中央には當代國王を寫眞せし油繪を掲げ其兩沿には先年伊太利國諸大戦争の圖などを多く掛並べ會議の式は毎歲十一月より(但西洋曆なり)四月迄諸民の惣代政府へ加祖の者まで其議に反せしものを左右に分ち中央には國王并貴官にて一の國論を出し是を討論せしめ其可なるを折衷するといふ(但國論に反せし者は左に署し加祖の者は右に着坐とせしむ)又別に高き棧敷を設け各國在留の公使を引て其議を興り聞かしむ且其面前の高き棧敷には此の地のミニストル始貴官の婦女出て是を聽問す其より細工所を見る種々珍奇の細工あり

石細工は此の地第一の産にして黒き硯材様の石に種々の模様を琢したるものなり其精巧尤細密にして亦優雅なり其製造の品は食盤小机函石板及婦女子の胸挂の類多し一の小函石板を製作するも五六月を経る其精密なるに至りては十年十五年の久しきを積て成功を竣るといふ紫碧

紅白黄黒其餘間色の石を聚め人物鳥獸花卉草木其他種々の形を彫琢す
いづれも瑩滑にして真に迫る

同廿七日(西洋十月廿四日)晴朝七時禮式掛來りて國王謁見の事を談す同十時王車
二輛を備て公使を迎ふ嘗て國情云々を告げ(蓋羅馬の事件なり)諸式儀仗省略の事を
請たる故に従者も稍減し午後第一時事畢りて歸宿す夕六時附從のコロー
ネール來り謝し王命を述て曰今日公使并傳從の人々をして烟波絶域に臨
み比鄰親睦の好を結び給ふこと全く御國の厚誼の遠きに及所深く感戴に
堪へず因ていさゝか其意を謝せん爲め此の地の貴重のデコラアションさ
し贈るよし尤傳從陪行の人々へも其等級を以て贈り來る暮七時半附從コ
ロネール禮式掛の者郷導にて劇を見る一同陪せり國王の棧敷へ請し謁見
の時會せし第一等の禮式掛及陸軍總督等來りさまゝ々々響應して夜十一時
歸館

同廿八日(西洋十月廿五日)晴夕三時馬車にて郊外を見るアルノといふ都府東北よ

り出る川に添ひて樹木繁茂し遊歩佳地なり○當時意太里國には故セネラ
ールたりしガルバルシーといふもの羅馬廢滅佛法掃除各國門地閭閻の舊
習を洗除し全歐洲をして盡く共和政治たらしむるの説を唱へ此の國政府
貴官の者を多く是に同意し頻りに國王に逼りしが其淵源深くして猶次第
に滋蔓し已に佛蘭西より羅馬へ加勢の爲め人數を繰出し意太里へ戦使を
出し羅馬に代り戦争に及んとせり國王には素より佛國に戦争の意なけれ
ば辭を構へて時機を延したるにガルバルシーの奇計にて國民愈々騷擾し
舉て羅馬を攻撃の勢をなし其中には羅馬に潜入して處々侵略に及しもあ
りて佛國よりも亦頻りに兵を送る聞へあり自然和議破れなば一亂に及ぶ
べしと騒然たり

同廿九日(西洋十月廿六日)晴午後一時半都府東北の山々を見るに陪す夜九時英國
ミニストル書記官來候す同時氣車にて別都ミランといふ所へ發す

十月朔日(西洋十月廿七日)晴朝十時ミランへ抵る即時太子の傳ゼテラール來り安

着を賀す

此のミランは意太里國一箇の別都にて頗る富饒の地なり市街も廣く民戸も稠く故に太子別業とす往に意太里王チュランの都をフロランスに移せしが其地陋隘なれば再び此の地に移さんと欲せしが其費用巨多を患て未果なりといふ

客舎の前に假山水を築きし諸人遊憩の地あり(此の遊憩場は市人舉疎し今日造築せしなりといふ)今日は日曜なれば此の園に闔都の兒女等群集せり午後三時公使遊覽の爲め太子より馬車二輛壯麗なるを備へてゼテラール郷導にて市中處々を見るに陪す兒女等蟬集して道路を遮る郷導鳴鞭して夕五時歸るゼテラール等へ夜餐を具す太子の使者來り明日此の地の囿苑にて共に畋獵せんと請ふ

同二日(西洋十月廿八日)雨天なれば午前十一時公使太子の居館を訪ふて今日の畋獵を止めぬ午前太子も公使の旅館に來り告別す夜九時公使汽車にて此の地を發しフロランスへ歸る

同三日(西洋十月廿九日)晴英國ミニストル來賀し且マルマ島へ巡覽の事を本國王より申越されたるよしを述ぶ尤此の地瀕境へ軍艦をよせ迎へんと約せり

同四日(西洋十月卅日)晴午後三時市中巡覽に陪す

同五日(西洋十月卅一日)晴朝六時郷導來り汽車にてヒーサといふ地の囿苑にて畋獵するを觀るに陪す途中都府有名の寺院梵刹を見る中にも丸き塔の高二十間餘なるが最壯麗にして斜に聳立せる巖々として微風にも堪さらむかと疑ふばかりにて實に奇製なり夫より畋獵を觀る

此の日の獵は騎馬の勢子二十人計四方より逐廻し銃手は小さき松の枝にて作れる小屋に潜みて其來るを要撃す此の時鹿六足を得たり
夕四時畢り汽車にて夜七時歸る騎馬勢子等其外夫々へ賜物あり

卷之六

慶應三丁卯年十月六日(西洋千八百六十七年十一月一日)晴朝十時畋獵主宰來り昨日獲たる鹿

二匹を獻せり乃其一を調理し其一は英國在留のミニストルへ賜ふ

同七日(西洋十一月二日)晴朝英國ミニストルより迎の軍艦今夕リボルヌ港まで至りしかば今夜同所へ一宿明日乗組の事を申立るにより夕四時汽車に乗り此の地を發し暮七時リボルヌに抵りオテルデワシントンといふに宿り英國軍艦へ便宜問合せしが同港規則にて外港突入の軍艦は直に上岸を許さざるよし故に船將躬自ら來迎へがたき旨申來る

同八日(西洋十一月三日)晴朝軍艦より書簡來る風不順なれば午後三時頃まで待るべしとの事なり午後馬車にて市街を一覽し同三時港口に入る此の時軍艦よりバッテリー二艘各本國の旗を掲げ士官禮服にて出迎ふ同四時軍艦に移る

此の日軍艦には國旗數々建て中央に在る最高き橋に御國旗を掲げ其船將士官まで皆禮服にて乗組の時は樂手兵卒例の奏樂捧銃あり水夫は皆橋上に登らせ並立せしめ禮砲は意太里の艦一艘本船間近に在れば其式

なし

本船はエンデミエーランといふ壯大堅牢なる軍艦にて大砲小銃及諸器械とも悉く具備せしが別に船部屋の設なければとて假に舳の方に數部の船室を補理したり直に船中一覽あり風様宜しとて出帆せる處意太里の艦誤て錨綱を本艦の綱に打繋結合漸く解て夕六時出發せり終夜風穩なり

同九日(西洋十一月四日)晴曉風強し終日意太里南邊を航す夜八時船將旅懷を慰めんとて水夫を集へ曲藝雜話をなさしむ

同十日(西洋十一月五日)晴風靜なり朝十時水軍火入訓練を観る

是は船と船との攻撃なれば其運動峻速にして且勁壯なり大砲連發の時は焔烟相掩ふて暫時四方を辨せず畢りに一隊の陸軍各劔銃と槍とを以て敵船を乗超る驅引をなすは其舉動尤敏捷なり船中法則寬優にして嚴肅たり其兵は總て水夫にて平生航行に従事すれども戰鬪攻撃に至りては別に水夫兵卒の分ちなし又別に一隊の陸軍を置くは陸地接近の戰爭

の爲に備ふといふ

午後三時意太里國の孤島ストロンベツキといふ噴火山を近く見る洋中に屹突として立ち其形圓曲にして巔の凹なる處より火炎を噴き出す其烟黯黯として斷絶なしといふ本邦の淺間阿蘇の如し意太里國のナアブル遙に見え時に雲收て海水藍を揉日落て山巔金を貼し眺望亦奇なり夜八時船中又水夫曲藝をはじめ

繩拔の術などあり是は衣服を着せしまゝ椅子にかゝり太き繩もて四支を椅子とも縛り其本の繩尻を持居て上より身を容る程の布袋を被らせ其中にて其繩を解く業なり本邦の在古たる其業に異らず

同十一日(西洋十一月六日)晴雷雨朝十時マルタ島へ抵着す兩縁の砲臺例の祝砲ありて船將士官等禮服にて艤して中央の檣に御國旗を掲げ捧銃奏樂の式あり午後一時港口より馬車にて上陸す騎兵郷導警衛して鎮臺の官衙へ請す門の正面に歩兵一小隊捧銃をなし階梯上り口まで鎮臺并士官二十人許出

迎ひ兩側には赤服の兵士並立せり官衙中の集議場へ請し(正面四五段の)鎮臺は其左り通辯官シイポルトは一段下りて立ち其餘は一同板間に並立せり夫より順次をもて拜し畢りて午餐を饗せり(此の節鎮臺の妻及男女等同案して種々馳走せり)同四時馬車にて市街を巡覽す暮七時半夜餐を供せり(此の節鎮臺並水師提督同附屬書記官等出て同盤にて接伴す)同十二日(西洋十一月七日)晴午時官衙を發し馬車にて城内を見るに陪す戎器等を貯ふ處櫓重門廩厩等を見る午後一時鎮臺郷導にて港口より船にて處々砲臺的打場を見る(打砲凡半時許なり)港内碇泊の軍艦は悉く水夫檣に上り敬禮す夫よりドック及製鐵所等を見る此の節陸軍場には兵士一小隊陳列して式禮あり又製造中のドックを見再乗船し番船の前を過て新港を見る夕四時歸る同十三日(西洋十一月八日)晴朝鎮臺の郷導にて戍兵の訓練を見るに陪す何れも騎して從行せり其場の中央に大隊旗を建たる所へ請し夫より陳列前を一通り巡回ありて又元の處へ駐り訓練始て横陣をなし乍ら縦隊と變じ行軍の式あり最頭の隊は黒き戎衣にて小隊の行進十一隊次に赤衣の小隊二隊又